静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第220集

白岩遺跡・白岩下遺跡

平成18年度一級河川西方川住宅市街地基盤整備（統合河川）
および平成19年度一級河川西方川総合流域防災事業（統合河川）
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

正誤表

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第220集『白岩遺跡・白岩下遺跡』

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正いたします

頁	誤	正
例言　15行目	常務理事兼総務部：平松公男	常務理事兼総務部長：平松公夫
例言　16行目・19行目	望月貴史	望月高史
例言　18行目・21行目・24行目	調査部長：石川素久	削除
例言　22行目	調査担当：足立順司・長友信	調査担当：足立順司・蔵本俊明
例言　24行目	次長兼総務課長：松村亨	次長兼総務課長：松村享
１頁　第１章　第２節の３行目	試掘調査	確認調査
６頁　第２表　31の調査要因	白岩橋建設	西方川改修
49頁　40行目	43・44・45は～	43・44は～
52頁　第37図　中央やや上	43～45…E6 46～57…SX02付近	43・44…E6 45～57…SX02付近
53頁　３行目	46～57は～	45～57は～
53頁　４行目	46～48は～	45～48は～
55頁　35行目	鳥越正道（とりごえしょうぞう）	鳥越正道（とりごえしょうどう）

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第220集

白岩遺跡・白岩下遺跡

平成18年度一級河川西方川住宅市街地基盤整備（統合河川）
および平成19年度一級河川西方川総合流域防災事業（統合河川）
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

今回報告する菊川市加茂字八幡前所在の白岩遺跡は、菊川の支流・西方川の沖積地に営まれた、弥生時代中期から後期を中心とする集落遺跡です。またその下流、同市加茂字東狭間所在の白岩下遺跡は、縄文時代の遺物包含層や古墳時代の水辺の祭祀遺構など、複数の時期に亘る人間の活動痕跡を残す遺跡です。

白岩遺跡の調査と研究の歴史は古く、1948（昭和22）年に西方川の河川改修工事現場から弥生土器片が発見され、これを受けて考古学者和島誠一、久永春男、後藤守一らが発掘調査に乗り出したことに始まります。1951（昭和26）年の河川改修に伴う県立掛川西高等学校郷土研究部の調査では、その成果を当時高校３年生で、のちに須恵器研究の大家となる田辺昭三が、自身初めてとなる報告書にまとめ、後の論文では出土した弥生土器による編年案を提示しました。

この編年は、のちにこの地域の標識土器である「白岩式土器」と「菊川式土器」の概念につながる先駆的業績であり、静岡県西部の弥生時代研究の基礎となるものでした。その後の東名高速道路敷設に伴う静岡大学の発掘調査や、1970年代の河川改修による調査でも、白岩遺跡からは、竪穴式住居跡や川に設けられた杭列、膨大な量の各種遺物が出土し、まさに菊川流域・あるいは遠州地域の弥生文化の研究史に重要な役割を果たした遺跡と言えるでしょう。

同時に、白岩遺跡では、過去の調査を通じて古い西方川の流路や、改修の跡が多く見出された遺跡でもあります。今回の調査地点からも、近代の改修流路のほか、弥生時代の大規模流路や、水害を思わせる痕跡が検出されました。白岩下遺跡も、1970年代に西方川の河川改修工事によって見出され、今回の調査では、古い西方川の川べりで、水を鎮めるための祭祀跡と思われる古墳時代の土器集中箇所が発見されました。

前述のように白岩遺跡および白岩下遺跡の調査は、近現代以降の西方川の河川改修工事と共に進められてきましたが、遺跡そのものも、常に水害など川の流れの影響に脅かされ、またそれを改変する事で川に挑み続けてきた場所であり、単に集落遺跡としてだけでなく、人々が自然の力といかに向き合い共に暮らしてきたかを如実に伝えてくれる遺跡でもあります。

これら自然と人間との間で織りなされてきた営みが、歴史を通じて続けられ、現在の我々自身とも深く関わり続けているものであることを、改めて遺跡とその発掘調査から学び、そのことを後世まで伝えていきたいと切に願う次第です。

最後となりましたが、調査並びに報告書作成にあたり、静岡県袋井土木事務所・静岡県教育委員会文化課など関係機関の御指導・御協力に感謝するとともに、現地調査・資料整理に参加された調査員・作業員の皆さんに対し、その労を労いたいと思います。

2010年３月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　　天野　忍

例　　言

1．本書は静岡県菊川市加茂字八幡前に所在する白岩遺跡、および同市加茂白岩下地先に所在する白岩下遺跡の発掘調査報告書である。

2．白岩遺跡の調査は平成19年度一級河川西方川総合流域防災事業（統合河川）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所から委託を受けた財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が静岡県教育委員会文化課の指導のもとに行った。

3．白岩下遺跡の調査は平成18年一級河川西方川住宅市街地基盤整備（統合河川）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所から委託を受けた財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が静岡県教育委員会文化課の指導のもとに行った。

4．白岩遺跡現地発掘調査の第１次調査は、当研究所蔵本俊明・平塚智久が行い、２区拡張区調査は当研究所足立順司が行った。

5．白岩下遺跡現地発掘調査は当研究所足立順司が行った。

6．調査体制は次の通りである

平成18年度（白岩下遺跡現地調査）

所長：斎藤忠　常務理事兼総務部：平松公男　調査部長：石川素久　次長兼総務課長：鈴木大二郎
次長兼調査課長：及川司　事業担当：望月貴史　調査担当：足立順司

平成19年度（白岩遺跡現地調査）

所長：斎藤忠　常務理事兼事務局長：清水哲　調査部長：石川素久　次長兼総務課長：大場正夫
次長兼調査課長：及川司　事業担当：望月貴史　調査担当：足立順司・蔵本俊明・平塚智久

平成20年度（白岩下遺跡整理）

所長：清水哲　調査部長：石川素久　次長兼総務課長：大場正夫　次長兼調査課長：及川司
事業担当：青井拓司　調査担当：足立順司・長友信

平成21年度（白岩遺跡整理）

所長：天野忍　調査部長：石川素久　次長兼総務課長：松村亨　次長兼調査課長：及川司
事業担当：青井拓司　調査担当：富樫孝志・長友信

7．グリッド基準杭の設定及び空中写真撮影は㈱フジヤマに依頼した。

8．本書の遺物写真は当研究所技術職員が撮影した。

9．出土した石器について、石材鑑定を静岡大学名誉教授の伊藤通玄氏に依頼し多大なご教示を賜った。

10．出土した木製品について、保存処理作業および樹種同定を当研究所保存処理室の西尾太加二が行った。

11．本書の執筆は第１章・２章・４章を足立順司、第３章・５章ほかを長友信が分担して行った。

12．本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

13．すべての出土資料及び調査資料は静岡県教育委員会文化課が保管している。

14. 発掘調査及び報告書作成に当たっては、次の方々から多くのご教示・ご指導を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（敬称略）

橋本久和　平野吾郎　池上　悟　伊藤禎樹　後藤建一　栗原雅也
戸塚和美　塚本和弘　白澤　崇　大橋保夫　伊藤美鈴　柴田　稔
菊池吉修　田村隆太郎　伊藤通玄　松井一明　永井義博　杉井尊器

凡　例

1．本書で使用した方位・座標値はすべて世界測地系による公共座標系の数値である。
2．今回発見された遺構及び番号は、アルファベット記号と数字による略称で表記した。
　例：１号流路→「SR01」・２号溝→「SD02」・１号不明遺構→「SX01」
　　３号ピット→「SP03」
3．遺物の挿図番号は両遺跡ごとに通番を用い、写真図版および遺構図中の遺物の番号は本文、挿図と同一である。
4．注釈、引用・参考文献は第５章の章末に記した。

目　次

序／例言／凡例／目次
第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査にいたる経過 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 4
　第３節　河川改修工事と遺跡の発見 …… 5
第３章　白岩遺跡の調査 …… 7
　第１節　遺跡の立地と土層 …… 7
　第２節　検出された遺構 …… 11
　第３節　出土遺物 …… 18
　第４節　まとめ …… 37
第４章　白岩下遺跡の調査 …… 39
　第１節　遺跡の立地と土層 …… 39
　第２節　検出された遺構 …… 39
　第３節　出土遺物 …… 45
　第４節　まとめ …… 53
第５章　総括 …… 54

挿表目次

第１表　白岩遺跡と周辺遺跡 …… 3
第２表　白岩遺跡・白岩下遺跡の調査歴一覧 …… 6

挿図目次

第１図　遺跡周辺分布図 …… 3
第２図　『小笠郡加茂村資料』 …… 4
第３図　『加茂村資料』掲載の遺物実測図 …… 4
第４図　『加茂村資料』掲載の遺物写真 …… 5
第５図　白岩遺跡・白岩下遺跡の調査範囲図 …… 6
第６図　白岩遺跡グリッド配置図 …… 8
第７図　白岩遺跡１区：全体図及び基本層序図 …… 9
第８図　白岩遺跡２区：全体図及び基本層序図 …… 10
第９図　白岩遺跡１区：第１遺構面平面図及び出土状況図 …… 12
第10図　白岩遺跡１区：第２遺構面平面図及び出土状況図 …… 13
第11図　白岩遺跡２区：SR04平面図及び出土状況図 …… 15
第12図　白岩遺跡２区：SR05平面図及び出土状況図 …… 16
第13図　白岩遺跡２区：SR06平面図及び出土状況図 …… 17
第14図　白岩遺跡１区：SR01出土遺物実測図（土器・石器） …… 19
第15図　白岩遺跡１区：SR02・遺構外出土遺物実測図（石器） …… 20
第16図　白岩遺跡２区：SR04出土遺物実測図（土器・石器） …… 22
第17図　白岩遺跡２区：SR05出土遺物実測図１（土器） …… 24
第18図　白岩遺跡２区：SR05出土遺物実測図２（土器） …… 25
第19図　白岩遺跡２区：SR05出土遺物実測図３（土器） …… 26
第20図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図１（土器） …… 28
第21図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図２（土器） …… 30
第22図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図３（土器） …… 31
第23図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図４（土器） …… 33
第24図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図５（土器・土製品・石器） …… 34
第25図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図６（木製品） …… 35
第26図　白岩遺跡２区：遺構外出土遺物実測図（土器・陶磁器・石器） …… 36
第27図　白岩下遺跡グリッド配置図 …… 40
第28図　白岩下遺跡基本層序図 …… 40
第29図　白岩下遺跡全体図 …… 41

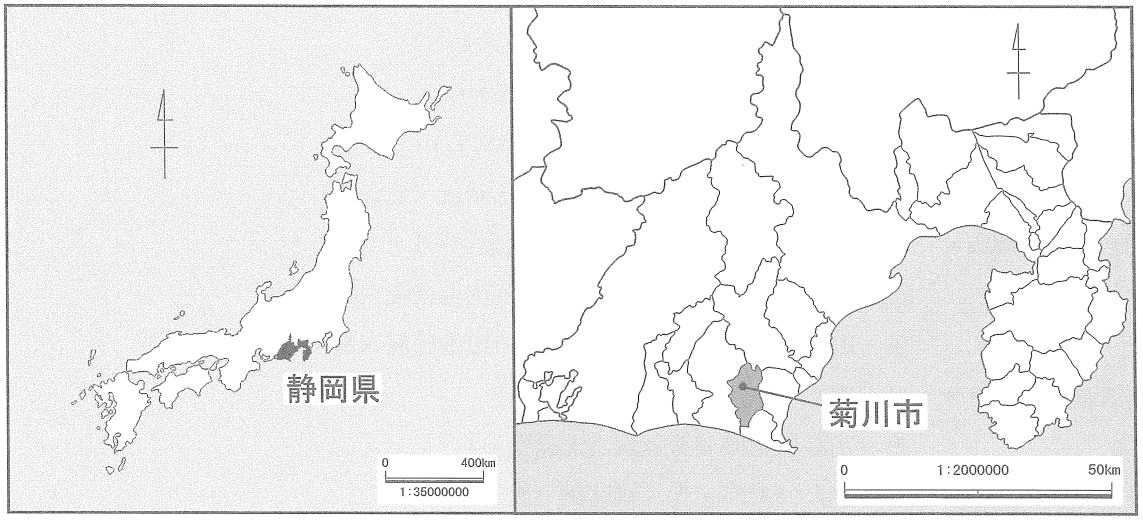
第30図　白岩下遺跡：第１遺構面土器集中平面図及び出土状況図 …… 43
第31図　白岩下遺跡：第１遺構面平面図 …… 44
第32図　白岩下遺跡：第２遺構面SX01平面図及び出土状況図 …… 46
第33図　白岩下遺跡：第２遺構面SD07平面図及び出土状況図 …… 47
第34図　白岩下遺跡：第３遺構面平面図 …… 48
第35図　白岩下遺跡：出土遺物実測図１（陶磁器・須恵器・土師器） …… 50
第36図　白岩下遺跡：出土遺物実測図２（土師器） …… 51
第37図　白岩下遺跡：出土遺物実測図３（土師器） …… 52

写真図版目次

白岩遺跡写真図版表紙　空から見た菊川流域（南から）
白岩遺跡写真図版１－１　白岩遺跡１区・２区全景
２　調査前の白岩遺跡（北東から）
白岩遺跡写真図版２－１　１区：調査区（第２遺構面完掘後）全景（北東から）
２　２区：調査区全景（南東から）
白岩遺跡写真図版３－１　１区：SR01遺物出土状況（北から）
２　１区：SR01石斧５出土状況（北から）
３　１区：SR01石鏃10出土状況（南西から）
４　１区：SR01完掘状況（北から）
白岩遺跡写真図版４－１　１区：SP01～05完掘状況（北から）
２　１区：SX01甕出土状況（北西から）
白岩遺跡写真図版５－１　１区：SR02・03遺物出土状況及びSP07完掘状況（北東から）
２　１区：SR02・03及びSP06完掘状況（北から）
白岩遺跡写真図版６－１　２区：SR04遺物出土状況（南から）
２　２区：SR04完掘状況（南から）
白岩遺跡写真図版７－１　２区：SR05遺物出土状況１（北から）
２　２区：SR05壺22出土状況（北から）
３　２区：SR05壺27出土状況（北から）
４　２区：SR05壺21・23甕39出土状況（北から）
白岩遺跡写真図版８－１　２区：SR05遺物出土状況２（北から）
２　２区：SR05壺26・38台付甕48出土状況（南から）
３　２区：SR05壺33・35台付甕50出土状況（南東から）
白岩遺跡写真図版９－１　２区：SR05土層断面（北から）
２　２区：SR05完掘状況（北東から）
白岩遺跡写真図版10－１　２区：SR06土器片層断面（北から）
２　２区：SR06土器片層出土状況（北から）

白岩遺跡写真図版11－１　２区：SR06梯子160出土状況（北から）
　　２　２区：SR06完掘状況（北から）
　　３　２区：SR06（拡張区）完掘状況及び断面状況（南東から）
白岩遺跡写真図版12～23　白岩遺跡出土遺物１～12

白岩下遺跡写真図版表紙　白岩下遺跡遠景（南から）
白岩下遺跡写真図版１－１　調査前の白岩下遺跡（西から）
　　２　第１遺構面完掘状況（北から）
白岩下遺跡写真図版２－１　第２遺構面完掘状況（北から）
　　２　第３遺構面完掘状況（北から）
白岩下遺跡写真図版３－１　第１遺構面ピット・土坑（北から）
　　２　第１遺構面南側遺構（北から）
白岩下遺跡写真図版４－１　第１遺構面須恵器出土状況（北から）
　　２　第１遺構面カワラケ出土状況（北から）
白岩下遺跡写真図版５－１　第１遺構面土師器出土状況（北から）
　　２　第１遺構面土器出土状況（西から）
白岩下遺跡写真図版６－１　第２遺構面SD07土器出土状況（北東から）
　　２　第２遺構面SD07（新）完掘状況（東から）
白岩下遺跡写真図版７－１　第２遺構面SX01（北から）
　　２　第２遺構面SX01（東から）
白岩下遺跡写真図版８－１　第２遺構面SX01（南から）
　　２　第３遺構面SD07（旧）完掘状況（東から）
白岩下遺跡写真図版９～13　白岩下遺跡出土遺物１～５



静岡県及び菊川市の位置

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経過

静岡県袋井土木事務所は、菊川市加茂地内において、一級河川西方川河川整備事業の一環として河川改修工事を計画していた。そのため計画範囲について埋蔵文化財の照会があり、事前に静岡県教育委員会文化課では、現地において遺跡の有無について確認調査を実施した。その結果、計画された範囲の内、一部ではあるが白岩遺跡および白岩下遺跡の範囲であると判断された。

白岩遺跡は、のちに述べるように、静岡県西部地方における弥生時代中期の標識遺跡であり、白岩下遺跡は、縄文時代中期、古墳時代中期の遺物が発見されていたことで知られるところであった。計画範囲のうち両遺跡に該当する範囲は事前調査の対象とされ、静岡県袋井土木事務所は、白岩下遺跡については2006（平成18）年12月９日に、白岩遺跡については2007（平成19）年11月29日に静岡県埋蔵文化財調査研究所とのあいだに埋蔵文化財調査に関する委託契約を結んだ。なお調査に関する調整と指導は静岡県教育委員会文化課である。

河川整備事業は複数年度にわたって施行されるため、その計画に合わせて発掘調査を実施するようにしている。また河川の範囲を調査するため水位の低い渇水期である冬場から春先にかけて現地調査を実施した。

第２節　調査の方法と経過

（１）白岩遺跡

調査は一級河川西方川総合流域防災事業（統合河川）工事に伴うもので、2006（平成18）年度には静岡県教育委員会文化課による試掘調査が行われ、弥生時代と中世の遺構・遺物が確認されていた。

2007（平成19）年11月に開始された本調査の範囲は、東名高速道路菊川インターチェンジ南側で、西方川に沿って南北に延びる細長い範囲である。当初３地点設定されたが、その内の１地点はその後の工事の変更により調査の必要がなくなり、２地点計470㎡が対象範囲となった。西方川に架かる県道79号線（高瀬・菊川線）八幡橋を挟んで北側左岸を１区、南側右岸を２区とした。以下、調査の方法と調査経過を述べる。

契約締結後、準備工として2008（平成20）年１月16日までに業者・資材の手配、現地事務所設置、立木伐採、調査区の安全対策等が進められた。同年１月17日より表土除去を２区、１区の順で行い、並行して基準点移動、グリッド杭の打設を株式会社フジヤマに委託し行った。

１区では同年３月12日から掘削が開始され、２面の遺構面を検出した。５月28日までに完掘・埋め戻しを行い１区の調査を終了した。

２区では２月４日から人力掘削が開始され、複数の流路跡が検出された。５月９日までにそれらの掘削を完了したが、調査区の南側にて1975（昭和50）年まで使われていた西方川流路とそのコンクリート護岸壁が見つかった。今後これらを撤去する必要があるため、その際掘削が及ぶ範囲として、コンクリート壁の際から約２ｍの幅をトレンチ掘削することになった。また、新たに隣接する20㎡分の追加調査も計画された。６月５日まで行ったトレンチ掘削で弥生時代中期を主体とする土器片が大量に堆積した層を検出し、翌６日に現地事務所を撤去。同月18日には調査区を埋め戻して一旦調査を終了した。この間、それぞれの調査区で遺構の略図を作りながら遺物の取り上げ・実測図作成・写真撮影などを行った。基礎整理作業は静岡県埋蔵文化財調査研究所・島田整理事務所において同年９月まで実施された。

コンクリート壁撤去に伴う２区拡張区（20㎡）の追加調査は2009（平成21）年１月に開始された。同月21日より遺構掘削を開始し、前調査で見つかった大量の土器片堆積層の続きを検出した。２月４日に調査を終了、２月９日までに現地事務所を撤去した。出土遺物は現地での洗浄後、島田整理事務所で整理作業を行った。本調査範囲はほぼ西方川の旧流路であり、その時期は弥生時代中期にちかい後期のものと判断された。

（２）白岩下遺跡

調査は、2006（平成18）年度一級河川西方川住宅市街地基盤整備（統合河川）工事に伴い行われた。調査区は上記の白岩遺跡と同様に西方川堤防内の細長い区画235㎡である。調査の進行とともに、当初の想定と異なり、３面の遺構面を確認した。以下、調査の方法と調査経過を述べてみたい。

現地調査の準備は、2006（平成18）年12月11日から開始した。まず準備工として現地作業員の募集と面接・採用と同時に資・器材の調達を行った。12月下旬には現地事務所の設営を行った。

年が改まり資・器材や什器等の搬入を行い、事前準備も本格化した。現地に近接する道路は生活道路や小学生の通学路でもあるため、排土置き場も含め安全フェンスを巡らした。そののち表土除去を行って、人力による包含層掘削に入った。並行して基準点移動、グリッド杭の打設を株式会社フジヤマに委託した。この結果、北西より南東に向かって傾斜した地形に遺構が認められた。

調査によって検出した遺構の写真撮影・実測と遺物の取り上げを随時、各調査面で実施し、それぞれが近世から古墳時代前期の遺構であることが判明した。出土遺物は現地において洗浄し、島田整理事務所で注記・整理作業を行った。

第２章　遺跡の位置と環境

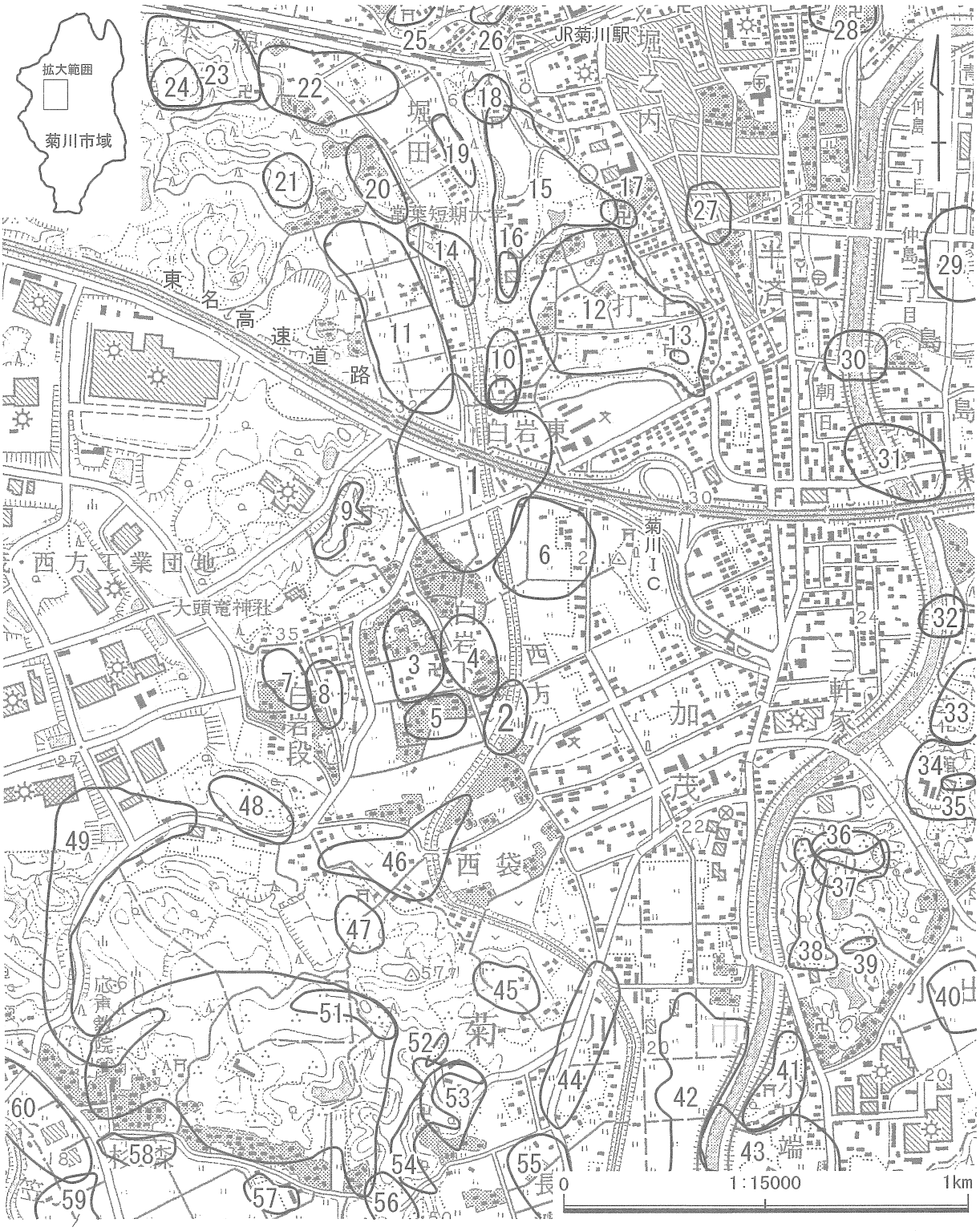
第１節　地理的環境

白岩遺跡および白岩下遺跡の位置する菊川市加茂は菊川市域北西部にあたり、昭和の大合併によって菊川町（きくがわちょう）ができるまで加茂村（かもむら）と呼ばれた地域である。現在、東名高速道路菊川インターチェンジがあることによって、工場誘致が進み、それに伴って急速に市街化した地域である。

加茂の北側に東海道本線の堀之内（ほりのうち）駅（現・菊川駅）ができ、駅周辺が堀之内と呼ばれる町となったが、加茂の地はそれよりやや離れていたこともあって、東名高速道路ができるまでは、水田の広がる田園地帯で、その中を江戸時代以来の字を留める旧近世村が、谷底平野の中を河川に沿ってできた微高地や河岸段丘に点在していた。

この周辺を南北に流れる菊川と西方川は、もとはＳ字状に蛇行していた。戦後の1947（昭和22）年12月には、蛇行していた西方川の流路を、直線にする河川改修工事が行われていた。のちに述べるが、この改修工事によって、弥生土器や木製品などが発見され、遺跡の存在が注目された。当初、発見された場所については、西方川にかかる八幡橋の位置から北を白岩上流（しらいわじょうりゅう）遺跡と呼称し、また南側を白岩下流（しらいわかりゅう）遺跡と呼称した。現在ではこれを一つの遺跡として、白岩遺跡と呼んでいる。白岩下遺跡の発見についても、1975（昭和50）年の河川改修によって、排土から縄文土器が発見されたことによる（加藤1979）。

白岩遺跡をはじめ河川堆積によって埋没していた遺跡が、河川改修工事によって、再び世に出たわけである。遺跡の存在も河川堆積よって埋もれ、人知れず長く保存されていたが、来るべき未来の公益のため改修工事が計られる。そして事前に発掘調査され、記録保存される。このことも河川に沿って生活することの歴史の一コマであろう。



第１図　遺跡周辺分布図

第１表　白岩遺跡と周辺遺跡

1	**白岩遺跡**	11	栗林遺跡	21	堀田山遺跡	31	島遺跡	41	賀茂神社遺跡	51	杉森古墳群
2	**白岩下(白岩下Ⅱ)遺跡**	12	鹿島・打上遺跡	22	堀田遺跡	32	新井遺跡	42	宮ノ西遺跡	52	長池横穴墓群
3	白岩西狭間(白岩下Ⅰ)遺跡	13	鹿島古墳	23	堀田城跡	33	四ツ枝遺跡	43	小川端遺跡	53	長池遺跡
4	白岩東狭間(白岩下Ⅲ)遺跡	14	豆尻遺跡	24	権現原遺跡	34	下田遺跡	44	長池橋遺跡	54	長池古墳群
5	西福寺西遺跡	15	高田ヶ原遺跡	25	大渕ヶ谷横穴墓群	35	下田横穴墓群	45	長池北遺跡	55	長池Ⅱ遺跡
6	方吹遺跡	16	高田ヶ原南古墳群	26	西宮浦横穴墓群	36	小出遺跡	46	西袋遺跡	56	原山遺跡
7	白岩段Ⅰ遺跡	17	大徳寺古墳	27	前田遺跡	37	上ノ城砦	47	市ヶ原遺跡	57	頼実遺跡
8	白岩段Ⅱ遺跡	18	高田ヶ原古墳群	28	前田坪遺跡	38	山本遺跡	48	広原遺跡	58	辻ノ前遺跡
9	井成山(大頭龍)遺跡	19	堀田東遺跡	29	仲島遺跡	39	小出横穴墓群	49	山田横穴墓群	59	木舟遺跡
10	八幡遺跡・八幡古墳	20	腰前遺跡	30	権左衛門遺跡	40	一ノ坪遺跡	50	杉森横穴墓群	60	御門前遺跡

第２節　歴史的環境

ここでは周辺に分布する遺跡にふれながら、白岩・白岩下両遺跡の歴史的環境を概観してみたい。

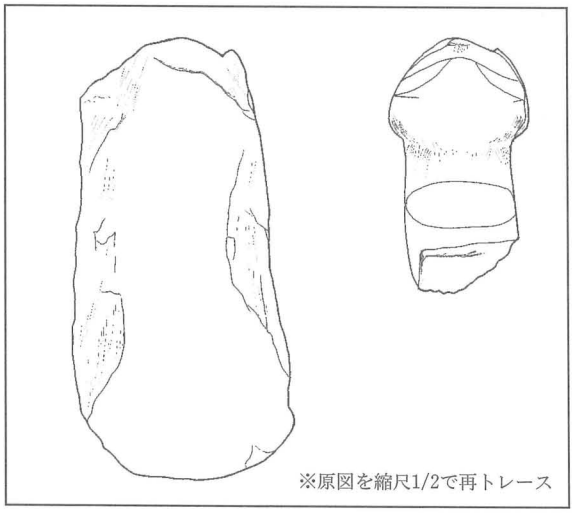
以前、白岩下遺跡では改修工事と本研究所の発掘調査によって、縄文土器が出土している（加藤1979、中田ほか2004）。この縄文土器は、河岸段丘と接し地表下に埋没する緩斜面（以下、埋没緩斜面に略）に堆積した状態で出土していることから、当時の集落から廃棄されたものか、あるいは流れ込みと判断された。出土した土器のうち縄文前期後葉の北白川下層式土器がもっとも古く、縄文中期中葉から後葉の土器が多いことも判明した。

戦前の『小笠郡加茂村資料』（以下、『加茂村資料』に略）によると、現在、西福寺西遺跡（白岩東狭間・白岩西狭間遺跡も含まれるか）と呼ばれる範囲において、石剣、打製石鏃、打製石斧が採集され写真や実測図によって表されている（**第２～４図**）（注1）。この写真を見ると、縄文時代晩期の石剣や縄文時代後・晩期の打製石鏃、打製石斧と考えられ、すると本遺跡の西側にある低位段丘には縄文時代の遺跡が存在し、立地からすればこの遺跡が集落遺跡と推定される。これら低位段丘にある遺跡からは、縄文前期や中期の土器は報告されていないものの、本遺跡の埋没緩斜面から出土した縄文土器はこれら低位段丘の遺跡から廃棄されたものか、あるいは流れ込んだものと推定される。

第２図　『小笠郡加茂村資料』

掛川市牛岡遺跡では埋没していた遺物包含層を調査し、多量の縄文中期後半の遺物を発見した。しかしながら近接する集落部分ついては奈良時代から江戸時代の生活面の形成によって、縄文時代の遺構は残っていなかった（篠原1995）。牛岡遺跡のような、静岡県西部地方における低地部の縄文遺跡は、平野部の埋没緩斜面から、遺物が発見されることが少なからずある。このような場合、低位段丘に生活した集落が存在し、それからつづく埋没緩斜面から遺物の発見をみる、という点では集落遺跡から廃棄されたものか、あるいは流れ込んだものと推定される。さらに牛岡遺跡で指摘されたように、縄文時代の遺構は後世の生活のため失われたことが考えられる。

このように考えると、少なからず県西部地方の縄文人は、低地部に生活の拠点をもっていたこと、そしてその周辺が生活拠点になりうる環境であったこと、をあらためて注視しなければならないであろう。



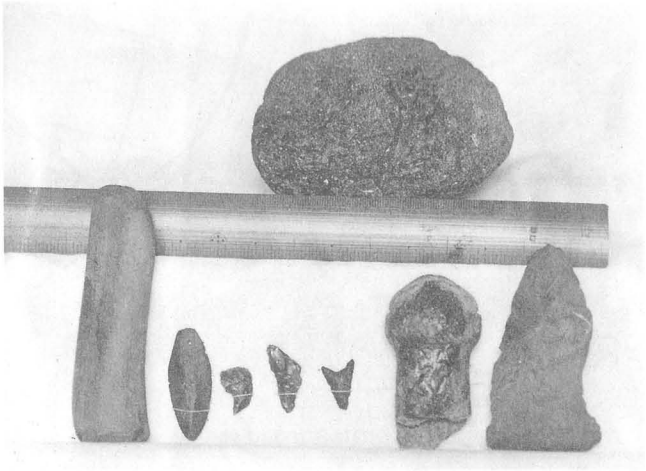
第３図　『加茂村資料』掲載の遺物実測図

それは想像の域を出ないが、当時、遺跡を取り巻く里山が原生林であったと推定され、木の実などの植物性食糧の確保、あるいはその管理や栽培といったことがあり、生活手段が容易であったことも、低地部に住まいする要因として考えなければならないであろう。

先にふれた『加茂村資料』には、西福寺西遺跡から採集された祭祀具である古墳時代の剣形石製模造品の写った写真がある（**図４・左から２番目の遺物**）。これは５世紀代の資料と判断される。白岩下遺跡からは、2003（平成15）年に静岡県埋蔵文化財調査研究所によって行われた、今回の調査地点の対岸での発掘調査によって、高坏など供献用土器を旧流路に投棄した５世

紀代の遺構が発見された。

また今回の白岩下遺跡の発掘調査では、微高地部分と緩斜面に土器を並べた遺構が発見されている。これらは４世紀から７世紀における川辺の祭祀遺構である。先にふれた剣形石製模造品の採集地点とともに、白岩下遺跡およびその周辺において、集落や川辺の祭祀が行われていたことをうかがい知ることができよう。



第４図　『加茂村資料』掲載の遺物写真

県立掛川西高等学校郷土研究部（以下、掛西郷研に略）の『ふるさと　第２号』によると、白岩上流遺跡（現在の白岩遺跡の一部）から古墳時代の土師器や須恵器が上層より出土したことが報告されている（掛西郷研 1949）。今となっては、これが集落の遺物なのか祭祀遺物なのかの判断はできないが、古墳時代中期から後期の生活の痕跡が白岩下遺跡同様、白岩遺跡でも認められていたことを指摘したい。

白岩遺跡の発掘調査のうち、1966（昭和41）年の静岡大学による東名高速道路に伴う調査分が、調査概報として公表されているが（市原・内藤1968）、戦後まもなく行われた和島誠一（わじませいいち）らの発掘調査については調査報告書が刊行されていない現在、このことも意味があると思いふれた。

なお、白岩下遺跡では2003（平成15）年の発掘調査の結果、次の成果をえている（中田ほか2004）。

① 河岸段丘には小穴や流路が発見され、中世前期の山茶碗や古代後期の灰釉陶器が出土した。

② 発見された旧流路からは４～５世紀の土器を投棄した跡が認められ、高坏、小型壺が多いことから祭祀に伴うものと考えられた。

③ 段丘から流れ込んだと考えられる縄文中期～後葉土器の包含層が、埋没谷に認められた。

このことから今回の調査にあたり、事前に白岩下遺跡の一端を知る端緒をえた。

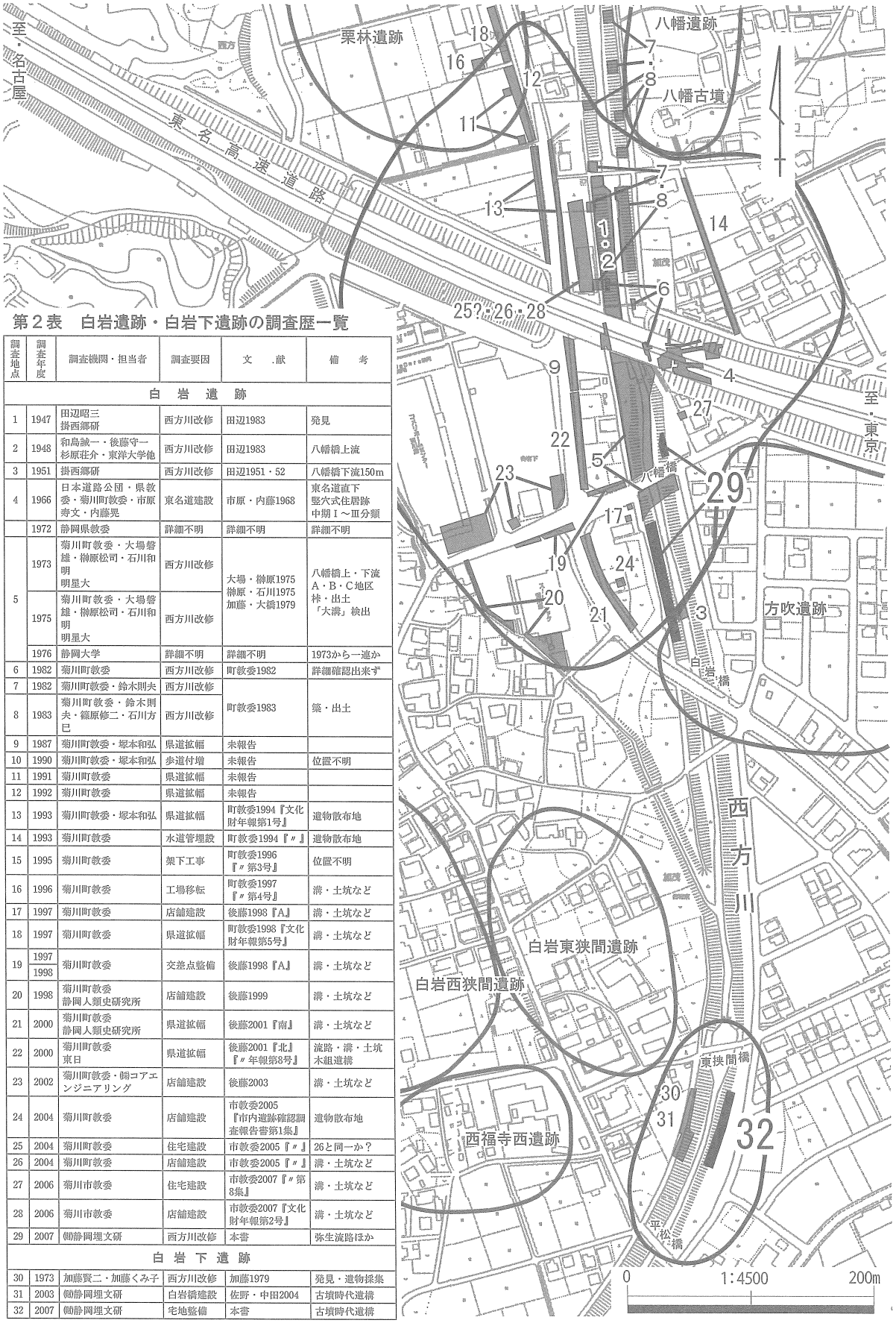
第３節　河川改修工事と遺跡の発見

白岩遺跡と白岩下遺跡の発見には西方川河川改修が大いに関係することは、すでに述べた。研究史の上でも意味があるので、ここでふれてみる。

1947（昭和22）年当時、西方川河川改修現場から１片の土器を発見し、白岩遺跡発見の端緒をつくった清水俊郎は河川改修現場から採集した土器を持参し、掛西郷研の部室を訪れた。そしてこの土器が弥生土器であることを部員から告げられた。このことを契機に清水は掛西郷研の部員となり、部員一同で現地調査を行った。その結果を注目し、1948（昭和23）年には当時の代表的考古学者和島誠一、久永春男（ひさながはるお）らの指導で白岩遺跡の発掘調査が行われた。

1951（昭和26）年には八幡橋の下流において、土器、木器等の遺物が発見され、掛西郷研の手で調査された。その結果については当時、掛川西高校３年生であった田辺昭三（たなべしょうぞう）によって『小笠郡加茂村白岩下流遺跡調査報告』として報告された（田辺1951）。また1952（昭和27）年の掛西郷研の部報『ふるさと　第７号』には、田辺による「菊川流域に於ける弥生式文化」が発表された。この中で、白岩遺跡出土の弥生土器編年を提示した。この編年は、のちにこの地域の標識土器である白岩式土器と菊川式土器の概念につながる先駆的業績である（掛西郷研 1952）。

河川改修ではないが、1966（昭和41）年、東名高速道路建設に伴って静岡大学によって白岩遺跡の発



第２表　白岩遺跡・白岩下遺跡の調査歴一覧

調査地点	調査年度	調査機関・担当者	調査要因	文　.献	備　考
白　岩　遺　跡					
1	1947	田辺昭三 掛西郷研	西方川改修	田辺1983	発見
2	1948	和島誠一・後藤守一 杉原荘介・東洋大学他	西方川改修	田辺1983	八幡橋上流
3	1951	掛西郷研	西方川改修	田辺1951・52	八幡橋下流150m
4	1966	日本道路公団・県教委・菊川町教委・市原寿文・内藤晃	東名道建設	市原・内藤1968	東名道直下 竪穴式住居跡 中期Ⅰ～Ⅲ分類
	1972	静岡県教委	詳細不明	詳細不明	詳細不明
5	1973	菊川町教委・大場磐雄・榊原松司・石川和明 明星大	西方川改修	大場・榊原1975 榊原・石川1975 加藤・大橋1979	八幡橋上・下流 A・B・C地区 柝・出土 「大溝」検出
	1975	菊川町教委・大場磐雄・榊原松司・石川和明 明星大	西方川改修		
	1976	静岡大学	詳細不明	詳細不明	1973から一連か
6	1982	菊川町教委	西方川改修	町教委1982	詳細確認出来ず
7	1982	菊川町教委・鈴木則夫	西方川改修	町教委1983	築・出土
8	1983	菊川町教委・鈴木則夫・篠原修二・石川方巳	西方川改修		
9	1987	菊川町教委・塚本和弘	県道拡幅	未報告	
10	1990	菊川町教委・塚本和弘	歩道付増	未報告	位置不明
11	1991	菊川町教委	県道拡幅	未報告	
12	1992	菊川町教委	県道拡幅	未報告	
13	1993	菊川町教委・塚本和弘	県道拡幅	町教委1994『文化財年報第1号』	遺物散布地
14	1993	菊川町教委	水道管埋設	町教委1994『〃』	遺物散布地
15	1995	菊川町教委	架下工事	町教委1996 『〃第3号』	位置不明
16	1996	菊川町教委	工場移転	町教委1997 『〃第4号』	溝・土坑など
17	1997	菊川町教委	店舗建設	後藤1998『A』	溝・土坑など
18	1997	菊川町教委	県道拡幅	町教委1998『文化財年報第5号』	溝・土坑など
19	1997 1998	菊川町教委	交差点整備	後藤1998『A』	溝・土坑など
20	1998	菊川町教委 静岡人類史研究所	店舗建設	後藤1999	溝・土坑など
21	2000	菊川町教委 静岡人類史研究所	県道拡幅	後藤2001『南』	溝・土坑など
22	2000	菊川町教委 東日	県道拡幅	後藤2001『北』 『〃年報第8号』	流路・溝・土坑 木組遺構
23	2002	菊川町教委・㈱コアエンジニアリング	店舗建設	後藤2003	溝・土坑など
24	2004	菊川町教委	店舗建設	市教委2005 『市内遺跡確認調査報告書第1集』	遺物散布地
25	2004	菊川町教委	住宅建設	市教委2005『〃』	26と同一か？
26	2004	菊川町教委	店舗建設	市教委2005『〃』	溝・土坑など
27	2006	菊川市教委	住宅建設	市教委2007『〃第8集』	溝・土坑など
28	2006	菊川市教委	店舗建設	市教委2007『文化財年報第2号』	溝・土坑など
29	2007	㈶静岡埋文研	西方川改修	本書	弥生流路ほか
白　岩　下　遺　跡					
30	1973	加藤賢二・加藤くみ子	西方川改修	加藤1979	発見・遺物採集
31	2003	㈶静岡埋文研	白岩橋建設	佐野・中田2004	古墳時代遺構
32	2007	㈶静岡埋文研	宅地整備	本書	古墳時代遺構

第５図　白岩遺跡・白岩下遺跡の調査範囲図

掘調査がなされた。その成果については市原壽文・内藤晃によって報告され、出土した弥生中期土器を中期ⅠからⅢに分類した（市原・内藤1968）。

1974（昭和49）年には田辺が下流遺跡と呼んだ地点よりさらに下流の地点の河川改修によって、発掘調査が、大場磐雄・榊原松司によって行われた（大場・榊原1974）。この調査報告書は刊行されていないが、工事や発掘調査時の排土の山から多量の遺物が採集されている（加藤・大橋1975）。大場らの調査に問題点を指摘していた加藤賢二らの報告によって、遺跡の内容が知り得るという皮肉な結果となっている。さらに近年では周辺において、菊川市教育委員会によって発掘調査が行われているという。

また1953（昭和28）年、菊川町立河城中学校（現・菊川東中学校）運動場整備中に土器片と共に竪穴式住居跡の輪郭が発見され、その年の夏に和島誠一の指導で発掘調査された。これが当時、集落遺跡として大いに注目された赤谷遺跡である。このように現在の菊川市域にある白岩遺跡と赤谷遺跡は、かつて、登呂遺跡、瓜郷遺跡とともに、弥生時代研究をリードした遺跡であったことを忘れてはならない。

第３章　白岩遺跡の調査

第１節　遺跡の立地と土層

今回の調査地点は、西方川によって形成された谷底平野のほぼ中央部にあたり、西方川の流路が最も密に存在した地域である。川の流れは、古い堆積物を削りつつ新しい掃流物を堆積させ、蛇行を繰り返して常に動き回るものである。

そのため今回の調査区内においても流路の影響を受け、各所で土の様相が異なり、全域に共通する層序と言うものを策定しづらい状況であった。特に２区では自然流路に加えて歴史時代や近代以降の河川改修により新たに開設された流路が土層を寸断するなどし、土の連続性が追いにくかったので、多分に推定を加えた層序設定であることを御容赦願いたい。

１区では表土を除去すると地表下１ｍ、標高18m付近で暗灰色粘土層（Ⅰ）、暗褐色粘土層（Ⅱ）の２層が現れる。この２層は遺物を包含し、遺構もすべてこの２層から掘り込まれている（**第７図**）。さらにその下に灰白色粘土層（Ⅲ）、暗褐色粘土層（Ⅳ）、灰褐色粘土層（Ⅴ）の堆積が認められた。Ⅲ～Ⅴ層は無遺物層であり人的な改変を伴わない自然堆積層とみられる。

１区中央の、静岡県教育委員会文化課により2006（平成18）年度に実施された事前試掘調査の試掘坑（以下、文化課試掘坑）断面図をみると、Ⅲ～Ⅴ層が東側に向けて降下するように堆積する状況が看取される（**第７図断面図Ｂ**）ので、本調査区は古い西方川右岸の微高地（自然堤防）の端部であると考えられる。なお図示しなかったが、Ⅴ層の下部では数層の灰褐色の粘土層を挟み、標高16m付近で青灰色粘土層に達する。

２区は細長いため柱状略図Ａ～Ｇで示した（**第８図**）。まず北側のＡ～Ｅでは表土下の標高17.5m付近で灰オリーブ色のシルト層（Ⅰ）があり、具体的な年代を示すものがないが、Ｂ付近で比較的古くない流路らしき堆積①②③がこの層下に確認できるため、近世かそれ以降に堆積した耕作土と考えられる。またＡ～Ｃ付近までは標高値がやや高く、微高地状になっている。

Ａ～ＥではⅠ層の下に褐色粘土粒を多く含む複数の灰色・暗灰色の粘土層が複雑に混ざり、おおよそ一括化して暗灰色粘土層（Ⅱ）と捉えた。南側のＥで厚みを増す。ＤではⅡ層下に弥生時代の小流路⑩～⑬（**SR04**）が存在するので、Ⅱ層を弥生時代の遺物包含層とした。Ａ～ＣではⅡ層下標高17m付近に灰色粘土層（Ⅲ）が見られるが、Ｄ・Ｅでは確認できず、微高地上の堆積層と考えられる。

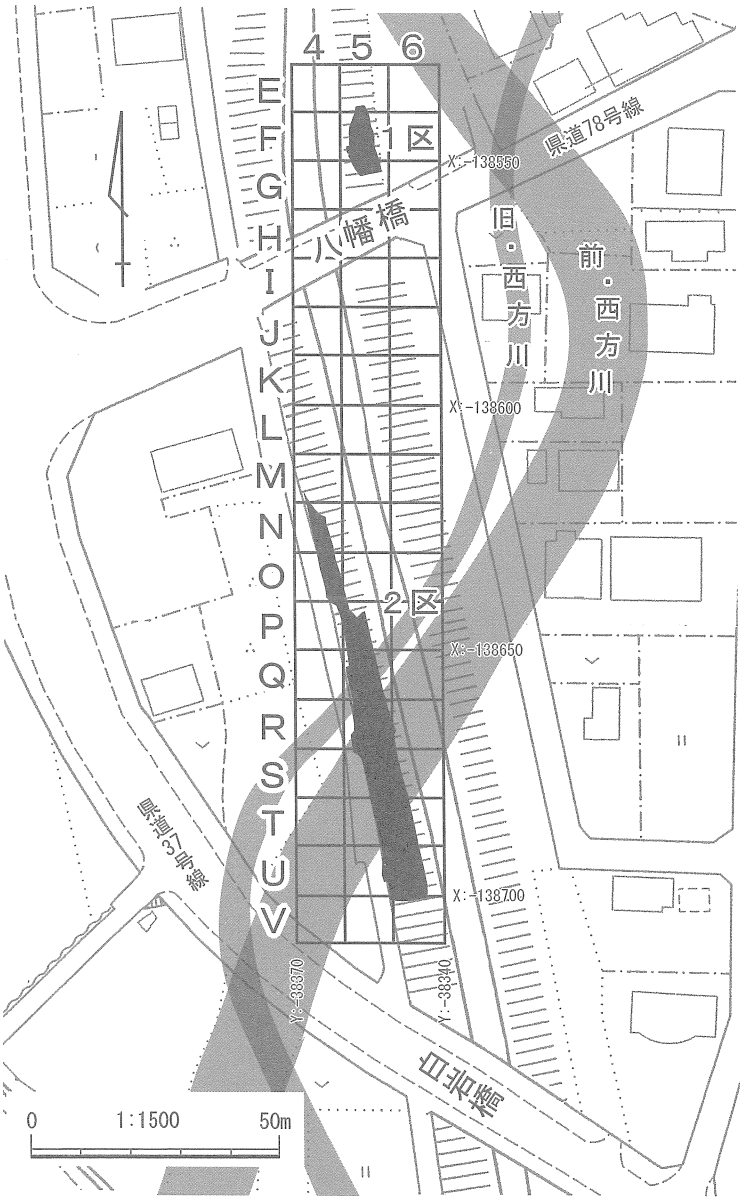
またこれより下への掘削は、柱状図Ｄ地点以外では行っていないが、Ｄでは前述の**SR04**以下に黒灰色

粘土層が２層（Ⅳ・Ⅴ）確認され、さらにその下の標高15.8m付近で青灰色粘土層（Ⅵ）が現れる。おそらく埋没谷の最下層であり、基盤層はより深部と思われる。Ⅲ層以下は無遺物層である。

Ｅ・Ｆ間は1951（昭和26）年以前の流路（以下、**旧・西方川**）が調査区を両断し、Ｆも流路（**SR05・06**）である。よってＦと北側Ａ～Ｅとの連続性が捉えにくく、北側の層序を延長してよいか疑問であるが、**SR05**堆積物の内、**上層**は、灰色粘土の多い暗褐色土層で、標高と含有物が近似し、Ⅱ層かそれを含む層の可能性があり、少なくとも**SR05**はⅡ層形成期の弥生時代流路と言える。

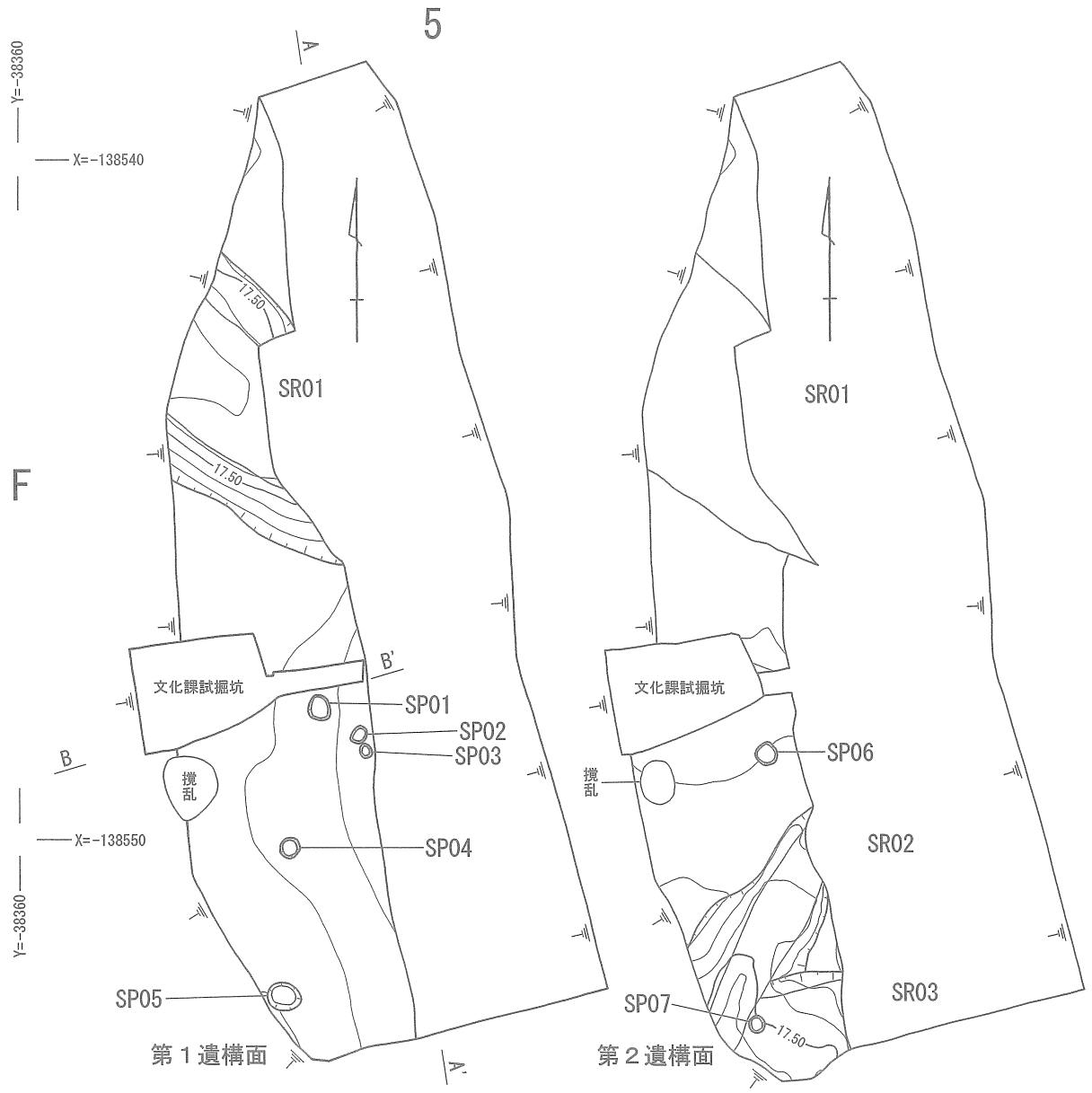
Ｆ・Ｇ間も1951（昭和26）年～1974（昭和49）年に使われていた流路（以下、**前・西方川**）により調査区を両断される。よってＧの土層の帰属が判然としない。ただ最下層の青灰色粘土層⑨は、かなり新しい流木などを含んでいたので、Ｇの層はすべて、少なくとも近世以前には遡らず、江戸時代頃の流路の堆積物と考えられる。**前・西方川**と、Ｇまでの間の領域は、この堆積物に占められているので調査を割愛した。Ａ～Ｇで共通することは、標高16m以下に青灰色粘土層が発達し、基盤岩に近いであろうということのみである。

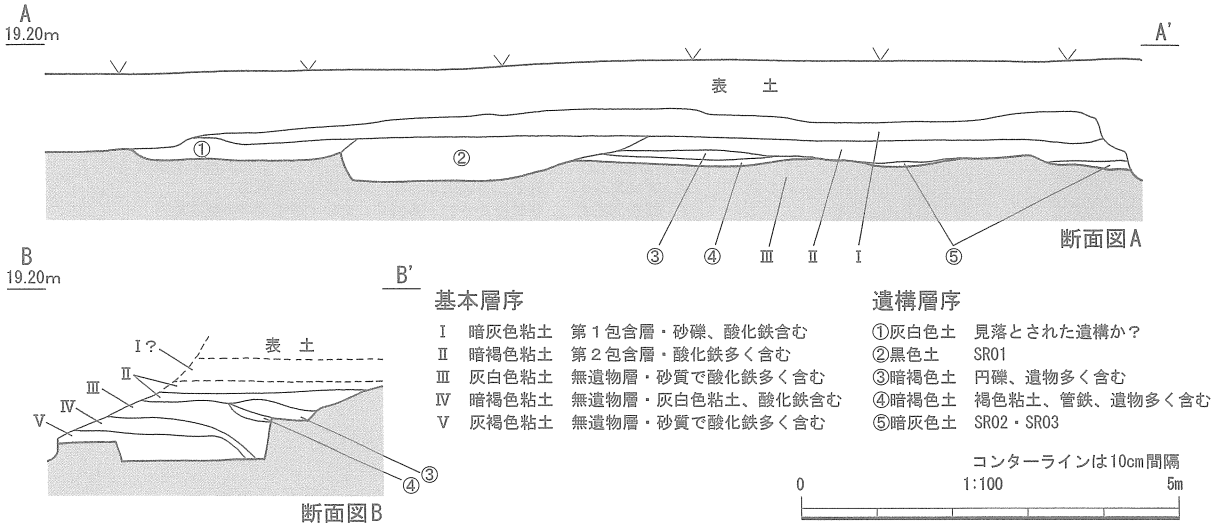
以上のことから考えられる本調査地点の立地は、１区および２区の北側が標高17m前後の微高地であり、南側はその緩斜面に形成された包含層と流路と考えられる。ただし２区北側微高地と１区のそれが同じものかはわからない。流路はすべて古い西方川で、弥生時代の流路もあれば江戸時代の流路もあり、自然・人工開削も含めて新旧入り乱れ、複雑な様相を呈している。



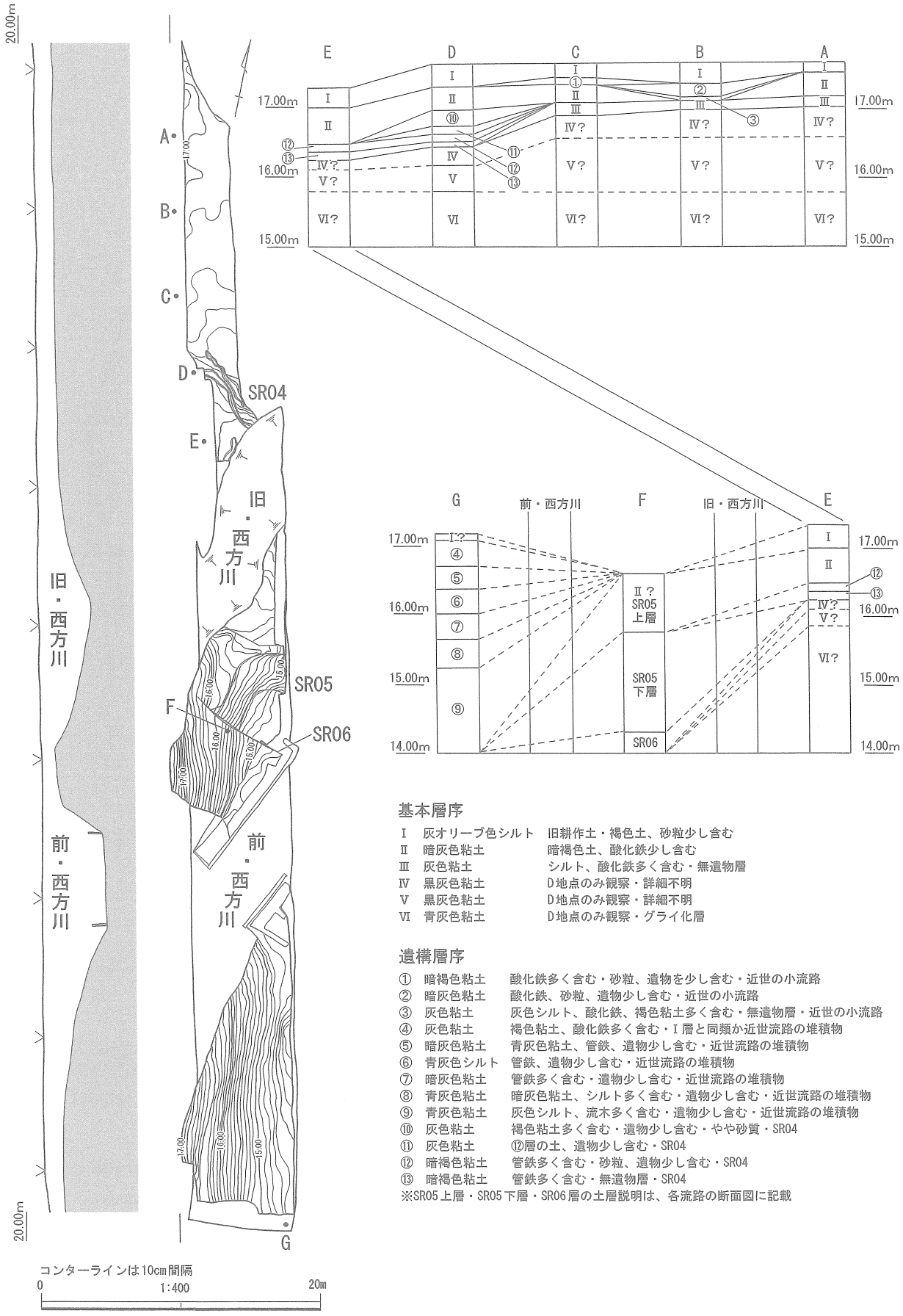
第６図　白岩遺跡グリッド配置図

本調査区の西側には井成山（大頭龍）遺跡が所在する丘陵がありそこから伸びる段丘上には白岩下遺跡や西福寺西遺跡などが形成された。また北東には鹿島打上遺跡や八幡遺跡が所在する丘陵がある。この２つの丘陵に挟まれることで、小さな変化を除けば西方川は各時代を通じて、東名高速道路付近を軸におおよそ「S」字の蛇行を常に維持してきたと考えられる。実際1973年の改修以前の西方川は本調査１区の東側を流れていた。だとすれば、本調査における１区や２区北側の微高地は、北から流れてきて西側の丘陵に突き当たってカーブした、西方川の運搬物が形成した沖積微高地（自然堤防）であり、２区南側より以南は次の蛇行により常に流路化し湿地帯に近い状態であったと考えられよう。





第７図　白岩遺跡１区：全体図及び基本層序図



基本層序

Ⅰ	灰オリーブ色シルト	旧耕作土・褐色土、砂粒少し含む
Ⅱ	暗灰色粘土	暗褐色土、酸化鉄少し含む
Ⅲ	灰色粘土	シルト、酸化鉄多く含む・無遺物層
Ⅳ	黒灰色粘土	D地点のみ観察・詳細不明
Ⅴ	黒灰色粘土	D地点のみ観察・詳細不明
Ⅵ	青灰色粘土	D地点のみ観察・グライ化層

遺構層序

①	暗褐色粘土	酸化鉄多く含む・砂粒、遺物を少し含む・近世の小流路
②	暗灰色粘土	酸化鉄、砂粒、遺物少し含む・近世の小流路
③	灰色粘土	灰色シルト、酸化鉄、褐色粘土多く含む・無遺物層・近世の小流路
④	灰色粘土	褐色粘土、酸化鉄多く含む・Ⅰ層と同類か近世流路の堆積物
⑤	暗灰色粘土	青灰色粘土、管鉄、遺物少し含む・近世流路の堆積物
⑥	青灰色シルト	管鉄、遺物少し含む・近世流路の堆積物
⑦	暗灰色粘土	管鉄多く含む・遺物少し含む・近世流路の堆積物
⑧	青灰色粘土	暗灰色粘土、シルト多く含む・遺物少し含む・近世流路の堆積物
⑨	青灰色粘土	灰色シルト、流木多く含む・遺物少し含む・近世流路の堆積物
⑩	灰色粘土	褐色粘土多く含む・遺物少し含む・やや砂質・SR04
⑪	灰色粘土	⑫層の土、遺物少し含む・SR04
⑫	暗褐色粘土	管鉄多く含む・砂粒、遺物少し含む・SR04
⑬	暗褐色粘土	管鉄多く含む・無遺物層・SR04

※SR05上層・SR05下層・SR06層の土層説明は、各流路の断面図に記載

第８図　白岩遺跡２区：全体図及び基本層序図

第２節　検出された遺構

（１）１区の遺構

１区は県道79号線八幡橋北側の西方川左岸に設定された、南北14m、東西最大幅5.5mの小さな調査区である。東側の大半が調査区の法面であるため遺構確認面はさらに狭い範囲であったが２層の遺物包含層を検出し、両遺構面から流路と見られる溝３条と、柱穴の可能性のあるピット７基を検出した。上下２層の包含層は、いずれも弥生時代後期に属するとみられる。

第１遺構面

SR01（第９図）

調査区北端で検出された。長さ1.6m～2.8m、幅約３ｍで、主軸を北西から南東へ向ける。覆土中の土器片が著しく磨滅していることや、土器のほか、様々な種類の石器が混在して含まれることから方形周溝墓や区画溝ではなく流路と考えられる。本調査区の西、県道37号線沿いで、2001（平成13）年に菊川市教育委員会が行った調査で検出された、「木組遺構」を持つ流路と向きが似ており、同一の可能性もあるが、僅かに2001年発見の流路の方が、標高が低く深いので疑問が残る（後藤2001b）。弥生時代中期から後期の土器片が混在して出土したので、後期以降に形成・埋没したと考えられる。覆土は管鉄（高師小僧）が見られるものの、あまりグライ化していない。短い存続期間を考えると、何らかの目的で人工的につくられた水路の可能性はゼロではないが、積極的に断定する根拠もない。

ピット群（第９図）

第１遺構面ではSR01の南側で５基のピットが検出された。

SP01・SP04・SP05は覆土の堆積から見て何らかの柱穴と考えられる。南北におおよそ2.2m間隔で並んでおり、それぞれの検出レベルと深さがほぼ同じであることから、１棟の掘立柱建物の可能性もあるが、若干のズレがあるうえ１列のみであるため断定できない。脆弱な地盤の掘立柱建物ならば礎板が必須と考えられるが、木片は検出されず、覆土にもSP04以外にそれを思わせる堆積が見られないので、別々の目的で掘られたピットが偶然１列に並んで見えるだけかもしれない。

SP02・SP03は隣り合って検出され、先の３ピットよりもやや検出面が高い。隣接しているものの覆土の堆積状況が随分異なり、柱穴の建替えなのか判断できない。

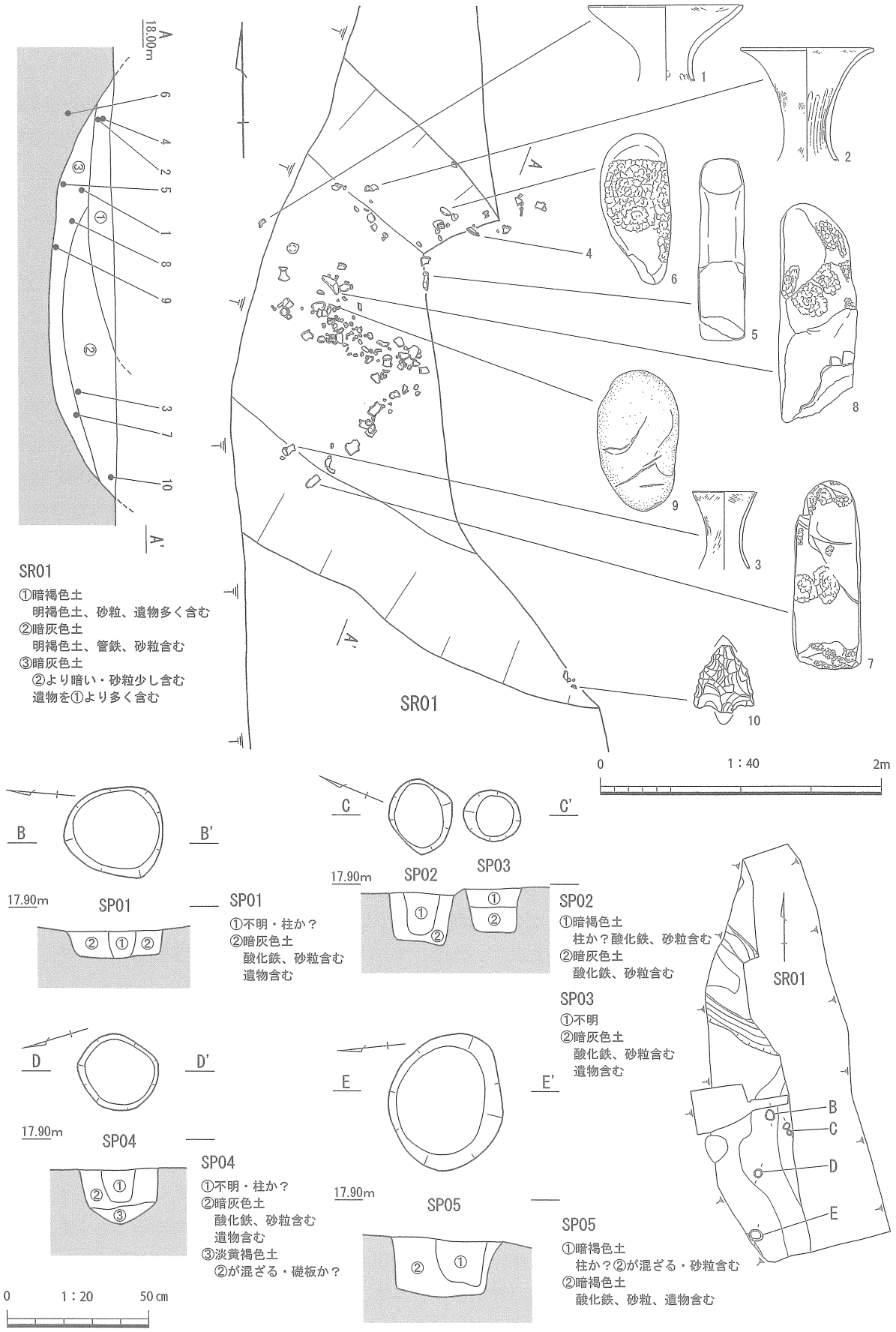
ピットの覆土には弥生土器の砕片が含まれていたが、すべて図示に耐えないほど磨滅していた。焼成の具合から見て弥生時代後期に属する土器であることは間違いないと思われる。

第２遺構面（第10図）

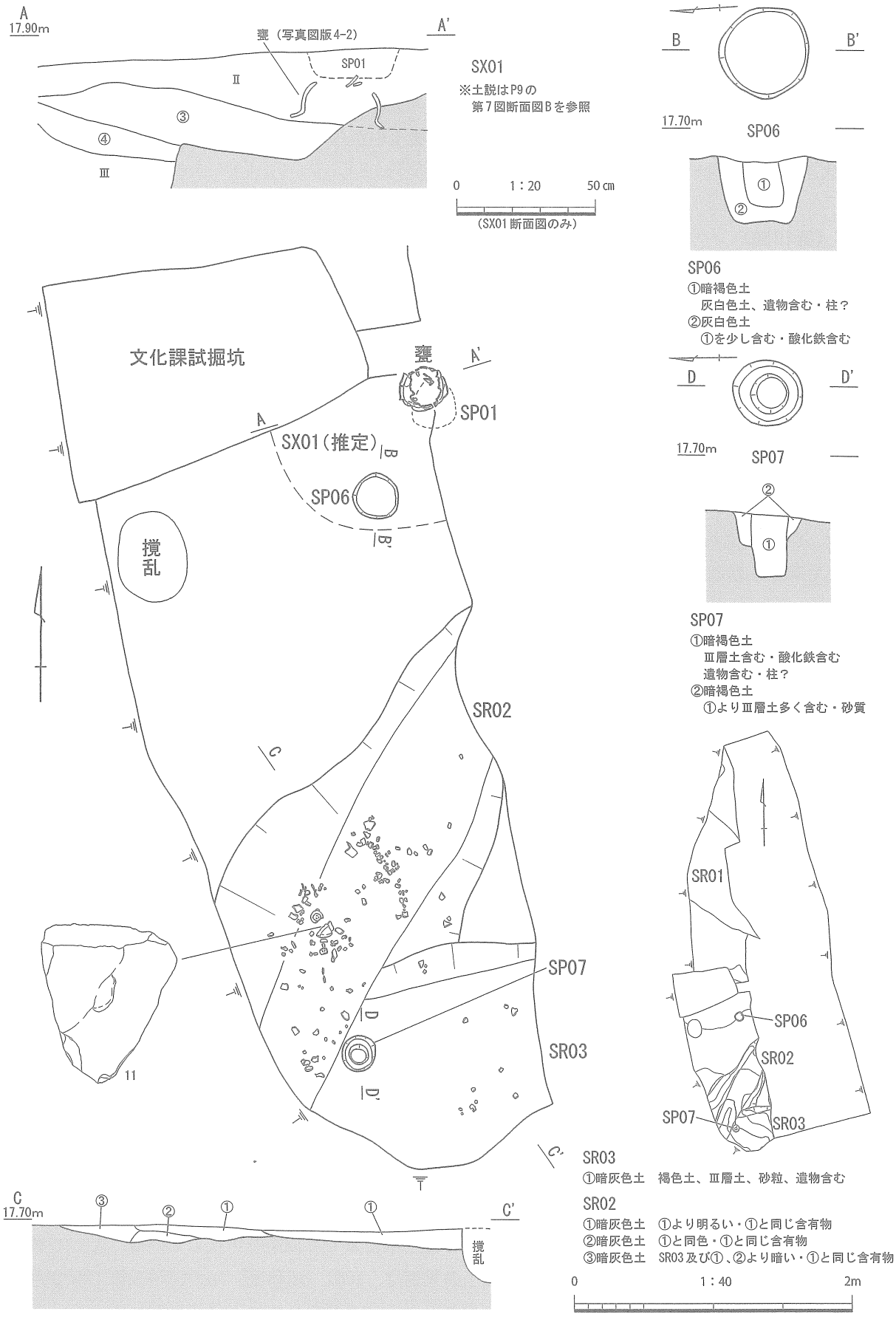
SR02・SR03

調査区南端で検出された。SR01と同じく形状から区画溝等の遺構とは考えがたく、２条の流路と考えられる。SR02は長さ1.2～2.8m、幅1.0～1.6m。SR03は長さ1.7m程だが南側が撹乱で消滅しており幅は不明である。深さは両者とも20㎝足らずである。西側で両者が合流するため２つ合わせて平面Ｖ字状を呈する。切合い関係からみてSR03が新しい。覆土は暗灰色を基本とし、砂質であることから流水があったことを物語る。底から多量の弥生土器片と石器が検出された。土器はほとんどが調整や紋様がなくなるほど磨滅しており、流されてきたものであるとわかる。

両者とも非常に浅く、削平を受けているのか本来の深さなのかわからない。弥生時代後期の内に形成・埋没したと考えられる。



第９図　白岩遺跡１区：第１遺構面平面図及び出土状況図



第10図　白岩遺跡１区：第２遺構面平面図及び出土状況図

ピット群（第10図）

第２遺構面からは２基のピットが検出された。

SP06はSR02の北側で検出された。単独で存在し、性格は不明である。SP07はSR03の河床面から単独で検出された。覆土は上のSR03の覆土を含まず、当遺構が先行するらしく、本調査における最も古い遺構と言えるが、SR06と同じく性格がわからない。覆土中から遺物が検出されなかったが、他の遺構との年代差はあまりない、弥生時代後期の範囲内であろう。

SX01（第10図）

前述の流路やピットの他に、遺構の存在した可能性のある地点がある。これは文化課試掘坑のすぐ南側で、逆さに伏せられた甕が出土した地点である。調査時にプランが平面的に確認できなかったらしく、突然甕のみが検出されたため、遺構名が与えられていなかった。

１区の文化課試掘坑南壁（第７図断面図Ｂ）には、Ⅱ層からⅢ層へ掘り込まれたような覆土をなし、「遺物を多く含む」第③・④層が見える。また調査区東壁（第７図断面図Ａ）の第③・④層も、文化課試掘坑南壁の第③・④層に対応すると考えられる。確実とは言えないが、これらの層と伏せ甕の出土レベルはほぼ一致し（第10図Ａ－Ａ´）、当遺物を包含する何らかの遺構であることは考えられなくもない。暫定的にSX01の名を与えておくが、甕の磨滅が激しいことから流路の可能性も高い。

また、SP01がこの甕のほぼ直上に位置し、甕の底部を抉っている。SX01の埋没後にSP01が掘り込まれたとも考えられるが、SP01自体、SX01の覆土の一部であった可能性も考えられる。

（２）２区の遺構

２区では遺物の包含が確認されたが、包含層というよりは、ほとんどが古い西方川の流路であり、人為的な遺構はほぼ確認できなかった。SR04には人の手が加えられた可能性があるが、もともとある流路を改修したものと考えられるため、溝を示す「SD」ではなく流路の「SR」と表記した。

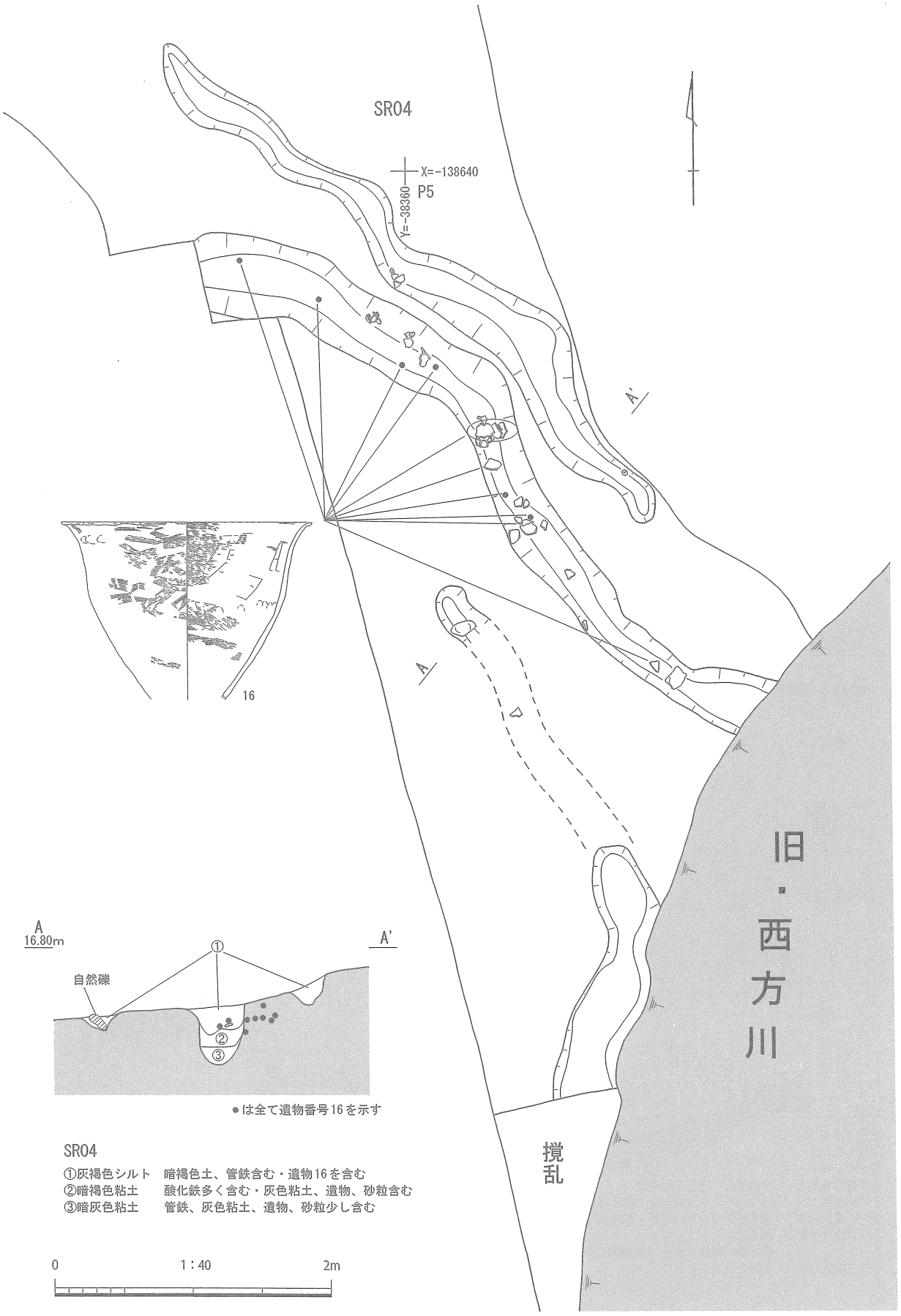
SR04（第11図）

SR04は２区内でもっとも北に位置し、地山（Ⅲ層）の土を掘り込んでいるため人工的に作られたと思われる流路である。調査区西壁より発し、やや蛇行気味に南東に流れ、旧・西方川により南側を破壊されている。ただし調査区西壁の断面では明確な地山への掘り込みは確認できなかった。残存長５ｍ、幅40～60cm、深さ最大40cmほどを測る。覆土上部の土層①は、粒の大きいシルト質層で多量の土器片を含み、この溝の周辺にも２条の溝状になって堆積しているので、洪水の土砂と考えられる。

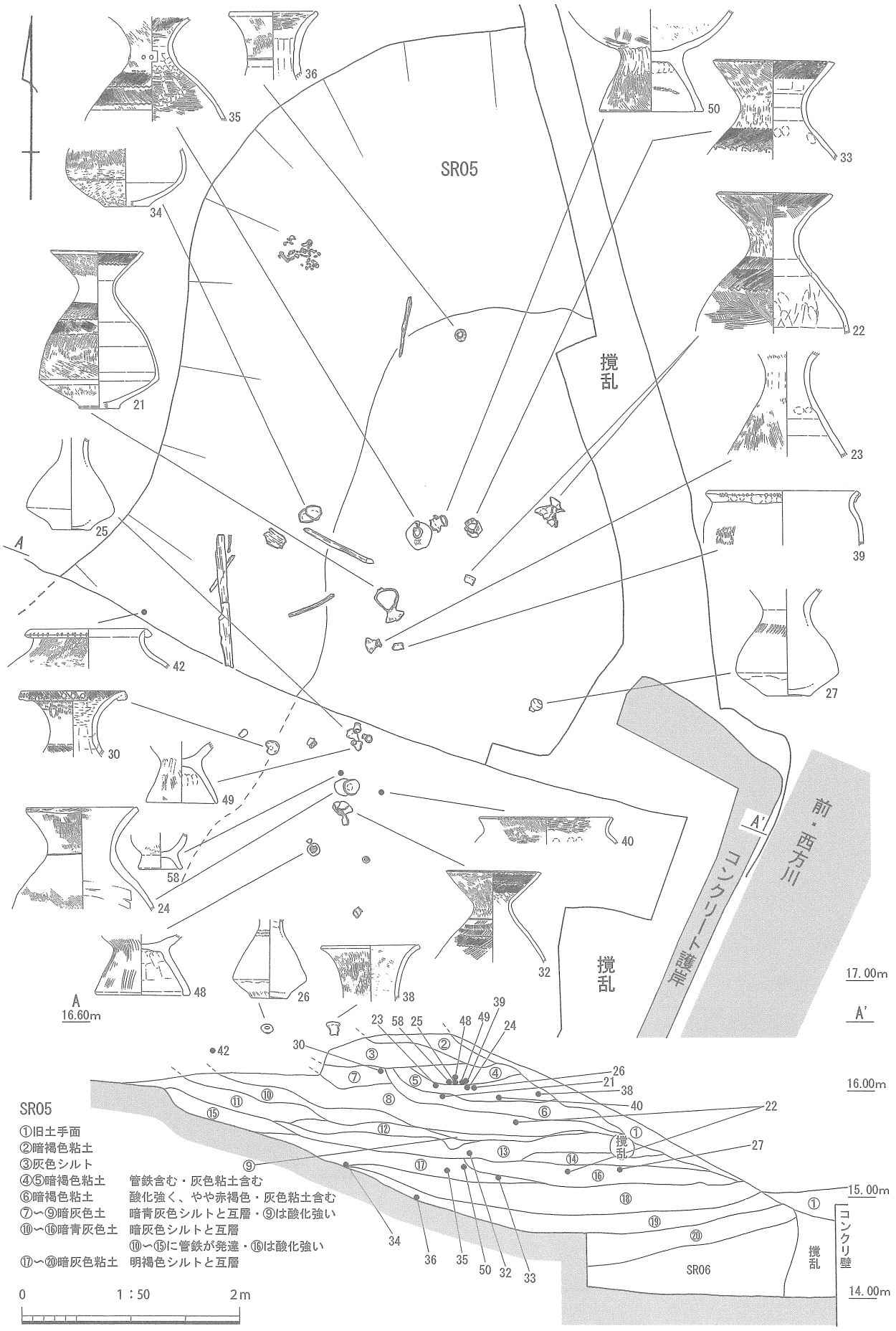
出土した土器はほぼ１個体の甕に復元でき、弥生時代中期後葉の白岩式のものであるが、他の破片資料に後期の台付甕も含まれていたことから、流路そのものは弥生時代後期と思われる。また、標高値が、調査区南側に位置するSR05の上層部とほぼ同じ16.5mほどであり同時期に存在した可能性があるが、SR05などと比べグライ化しておらず、あまり長く存続しなかった流路の可能性が高い。

SR05（第12図）

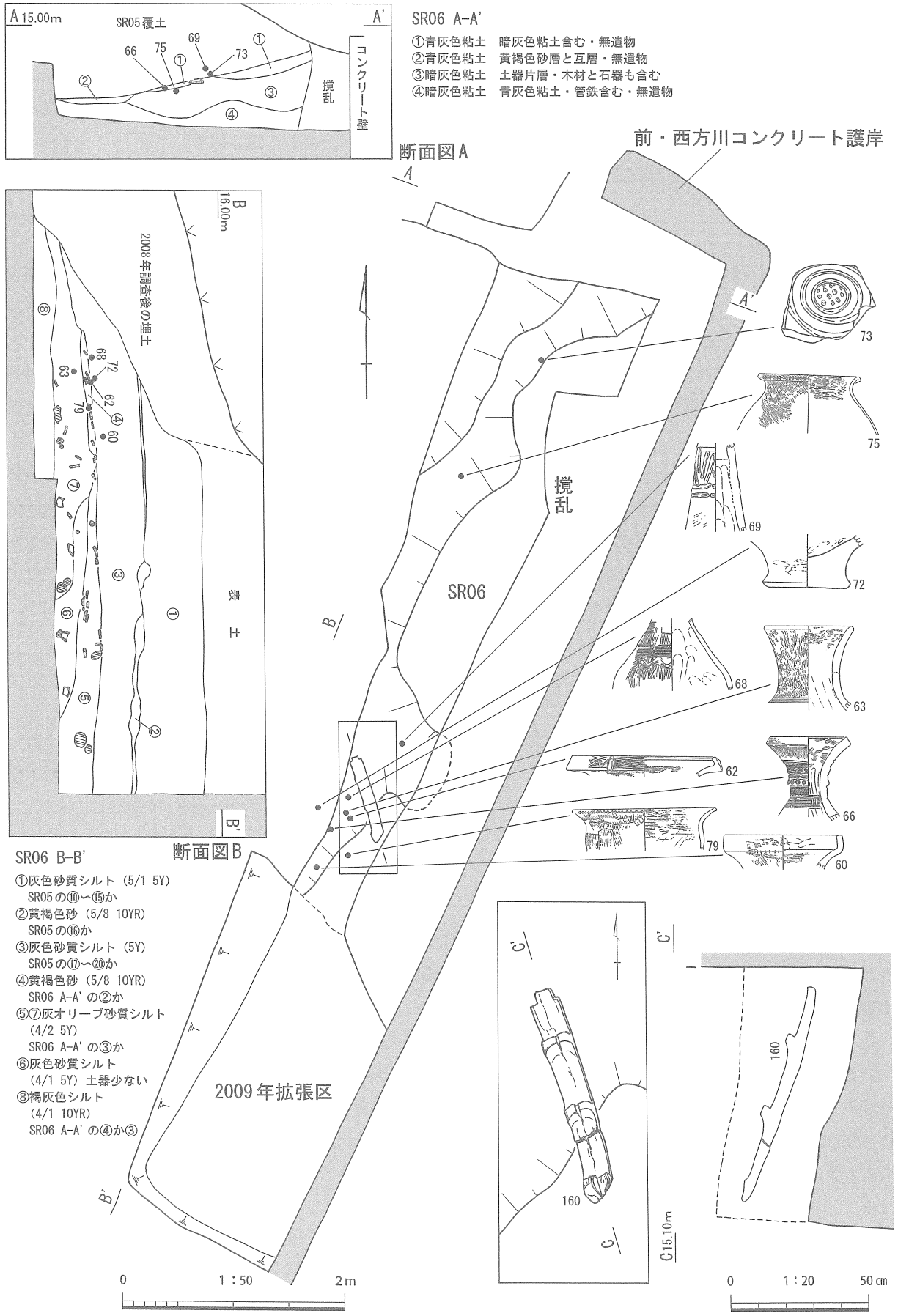
調査区南端で検出された大型の流路である。調査時の安全上の都合から、土層図のラインＡ－Ａ´を境に南側の部分は河床面まで完掘することが出来ず、覆土中位までで掘削を中止している。よって平面プランを確認できたのは北側のみである。また覆土の東側は、1951（昭和26）年の河川改修工事で開削された前・西方川の流路とコンクリ壁により破壊され、土手にされたために斜面状に削れている。未掘部分も含めれば残存長は推定12m、残存幅で約５ｍを測り、深さも残存部分で２ｍに達する。



第11図　白岩遺跡２区：SR04平面図及び出土状況図



第12図　白岩遺跡２区：SR05平面図及び出土状況図



第13図　白岩遺跡２区：SR06平面図及び出土状況図

覆土は上部が暗褐色や暗灰色粘土層であり、下部では青灰色粘土化、いわゆるグライ化が著しい。各層ともその内部で粘土とシルトが薄い互層をなす「ラミナ（葉理）」が見られ、流水の存在を裏付ける。一部に強く酸化し赤褐色に近い層が見られ（**第12図断面図⑥・⑨・⑯層**）、遺物の出土レベルがそれらの層に近い位置に集中することから、少なくとも２回以上流れが停滞した時期を伴いつつ、長期間存続した状況が看取される。出土土器は大半が後期の範疇である。なお、**第８図**の柱状図Ｆの中で用いた「SR05上層・下層」の区別は、暗褐色粘土を多く含む⑥層までを境としている。

SR06（第13図）

SR06はSR05の直下に位置する流路で、夥しい数の土器片や木製品が堆積した層を持つ（**第13図断面図Ａの③層**）。前述のコンクリ壁撤去に伴い、壁際から約２ｍ幅で行われたトレンチ掘削により検出されたため、ほとんどがSR05の覆土に隠され、川幅など全貌は把握できない。

この土器片層③は川の運搬作用で上流から流れてきた土砂が、流れの遅い蛇行流路の内側に積り砂州（ポイントバー）を形成する際、多量の土器片を一緒に運んできた結果によるもので、最も厚いところで約40cmにのぼる。2009（平成21）年に行われた南側の拡張調査においても同様の堆積が続いていた。

上部のSR05との境は、第⑳層（**第12図断面図**）で区別したが、この⑳層にもラミナが見られ、SR06とした層との間には渇水や停滞を示す層がないため、同一の流路と捉えるべきかもしれない。しかしSR05の土器群と、このSR06中の遺物は明らかに年代的な差異があるため、一応の区別を与えた。土器の量から見てかなり長期にわたり流れ続けた流路とも考えられるが、ある程度旧状を保った土器や、梯子など大型の木製品が含まれていたことなどから、洪水で一度に堆積した可能性もある。

第３節　出土遺物

土器の年代は『弥生土器の様式編年・東海編』の「東遠江様式」に従い（佐藤・萩野谷・篠原2002）、Ⅲ－１～３様式を中期中葉の嶺田（みねた）式、Ⅳ－１～４様式を中期後葉の白岩式、Ⅴ－１～５様式を後期の菊川式に対応させ、また市原壽文（市原1968）、萩野谷正宏（はぎのやまさひろ）の分類も参考にした（萩野谷2001）。

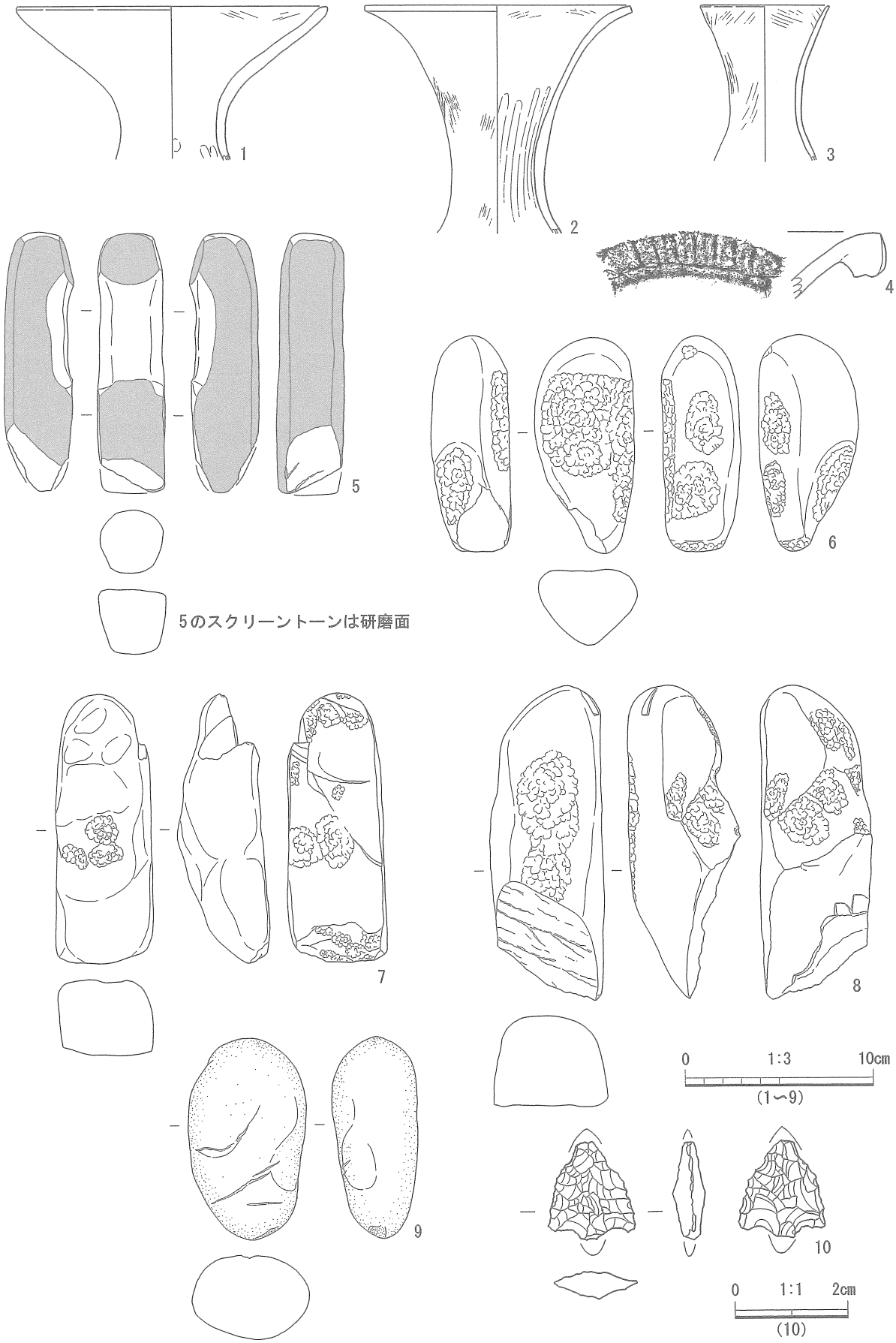
（１）１区の遺物

SR01（第14図）

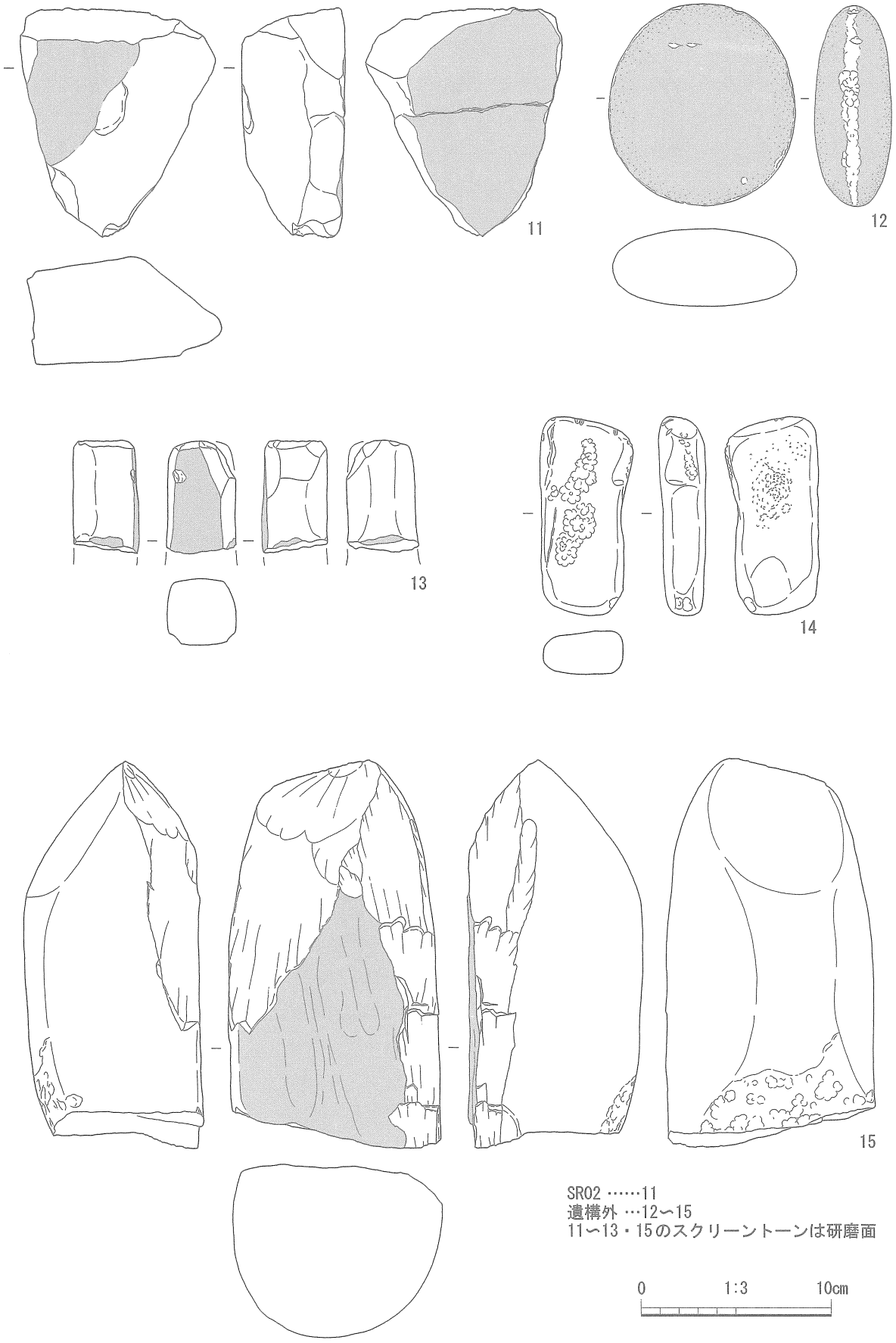
弥生土器および石器が出土した。出土地点は遺構の平・断面図（**第９図**）に示した。土器はほとんど流水により磨滅し砕片と化していたので、図示出来た資料はほんの一部である。

土器（第14図１～４）

１～４は壺の口縁である。１は頸部が締り、口縁が僅かに内湾気味に大きく開く。菊川式にあたる弥生時代後期のⅤ－３様式に位置する。内湾気味で単純口縁の壺は菊川流域に特徴的なものであるが、磨滅があまりに酷く本来あったはずの縄紋やハケメなどは皆無である。２も旧状より相当磨滅しており調整・紋様は皆無である。１と違って口縁が外反しながらラッパ状に開くタイプで、中期後半のⅣ様式に始まりⅤ－１様式まで存続する形態ではあるが、焼成などから見ても積極的にⅤ様式に位置づける根拠は薄く、Ⅳ様式末の範疇で捉えるのが妥当だろう。頸部の内面には、頸部をくびれさせるために手で外側から押さえることで生じる「絞り目」がある。３は頸部から口縁への開きが弱く、より中期的特徴が強い。時期の絞り込みが難しいがⅣ様式後半に位置づけられる。４はラッパ状に外反する頸部と折返し口縁を持ち、２の系譜が発達したものでⅤ－３様式以降のものである。単純口縁に対し折返し口縁をもつ壺は菊川流域よりも西部の太田川流域に多い。



第14図　白岩遺跡１区：SR01出土遺物実測図（土器・石器）



第15図　白岩遺跡１区：SR02・遺構外出土遺物実測図（石器）

石器（第14図５～10）

５は抉入柱状片刃磨製石斧である。石材は熱変成岩、いわゆるホルンフェルスであり、黒灰色の泥質岩石が地熱を受け変異したものである。縄巻きされていた抉り部分を除き全面的に丁寧な研磨がなされている。ホルンフェルスは天竜川流域の領家変成帯で産出されることが知られる（伊藤1996）。

６は褐灰色・硬質粗粒砂岩の叩き石で、断面が三角形を呈し、平の面の中央や角に敲打痕が認められる。７は黒灰色・硬質泥質細粒砂岩の叩き石、８は褐灰色・硬質中粒砂岩の叩き石で、両側面中央および両頂点部に執拗な使用痕が認められる。

９は灰色・硬質細粒砂岩の叩き石であるが、下端以外にほとんど使われた形跡がない。10は半透明黒曜石の有茎打製石鏃である。先端と茎部を欠損するが比較的状態が良い。石材の産地は不明だが、長野県方面であろうか。

SR02（第15図11）

弥生土器片は多かったものの、すべて磨滅が著しく、図示出来る状態ではなかったので石器のみ取り上げる。なおSR03からは、わずかな土器砕片以外の出土遺物はなかったので掲載していない。

11はSR02河床面で出土した砥石である。石材は暗灰色・硬質中粒砂岩である。半分以上欠損しているが、両面とも平の面が研磨されており、どちらを上にして置いても面が水平にならない。両側とも凹むまで使われたのであろう。

SX01（白岩遺跡写真図版13）

白岩遺跡の写真図版13最上段の遺物はSX01地点出土の甕である。出土した際には形状を維持していたものの（同写真図版４－２）、割れ口の面が完全に磨滅しており、明らかに繋がっていたとわかる破片ですら接合が困難であったため、復元や実測ができず、写真のみ掲載した。底部が欠損し、調整なども皆無であるが、おそらく台付甕で、くの字の単純口縁を持ち胴部径が口縁径より張り出すらしいので、Ｖ様式を遡らないものであろう。

遺構外（第15図12～15）

すべて石器で、第２包含層中からの出土である。

12は擦り石で、表裏ともに擦りに用いられているが、側面は叩き石として使われたらしく微弱な敲打を受けた跡がぐるり一周している。石材は暗褐灰色・硬質含礫中粒砂岩である。

13は抉入柱状片刃磨製石斧の残欠で、残っているのは柄側の部分と推定される。石材は暗褐灰色・硬質中粒砂岩である。

14は褐灰色・硬質中粒砂岩の叩き石で表面と側面の一部に敲打痕がある。裏面には敲打にしては弱すぎるものの、何らかの力を受けたざらついた痕跡が残る。

15は灰色・硬質粗粒砂岩の台石であるが、下端が欠損していて本来の大きさは判らない。片面には前後に擦った痕が畝状に残り使用面と判るが、その裏側は大きく弧を描く自然面なので、そのままでは据えることができない。別の石などを地面との間に挟み固定して使ったのであろうか。また、僅かに敲打痕らしい痕跡も残る。

表（使用）面側は欠損が著しく、図の上部の大きな剥離は自然営力かと思われるが、右側の角の部分の剥離は、同一方向から数回にわたり打撃を受けたとみられるので、何らかの目的で人為的に壊されている可能性がある。

（２）２区の遺物

SR04（第16図）

土器（第16図16～17）

16は前述の洪水跡と思われる覆土①の下部から出土した甕である。口縁径が胴部径を凌駕する深鉢型を呈する。磨滅して調整が判然としないが条痕ではなくハケメであったらしく、白岩式期のⅣ－３または４様式と思われる。底部の状態は不明だが、その時期のものであれば台付甕であった可能性がある。

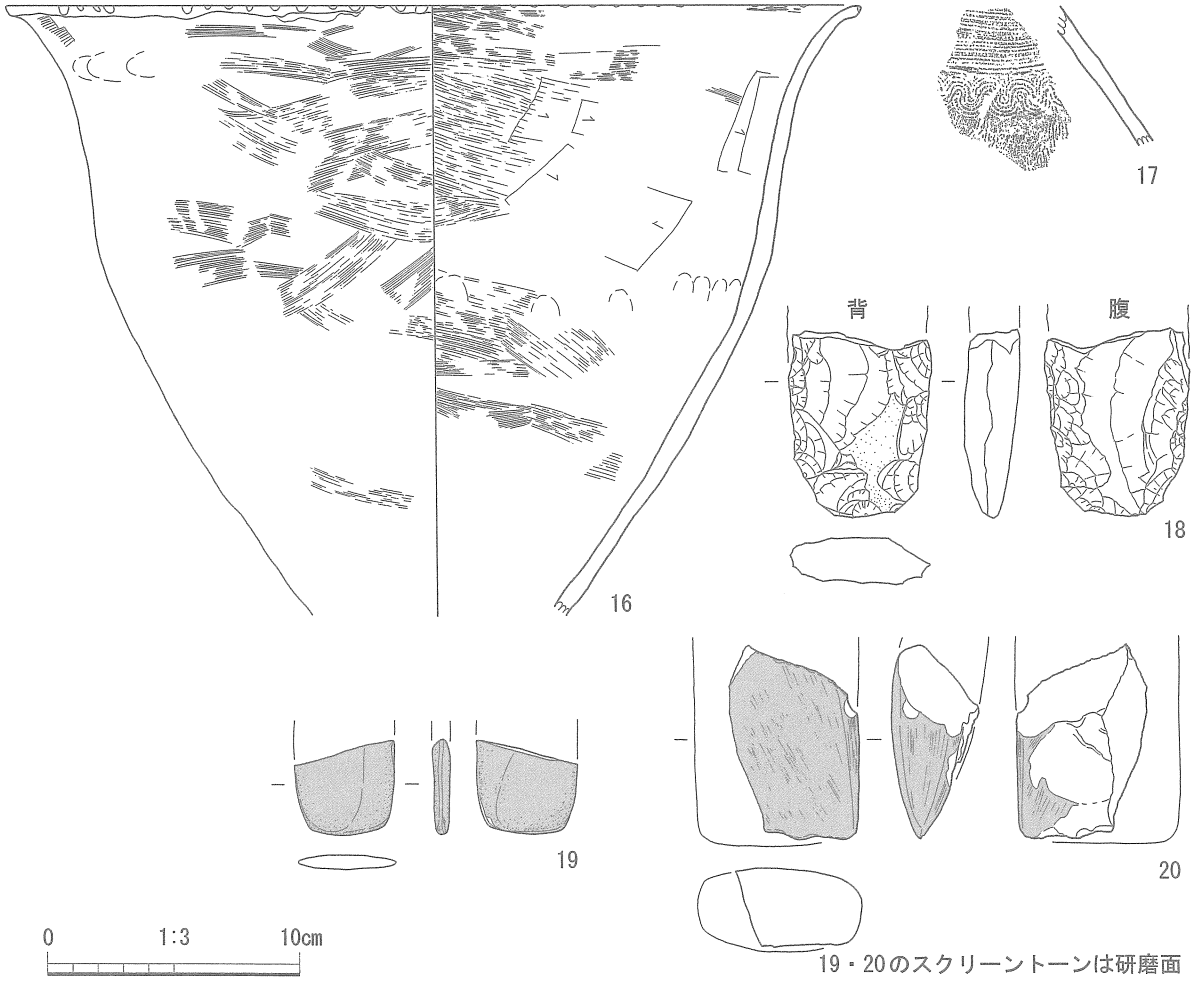
17は出土地点不明であるが、壺の胴部の残欠である。櫛描横線の下端に沿って櫛描波状紋を施しており、白岩式でもⅣ－２様式以降のものである。

石器（第16図18～20）

残念ながらすべて遺構内一括取上げで、出土地点は不明である。18は打製石斧である。一部自然面を残し背・腹面の判別がつくが、断面形は均一に仕上げられている。石材は灰色・硬質中粒砂岩である。

19は側面に研磨を受けた石製品である。磨製石斧のようだが小型で薄く、疑問が残る。石材も灰色・硬質細粒砂岩であり、これ以外の磨製石斧の石材であるカンラン岩ではない。用途不明とすべきか。

20は太型蛤刃磨製石斧の刃部残欠である。石材はわずかに蛇紋岩化（風化）した暗緑色・硬質カンラン岩であり、ずっしりと重く石斧に適した石材である。カンラン岩は天竜川上流に岩帯があり河口地帯でも採取されるので、天竜川流域で採取・製作されたものが当地へ流通していると考えられる。



第16図　白岩遺跡２区：SR04出土遺物実測図（土器・石器）

SR05（第17・18・19図）

土器（21～58）

21～38は壺である。出土地点は第12図に示したが、遺構一括で取上げたものも含む。

21は屈曲内湾の単純口縁を持ち、肩部に縄紋のみを施す典型的な菊川流域の壺で、Ⅴ－３様式に位置づけられている。頸部のミガキは磨滅している。22も21と同時期とみられ、口縁内部にハケ刺突紋を施し、上からミガキをかける。肩部にハケ刺突紋と縄紋を併せて施す「モミダ型」で、志太平野に見られる（注２）。また肩部下端の縄紋の横線に解した縄を用いており、胴部のハケメも粗く方向が様々で、独創的な印象を受ける。破片同士の出土位置と高さに開きがあり、流水の撹拌作用の影響だろうか。

23は頸部から肩部のみ遺存し磨滅もひどく全体が把握できない。一見ハケメのようだが、斜めの櫛描直線紋を撫肩の肩部に垂下したものらしく、Ⅴ－１様式か、Ⅳ－４様式に位置づけられるものである。

24は21～23等とほぼ同一レベルで出土したが、頸部が太く、頸部のハケ刺突横線の他に紋様が確認できない。粗雑化という点で見れば21～23より新しくⅤ－４または５様式に相当する。

25～27は小型壺である。肩部が撫肩を呈しⅤ－１・２様式の範疇であろう。28は肩部の破片で、年代は不明であるがⅤ様式の範疇と思われる。29は肩部の破片だが、刺突紋で頸部・肩部を区画し、櫛歯状工具で櫛描紋を垂下させており、おそらく23と同じ形態で、Ⅴ－１様式でも初頭かⅣ様式末である。

30は折返し口縁を持ち、棒状浮紋ではなく貼付円板を持つのが特徴で、Ⅴ－３様式に位置づけられる。31は口縁部のみ遺存し、口縁内側の紋様帯に貼付円板と貝殻扇紋を配する。Ⅴ－３様式であろう。32は22と同じ「モミダ型」であるが、ハケ刺突紋が羽状である。頸部が詰まり屈曲内湾口縁の湾曲具合もやや強いことからⅤ－３様式の中でも他の21等と比べて新しくなり、覆土中での堆積の順序が逆転する。33は単純口縁の端部にキザミを持ち24のように頸部が太い。Ⅴ－３様式中でも新相だろう。

34は胴部下部のみ遺存し、21や25～27のように稜が強く張らない。時期差か系統差と考えられる。

35は本資料中最大の胴部径を測る。頸部に貼付円板を２つずつ４ヶ所付ける。口縁端部が欠損するが、肩部に円板を配するものはラッパ状に広がる折返し口縁の例が多い。西の太田川流域に多い形態であるが、逆にその地方で顕著なハケ刺突の羽状紋がなく、縄紋のみである。時期はⅤ－３様式である。

36～38はⅤ－１もしくは第Ⅳ様式に属するものである。

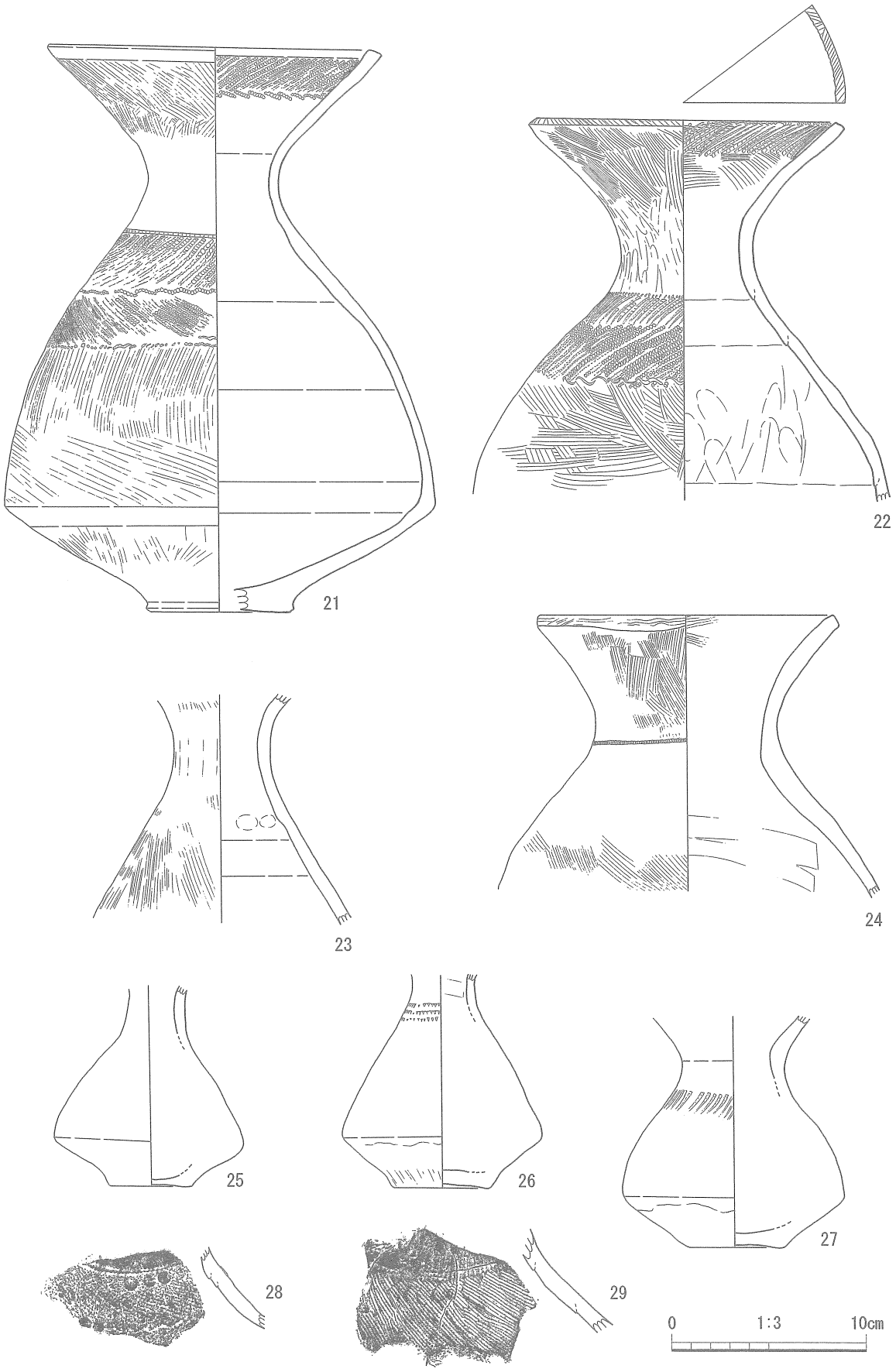
36は口縁がごく僅かに受口状で、頸部に僅かな稜を持つ。頸部の稜は、1966年調査で出土した市原分類の中期Ⅱ（Ⅳ－２・３様式）の太頸壺にも見られ（市原・内藤1968挿図６の４）、本資料はそれがより退化した姿と思われる。直接の系譜とは言えないが、三河（みかわ）Ⅳ様式（東遠江Ⅲ様式併行期）の瓜郷式に始まる受口状口縁の太頸壺の持つ特徴をぼんやりと受け継いだ、なれの果てであろう。Ⅳ様式末～Ⅴ様式初頭ごろに位置づけておく。37も受口状口縁であった痕跡がわずかに残るもので、同時期頃に位置づけられる。38もハケメ以外の調整や紋様は見られず、本遺跡出土例から照らしてⅤ－１様式以前である。

39～50は台付甕または平底甕で、壺類と同じくⅤ－２・３様式に位置づけられる。39は折返し口縁を持ち平底とみられる。40・41・43・44・46は単純口縁で肩が口径を超え、台付であろう。46のみ、工具によらず、粘土を摘み上げて口縁をキザミ状に仕上げていて、やや古いと考えられる。

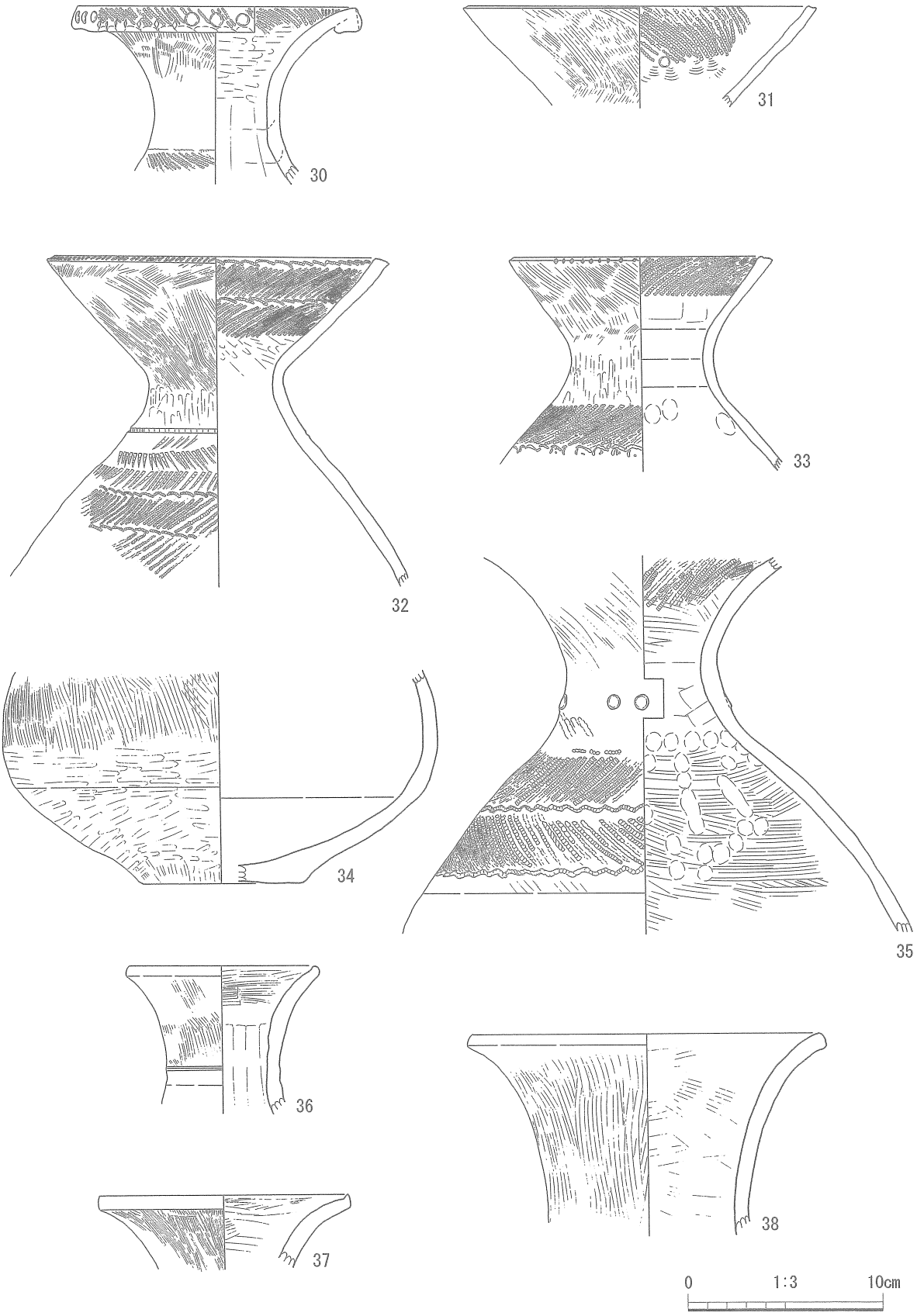
42は39と同じく平底甕で、十露盤（そろばん）球形の稜のある折返口縁を持ち、菊川流域に特徴的な形態である。45・47は口縁径が胴部径を上回り、中期と考えられるが、焼きや胎土の色は後期の土器に近い。小破片なので実測の精度に限界があり、角度の誤差で中期の甕のように見えているだけの可能性もある。

48～50は台部であるが、49は調整がすべてミガキで、高坏の可能性がある。50は胴部の球形具合が強く、Ⅴ－５様式まで下るかなり新しいものの可能性がある。台部と胴部の境をミガキで調整する。

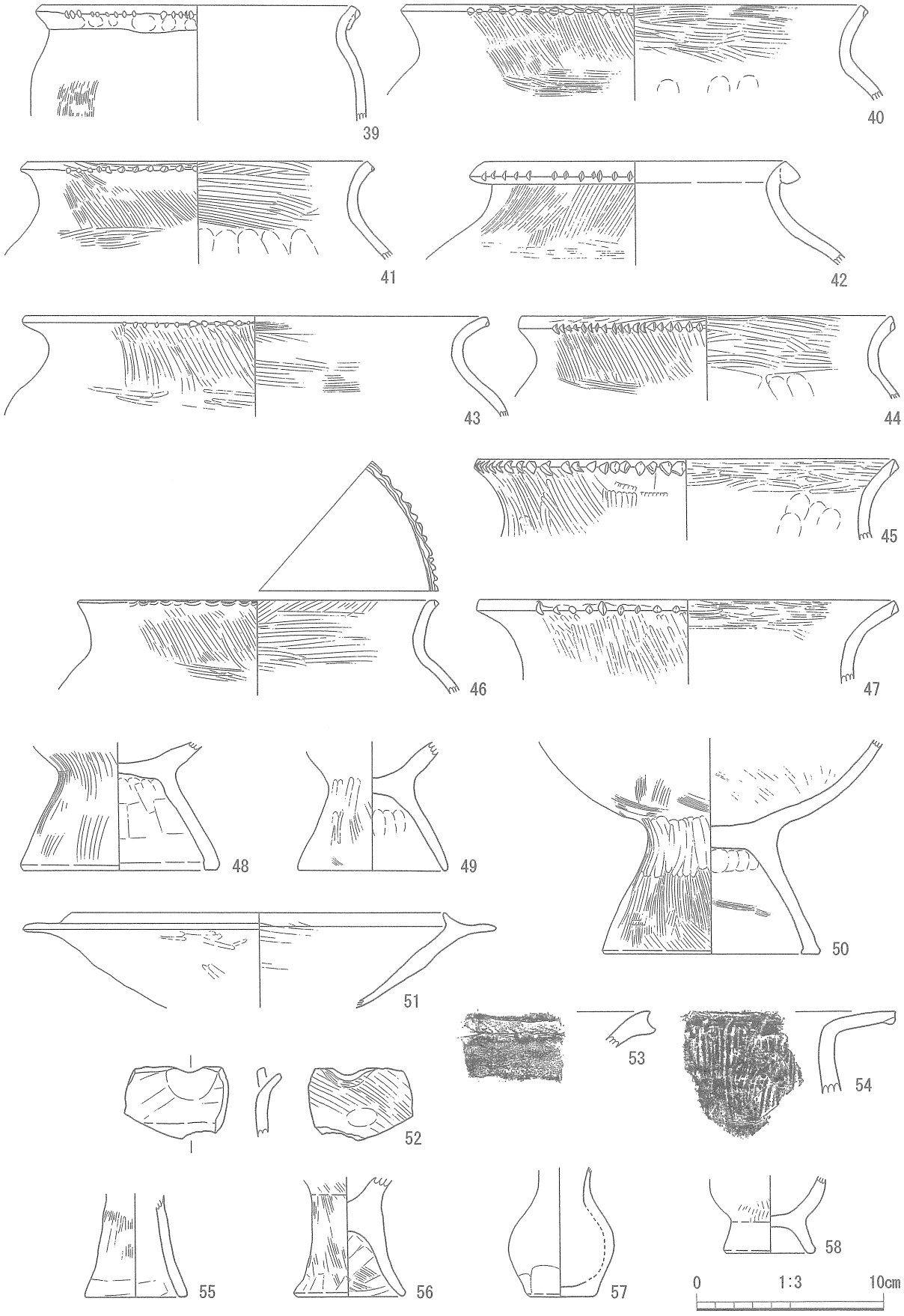
51は鍔状口縁の高坏である。復元実測すると、受部が浅く内面の突帯が口縁の高さを上回る。過去の本遺跡の調査で出土した高坏は、概して受部が深く突帯が口縁より低い位置にあるものが多く、本資料



第17図　白岩遺跡２区：SR05出土遺物実測図１（土器）



第18図　白岩遺跡２区：SR05出土遺物実測図２（土器）



第19図　白岩遺跡２区：SR05出土遺物実測図３（土器）

は三河Ⅶ様式のいわゆる長床式土器後半段階の高坏形態に近いが、直接それと関連付けて論じることはできない。

52は片口の鉢の残欠で、Ⅳ－４またはⅤ様式のものであるが、砕片のため、断定できない。

53・54は甕の口縁で、Ⅳ様式中に位置づけられる。53はその中でもより古い。54は屈曲が異様に強く、ほぼ水平に開く口縁に復元されるが、小砕片のため、誤差によって角度がずれている可能性は否めない。55・56は小型高坏の脚部である。55は壺の口縁の可能性もあるが、口縁上端を綺麗に面取りしてあることから高坏の脚部と判断した。56はミニチュア土器の範疇かもしれない。57・58はミニチュア土器の壺と台付甕で、確かなことは言えないが、Ⅳ様式かⅤ様式のいずれかに属するのだろう。

SR06（第20・21・22・23・24・25図）

前述の土器片層より弥生土器・石器・木製品が出土し、特に土器片の量はテン箱80箱以上に上った。出土した土器片は一部出土位置とレベルを記録したものもあったが、量があまりに膨大であったこともあり、大半は一括で取り上げを行ったため、出土地点と検出レベルが不明のものが多い。

土器（第20・21・22・23・24図59～150）

59～74は一部推定もあるが壺である。大半がⅣ様式の白岩式に相当するが、Ⅴ様式のものもある。59はⅤ様式で、３段の縄紋は全て同一方向に回転し、羽状をなさない。縄紋の横線上の豆粒紋は３粒１組をなし、間隔から推定して６組施されていたらしい。菊川市土橋遺跡例（塚本2001第９・11図など）に似ており、Ⅴ－３か４様式であろう。また下部がちょうど輪積み粘土の接合部分で欠損しており、その端面に積み上げの際、ハケ状工具で接合面を整えた痕が残っている（白岩遺跡写真図版19左上）。

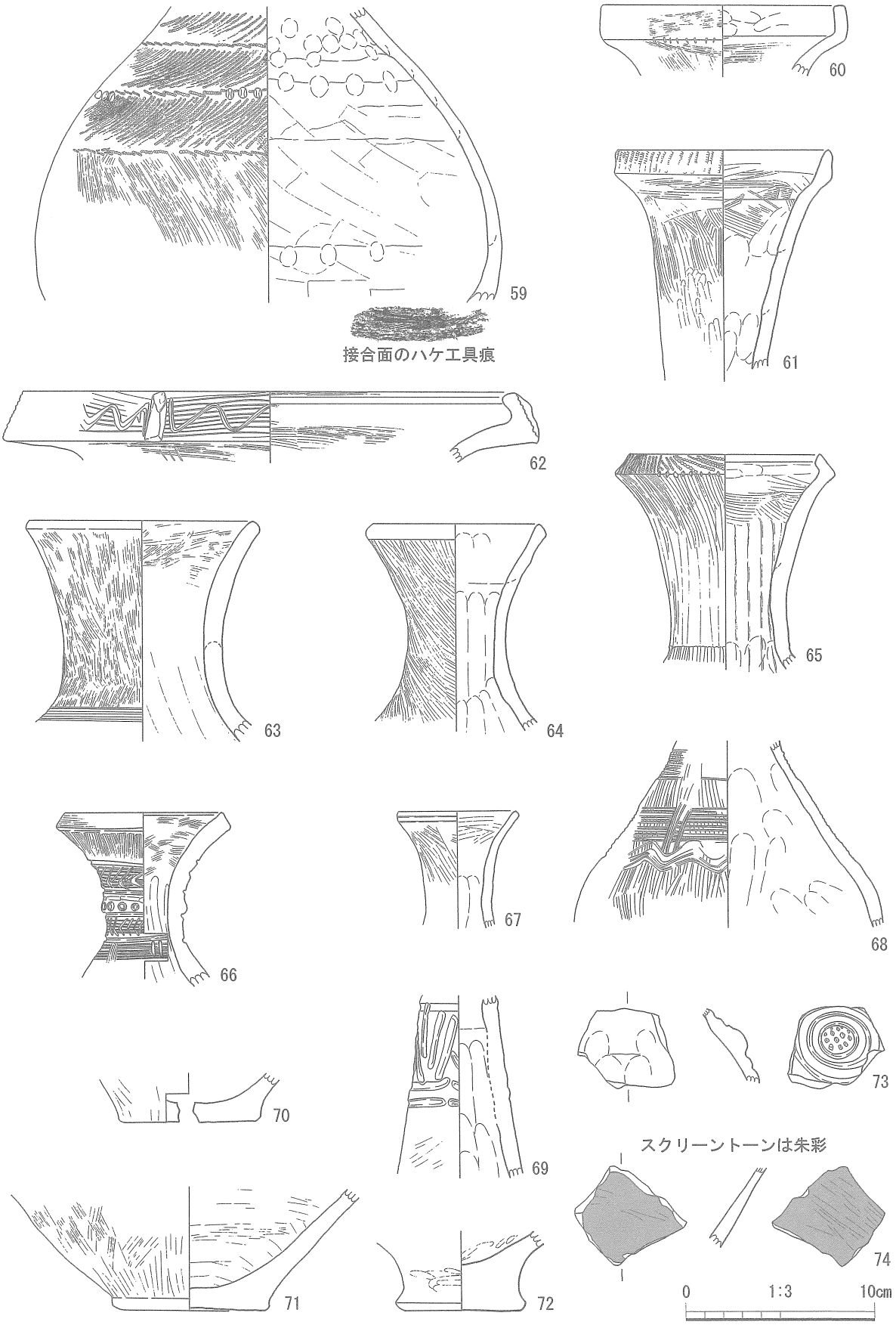
60・61・65は受口状口縁の細頸壺で、肩部以下を欠損するが恐らく撫肩の胴部が続くと考えられる。３点とも1966年調査で「中期Ⅲ」（Ⅳ－４様式併行）に位置づけられている資料と比べると、肩部の紋様などは近似するものの、口縁の開きがやや弱く、一段階古いⅣ－３様式の可能性もある。62は太頸壺で、Ⅲ様式の嶺田式期の受口状口縁の太頸壺にあった連弧紋が退化したもので、Ⅳ－１または２様式に入ると思われる。63は単純口縁の太頸壺で、下部に櫛描紋１条が僅かに残る。菊川市鹿島（・打上）遺跡３号方形周溝墓より出土した太頸壺（塚本1992　p27）に近い形状だとすれば、Ⅲ様式の形態の名残を強く残す、Ⅳ－１様式と考えられる。64の細頸壺は外面全面にハケメが走り、ぼってりとした単純口縁をもつ。当遺跡の、1951年出土資料によく似たものがある（田辺1951）。萩野谷正宏の公表による、掛川市原遺跡の方形周溝墓出土資料（未報告）にも似た例があり、同じⅣ－２様式であろうか（萩野谷2001　p45　図11）。

66は細頸壺で、頸部に４条の沈線を入れて５段の区画を作り、間に様々な紋様を充填する。瓜郷様式にみられた頸部の沈線と無紋帯に紋様が入るようになったものと考えられ、図中では古いⅢ－３様式に入るものである。67は小型品でSR05出土の55のように高坏と判断すべきかとも思われたが、55のような上端の面取りがないことから、一応細頸壺の口縁と判断した。直線的に立ち上がる口縁からⅣ－３様式の可能性が高い。68は櫛描横線帯に縦線紋を組み合わせた萩野谷正宏のいう「丁字紋複帯Ａ」ないし「Ｂ」を持ち、西遠江地域の影響と考えられる。Ⅳ－２様式であろうか。69は細頸壺の頸部であり、判然としないが太めの複合鋸歯紋らしい。Ⅲ様式に遡り、66と同じく図示した中では最古相である。

70～72は壺の底部である。

70は底部中央に穿孔があり、両側から穿孔されているので焼成後穿孔であろう。71は甕の可能性もあるが、壺もⅣ様式段階にはハケ調整の例があるため、一応壺とした。72は底部の踏ん張りが強いことから、在地のものではなく、東の駿河地域で同時期に分布する駿河Ⅳ様式（有東式）の壺と見られる。

73は沈線による３重の同心円の中央を隆起させ、そこに複数の刺突をいれる。この種の紋様は県下のⅢ様式（嶺田式）、長野県の阿島式、南関東の平沢式にみられる近似形態の細頸壺、いわゆる「平沢型壺」



第20図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図１（土器）

において広く用いられる。66と胎土がよく似るが同一個体か否かは判断できない。74は、壺の胴部と推定される残片で、表裏に朱彩がされ、極めて密な胎土を持ち明らかに在地のものではない。

75～84は台付または平底の甕、高坏、鉢である。

75・78は菊川流域に特徴的な十露盤球形口縁の平底甕でⅤ－２ないし３様式だが78は稜が退化している。76は口縁と胴部の径がほぼ一致し、台部の有無は不明だが、Ⅴ－２または３様式であろう。77・79・80は深鉢状甕か古相の台付甕で大きく口縁が開き、Ⅳ様式以前に位置づけられ、特に79は頸部を境に上下方向へ施されたハケが、起点においてめり込むほど強く当てられ、条の間隔も広く条痕紋の名残を想起させる。80は鉢型を呈し同時期の掛川市六ノ坪Ⅳ遺跡出土資料に近似するが（北爪1998）、六ノ坪Ⅳ遺跡の例が全面にミガキを施すのに対し本資料はハケメを持つ。

81は鉢の受部口縁である。直立する部分に、畿内第４様式に見られる簾状紋の退化とみられる紋様をもち、Ⅲ・Ⅳ様式段階に畿内の土器の紋様構成が三河を中心とする東海地方に流入する現象の余波を受けたものであろう。82は高坏の口縁である。内外面とも弱いハケメの後ミガキをかけている。口縁内面の突帯を持たないもので、過去の本遺跡出土例にも多いⅣ様式のものであるが、それらに比べてやや受部が浅い。83は高坏の脚部である。全面にハケメが施され、下端部は内側に折り込まれるように屈曲する。このような下端部がおり込まれるものは原方形周溝墓SD82・83出土資料にも見られ、同類とすればⅣ－２様式に位置づけられる。

84は台付甕の台部と思われるが、通常の台部の縦方向のハケメではなく、ヘラ工具と見られる条痕様の調整を横方向に走らせ、上からミガキかナデをかけて、疎らにしている。内面はナデがかけられているらしい。高さがなく、裾の開きも弱く、ずんぐりとした印象を受ける。図示しなかったが本調査ではこれと同様のものが他に２点ほど出土し、いずれも２次的な比熱を受けていた。

1951（昭和26）年の報告書において「土器台」として紹介された図にも、これと酷似する資料がある（田辺1951　p26）。受部が如何なる形態のものか不明だが、おそらくⅣ様式の古相の、定型化する直前の台付甕の一形態と考えられる。

85～150は壺・甕・鉢類の拓影である。

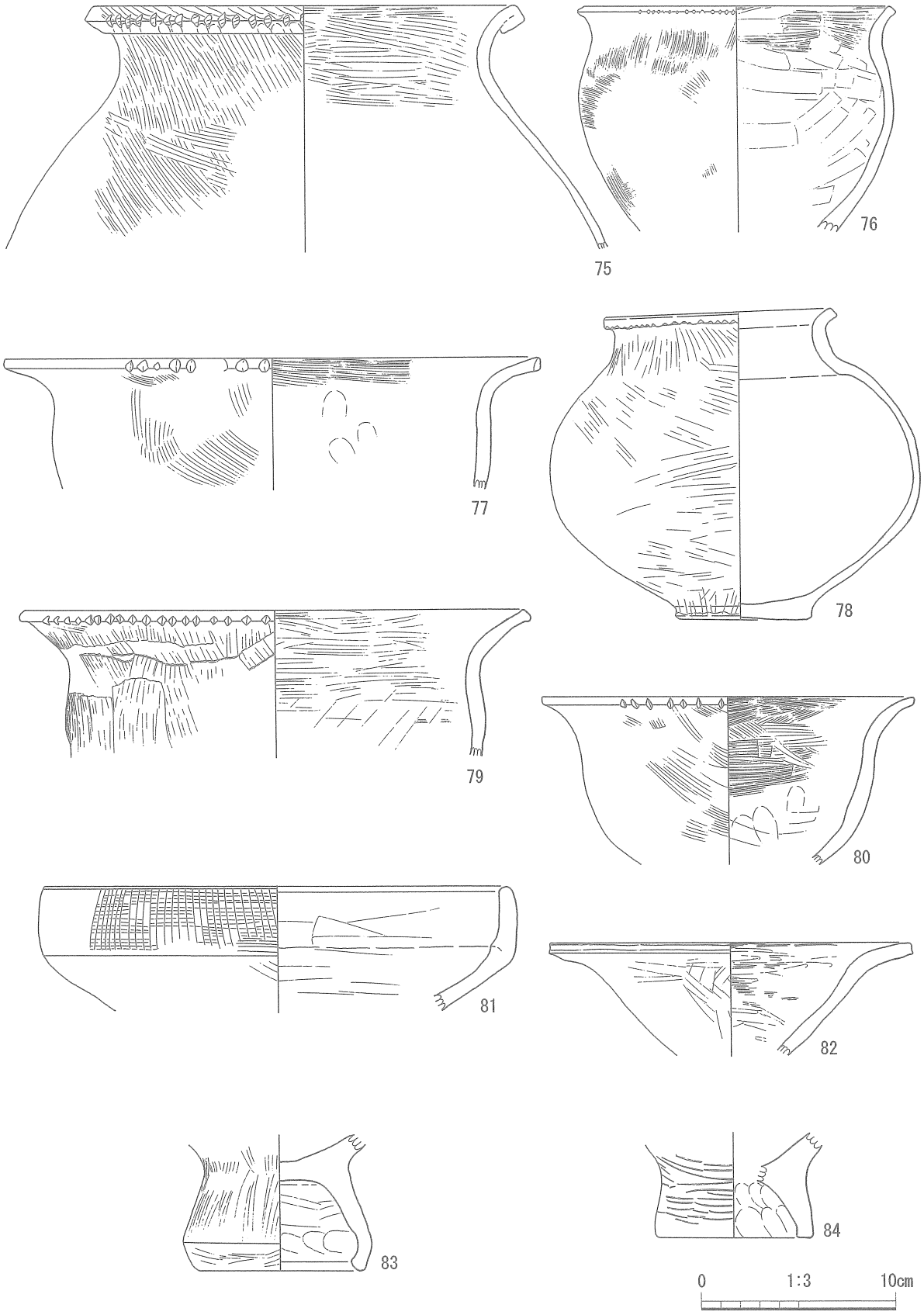
85～92は壺の口縁で、85・89はⅢ－３様式の可能性があるが、86～88・90・92はⅣ様式である。受口状口縁を持つものは、今回の出土品の中では単純口縁よりも比較的多く、特に連弧紋をもつものは瓜郷式以来の特徴をより強く残しているとすると、やや古相に位置づけられるであろう。

93～140は壺胴部である。

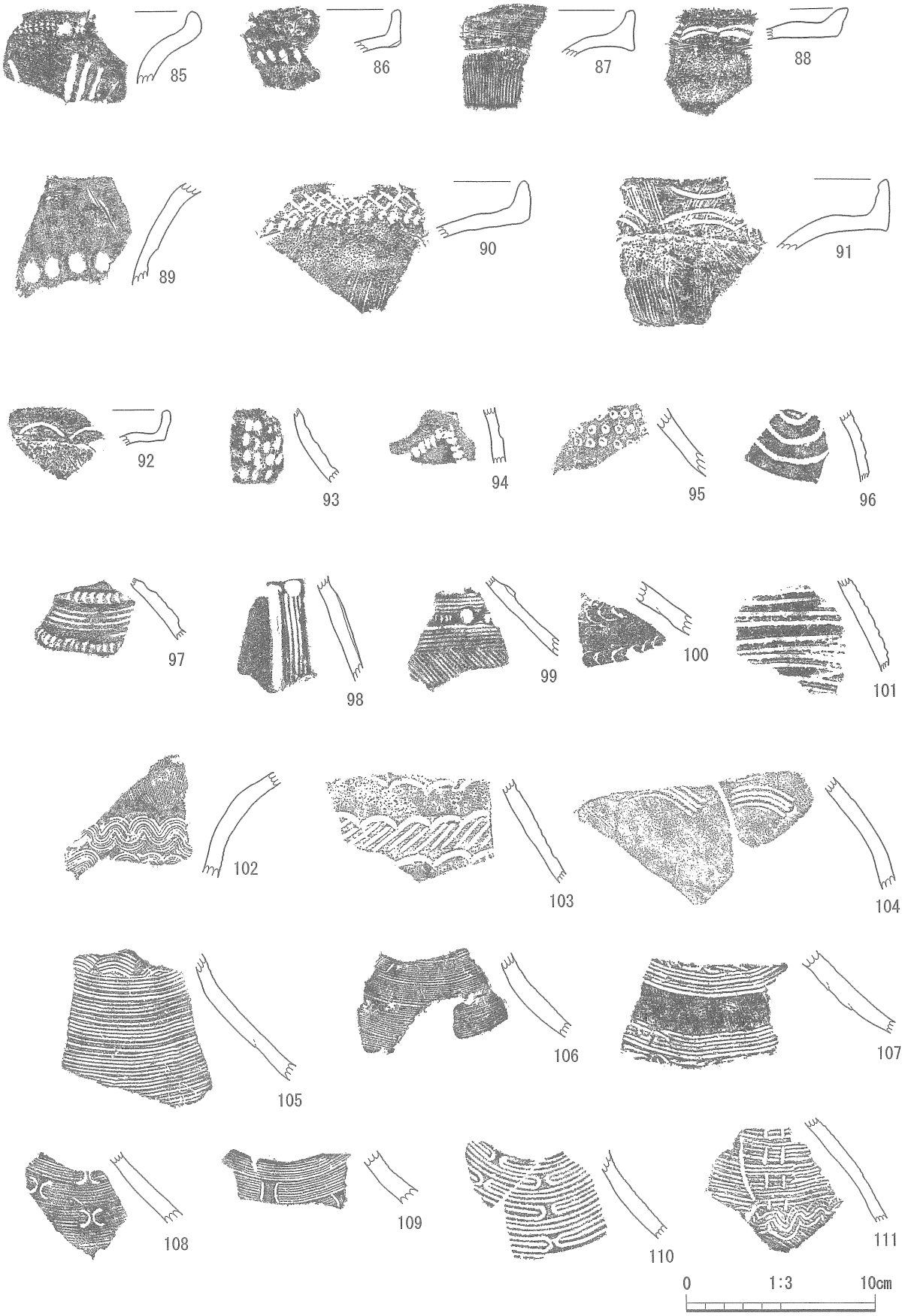
93～101は胴部での位置や年代が判然としないが紋様からみてⅢ様式に属するものである。101は半裁竹管による条痕を持ち、おそらく図示したⅢ様式資料の中でも最も古いと考えられる。

102～140はⅣ様式に位置づけられる。102は頸部中位に櫛描波状紋を複数持つことから在地産ではなく東部の有東式土器と考えられる。103・104は下弦の連弧紋を持つ例で、Ⅲ様式の要素を受け継いでおり、Ⅳ様式の前半であろう。105～107は櫛描横線紋を施すもので、105・106のごとく幅広く重畳する「複帯」と、107のごとく無紋帯を挟む「単帯」がある。105は複帯横線の上部に連弧紋を持ち、103・104の構成を併せ持つ。同一個体ではないが1966年調査で出土した市原分類の「中期Ⅱ」（Ⅳ－２・３様式）にあたるものに酷似する（市原・内藤1968　p366挿図６の11）。同一の構成とすれば横線は疑似流水紋となる。

108～110は擬似流水紋である。110は半裁竹管を用いず、ヘラのみで擬似流水紋を描き、前の２点よりも古い可能性がある。111～113は丁字紋である。112のような、尾張Ⅲ様式の貝田町式を祖とする「単帯Ａ類」の技法が111のような「複帯Ａ類」へ派生する場合や、114～116の紋様へ派生するという想定がなされている（萩野谷2001）。ただし114は他２点とはやや趣を異にする。113は「複帯Ｂ類」にあたる。



第21図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図２（土器）



第22図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図３（土器）

117は2帯の斜格子紋帯を横位に施すもので、菊川市鹿島遺跡３号方形周溝墓例に近いが（塚本1992)、間に無紋帯を持たない。118・119の縦位区画の斜格子紋は、白岩式の中でもやや新しい市原分類「中期Ⅲ」とされ、Ⅳ－３か４様式にあてられる。120の複合鋸歯紋は逆に古く、Ⅳ－１様式にあてられる。121は櫛またはヘラ刺突による頸部区画線の下に櫛描紋を斜めに垂下させて描くもので、SR05の29などと同じである。65も割れ口手前に僅かに残る頸部の区画帯の類似性から見て、同様の紋様が肩部にあった可能性がある。これらのスタイルが掛川市女高（めだか）Ⅰ遺跡（村松1996）や袋井市鶴松（つるまつ）遺跡例（永井1998）などⅤ－１様式初期の形態に受け継がれていくと考えられる。

122～131は複帯横線の下に別紋様を組み合わせる例である。122～127は複帯横線の下に上弦の連弧紋的な紋様を連ねる。125のような丁字紋と組み合わせる例や、126のように退化したものもあるが、おおよそ127に際立つ瓜郷式系の紋様の名残と考えられる。128～130は複帯横線の下に波状紋を、131は連続斜線紋を組み合わせる。132・133は横位の波状紋の下に斜線紋を組み合わせるもので、独特に見えるが、横位の主紋様の下に別紋様を組む原理は前述までの122～131に近い。袋井市掛（かけ）の上（うえ）遺跡SX01の壺の紋様（松井 1983a）にも似ており、仮に同時期だとすれば、122～134の年代はⅣ－３様式ごろと推定できよう。134も同じ原理で、原遺跡83号方形周溝墓出土例に似ている（萩野谷 2001)。135は櫛描羽状紋で、1951年出土資料にもこのような壺がある（田辺 1951)。118や119の縦位斜格子紋に似たものだとすれば、時期もそれらに近いのかもしれない。136は鳥足紋で、1951年資料にも同例の壺がある。

137はおそらく丁字紋であり、一周させた横線の最初と最後の合流部分と思われる。138は雑な波状紋らしき紋様で、1966年の出土例にも多小整っているが似たものがあり、意図的に雑にしているのだろうか。139・140は櫛描波状紋を縦方向にかけ、新居町一里田（あらいちょういちりだ）遺跡出土の壺の紋様に近い（向坂・辰巳1980)。140の上部には上弦の連弧紋が見られるので、さらに上には横線帯があったのかもしれない。

141～144は鉢で、142が口縁に棒状浮紋をつける以外は、複合鋸歯紋、櫛描波状紋、斜格子紋を持ち、壺の肩部に施される紋様を援用している。

145～150は甕である。145のみⅤ様式で、口縁のくびれ部に２孔を穿つ。146は口縁外面下部のヘラ工具による羽状紋があり、並行する時期の駿河Ⅳ様式（有東式）の甕と見たが、有東式では壺の口縁にも同様の羽状紋を施紋するので壺かもしれない。147・150は口縁にハケ工具押圧を施し、キザミの出現する全段階の様相を持つ。148・149も条痕紋状の外面調整を持ち、Ⅲ様式末の古いものと言える。また150は口縁内面に鳥足紋を捺す、珍しいものである。

土製品（第24図151）

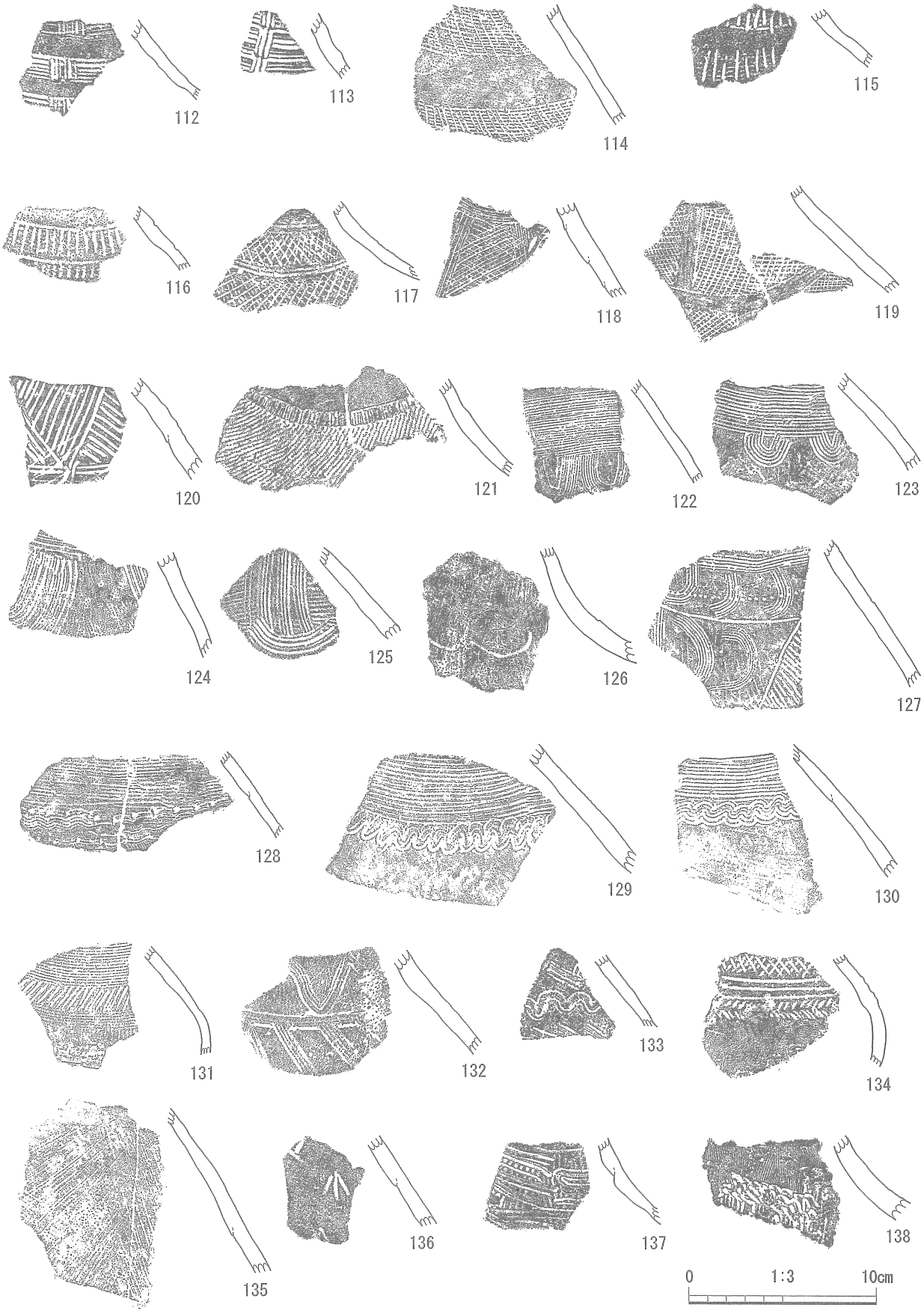
151は土製品の残片で、稜のある突帯を持つ。不明瞭だが突帯は凹部を挟んでもう１本あるらしい。裏面は粘土を手捏ねしたままの状態だが摩滅していて面の生き死が判然としない。粘土と焼きの具合が他の土器とは異質であり、金属製品の「鋳型」の可能性が考えられるが断定できない。

県内では弥生時代の金属器鋳型の出土例はないものの、青銅器の生産自体は、浜松市東前（はままつしひがしまえ）遺跡で出土した、熔解した銅の入った壺によってその可能性を推定できるので（川江ほか2008)、当遺物も何らかの「鋳型」である可能性はゼロではない（注３）。ただし、弥生時代の金属製品のいずれともつかない形状をしており、三遠式銅鐸の軸突線の部分と考えてもあまりに大きすぎる。

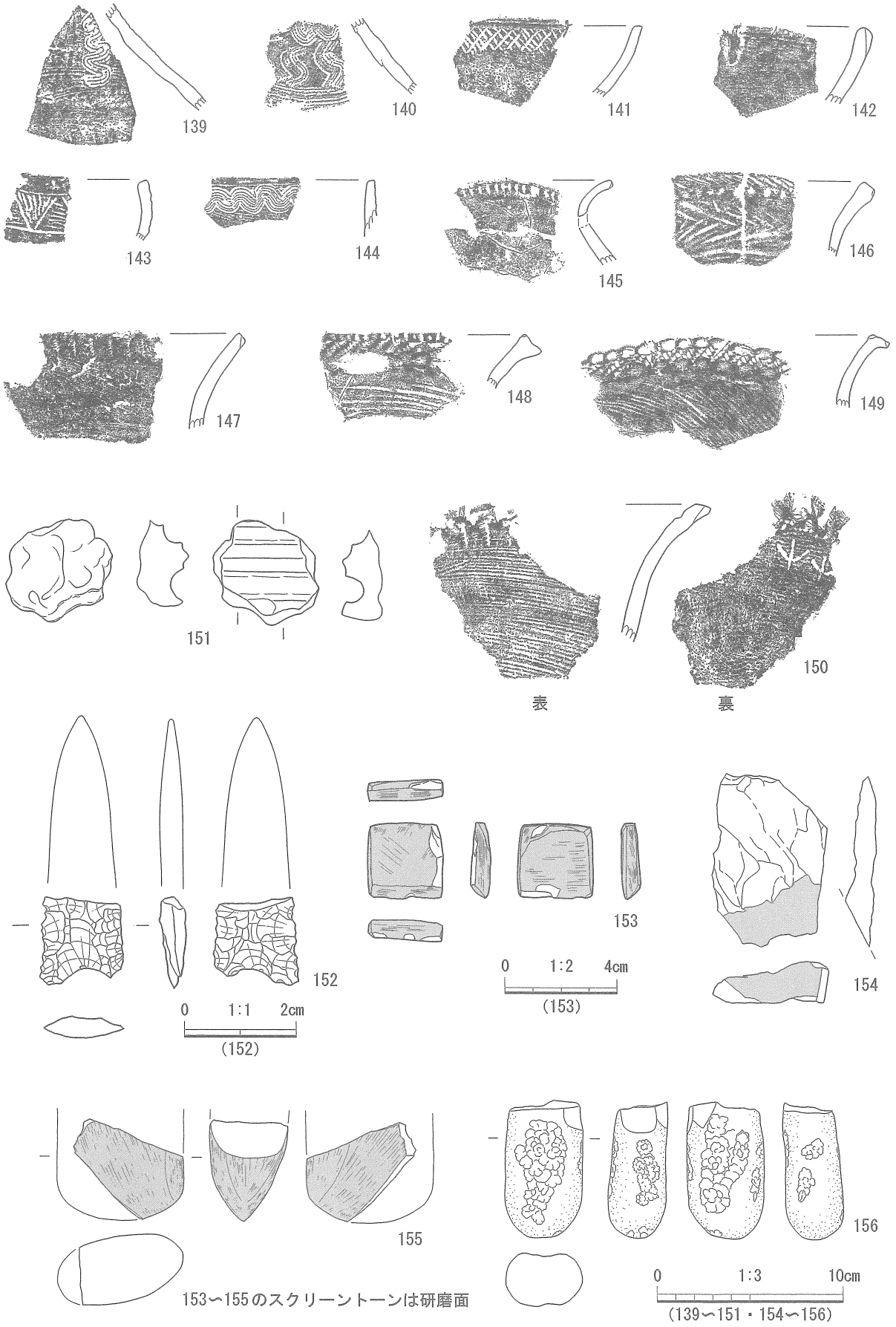
石器（第24図152～156）

152は黒色・珪質粘板岩製の凹基無茎鏃である。欠損しているが、基部付近の幅と欠損部付近の幅からみてかなり細長い形態と思われる。153は黒色・硬質珪質粘板岩製の扁平片刃磨製石斧である。

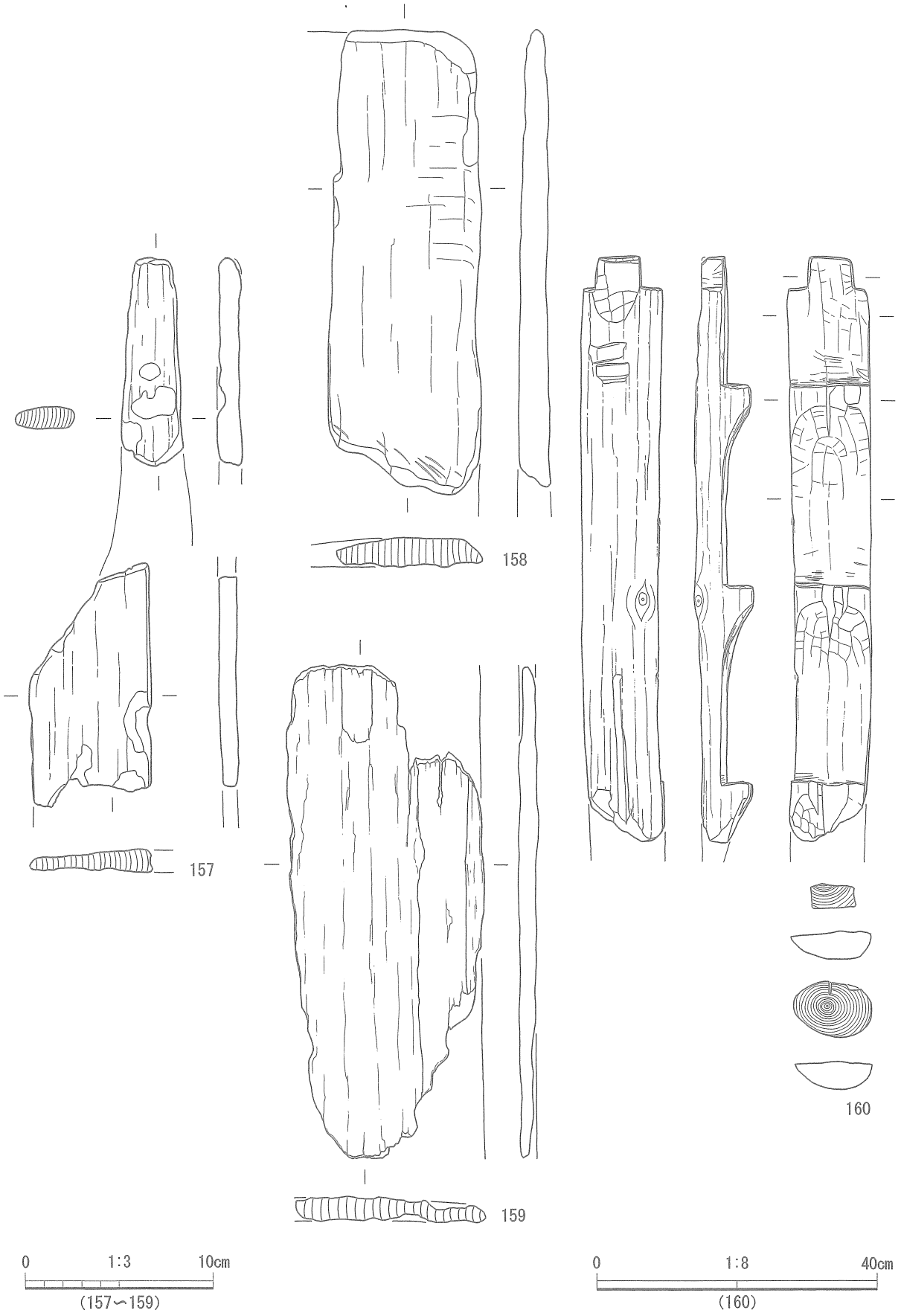
154は暗灰緑色・硬質カンラン岩製の、用途不明の磨製石製品である。欠損が激しく原形をとどめておらず、唯一原表面が遺存する部分には丹念な研磨がかけられている。その研磨面の水平さから、太形蛤刃石斧などの石斧類と捉えるには疑問が残り、正体を推測しかねる。



第23図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図４（土器）



第24図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図５（土器・土製品・石器）



第25図　白岩遺跡２区：SR06出土遺物実測図６（木製品）

155は太型蛤刃磨製石斧の残欠である。石材は暗緑色・硬質細粒カンラン岩で、SR04出土の20よりも粒子が密である。156は褐灰色・硬質中粒砂岩の叩き石である。全面的に敲打されているが、表裏の平の面が最も使用頻度が高い。

木製品（第25図157～160）

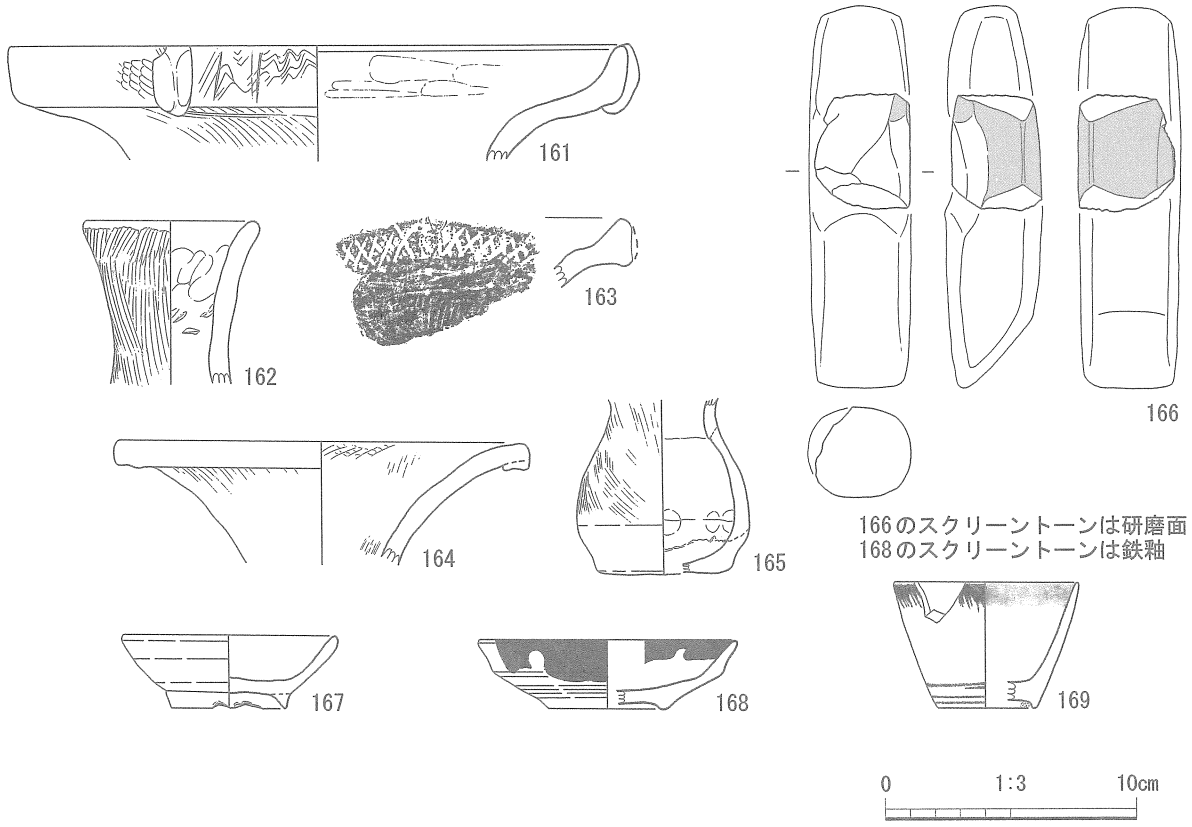
157はアカガシ製の曲柄鍬の鍬先である。基部残欠および一本の刃のみ残るがおそらく又鍬であろう。158は板状木材の残欠で、当時の農具等によく用いられるアカガシであるため農具の可能性もあるが、用途は不明である。また下部には刃物で同一方向から受けたらしい複数の傷が残る。131は板状木材の残欠である。アカガシ材なので農具かもしれないが腐食著しく断定できない。鍬先の基部の部分であろうか。159は梯子の残欠である。エゴノキの丸太を縦に半裁し、足掛けの段を設けたもので、弥生時代以降、高床式倉庫に造りつけられるものとしてよく知られている。上端は枘状に加工されていて、おそらくねずみ返しを嵌め込んだ後、倉庫本体に接続されたと考えられる。

遺構外（第26図161～169）

本調査で発見された**旧・西方川**の土留めの土などから弥生時代を含む若干の遺物が出土した。

161～163はⅣ様式に属する弥生土器の口縁である。161は受口状口縁の太頸壺で、紋様の退化が一層強い。162は内面に「絞り目」と、製作者のものと見られる爪の痕が残る。163も受口状口縁で161と同時期のものか。164はⅤ－３様式に属する。165は57とよく似たミニチュア土器である。166は暗灰緑色・細粒カンラン岩製の抉入柱状片刃磨製石斧の残欠で、推定だが5と同程度の大きさだろう。167は東遠系山茶碗の小碗で、12世紀中頃のものである。遠州地域の中世遺跡において普遍的に見られる。

168は17世紀後半の志戸呂（しとろ）焼の縁釉小皿、169は18世紀初頭の肥前（ひぜん）の染付小碗で、歴史時代を通じて西方川周辺で人々の生活の盛んであったことを物語る。



第26図　白岩遺跡２区：遺構外出土遺物実測図（土器・陶磁器・石器）

第4節　まとめ

（1）各調査区の成果

前節まで各調査区の遺構と遺物について述べてきた。本節ではそれらの成果をまとめていく。

1区は2面の遺物包含層と遺構面が検出され、微高地の突端と考えられる。第1遺構面には1条の流路とピット5基が、第2遺構面では流路2条、ピット2基が検出され、全て弥生時代後期と判断した。

SR01は短期間流れていた流路と考えられる。遺物が激しく磨滅することからそれなりの水量を持っていたと思われる。ピットの並びは掘立柱建物に見えるが即断することは難しい。SR02・03は層の薄さから考えてごく一時的な流れ、推断すれば洪水跡と考えられる。第2遺構面のピット群の性格は不明だが、第1遺構面のピット群に近い位置にあることから、何らかの関係性はありえよう。

2区は弥生時代の自然流路でほぼ占められていた。北側微高地南端に位置するSR04は、自然流路に人工的な改変を加えたもので、洪水で埋まったと見られる。SR06は膨大な量の遺物の堆積から、流れの遅い蛇行流路内側の砂州（ポイントバー）であることが分かるが、遺物の量と密度が土を上回ることから、洪水跡かもしれない。上部のSR05は、土層の厚みが大きくかなり長期にわたる流路である。流れがやや停滞したと思われる層に遺物が集中することから、砂州に溜まる掃流物でなく廃棄物の可能性もあるが、現在考えられている土器の型式変化と、出土層位の順序が逆転するものもあることから、二次的な堆積であることは否めない。

いずれにせよ本調査地点の遺構密度は概して小さく、白岩弥生集落の中心的な場所ではなかった。

ただ、SR05およびSR06は学史的に見て重要な地点である。

田辺昭三が、菊川流域の弥生土器研究の端緒となる遺物包含層を報告した1951年の報告書には、調査地点の土層断面略図が掲載されている（田辺1951　p9）。当時の地表面の標高が18m程だったとすると（注4）、標高17m付近までが「表土」層、16m付近までが「brown silt」層、15m弱までが「grey（grayに同じ）silt」層で、その下の層が「crey（clayの誤記か）」層となっている。主な包含層はこの「crey（clay）」層にあたり、標高は14m台ということになる。

SR05・06の土層図（第12図A－A′・第13図A－A′）と、田辺の図とを比較してみると、SR05④～⑥層が「暗褐色（brown）粘土」で標高15.7m付近、⑦～⑳層が「暗灰色（grey）」または「暗青灰色粘土」で標高14.8m付近、SR06③層（土器片層）が「暗灰色粘土（clay）」で標高14.2m付近までに位置している。「silt（泥土）」と「粘土」で見解が異なる部分もあるが、色味や検出標高はよく似ていることが解る。1951年当時の八幡橋は、現在の八幡橋よりやや東に位置しており、その地点から「下流約150m」を測ると、今回発見された**前・西方川**コンクリ壁の位置とおおよそ符合する。以上のことから、田辺昭三の報告した遺物包含層とは、このSR06の堆積物と考えられるのである。

（2）西方川と白岩遺跡

今回の調査地点では、戦後の河川改修でその役目を終えた、歴代の西方川流路も見つかった。これらの河川改修に伴う発掘調査の記録が白岩遺跡の基本的な資料となっているが、概報以外の本報告が少なく、全貌が不明のままのものが多い。ただしそれらの記述からも、漠然としてではあるが弥生時代当時の古・西方川の流れを推定し、集落の範囲についても推定できるので、ここで考えてみたい。

1947（昭和22）年以前の「**旧・西方川**」は、八幡橋の北側で大きくS字を描いていたが、同年の八幡橋北側の改修により、直線的な流路に切り替えられた。1951（昭和26）年には八幡橋南側で改修が行われ、SR05・06包含層が発見されると同時に流れが全て「**前・西方川**」に切り替えられた。

さらに1973（昭和48）年の改修では、八幡橋が西に移され、より直線的な現在の西方川となった。

これらの調査ではいくつかの弥生時代に遡る流路が検出されている。1973年の調査に大場磐雄らの調査した地点は「A・B地区」と呼ばれ、八幡橋を挟む南北の、現流路の範囲である。今回調査の1区は「A地区」の東に、２区は「B地区」の西に隣接する。成果は略報のみ公表されていて、それによればB地区では弥生中期～後期の土器を含む長さ40m・幅5mの「大溝」が、「B地区北西隅から南東方向にカーブ」して検出されている（大場1973)。「B地区」に「大溝」があったとすれば、隣接する２区の流路のどれかに繋がってくる可能性が高いが、調査区北側は微高地で流路は検出されず、SR04も小規模である。とすれば、微高地に付き当って北西から南東へ流れてきた「大溝」が、南西に蛇行したものがSR05ないし06である可能性がある。

この他の流路の報告として、1966年の調査で、現在高速道路直下となっている「D地点」で、木杭列を伴う弥生時代中・後期の流路が検出されている。概報の図から見る限り、この流路は、おおよそ調査区の北西側から、南東へ流れていたと考えられる（市原・内藤1968挿図５)。

また、1983（昭和58）年には菊川町教育委員会により東名高速道路北側の現流路左岸地帯で調査が行われた。概報には、「簗（やな）」と推定されるL字型の杭状遺構を伴い主軸を南東へ向ける流路が報告されている。簗の検出された流路をそのまま延長すると、1966年調査「D地点」の流路跡の方向に近くなる。その地点をさらに南に延ばせば、1974年調査の「大溝」の地点にも近づき、さらにその南には今回調査区２区の流路が存在する。

推論の域をでないものの、一連の発掘調査に見える流路は、ほぼ下層に弥生時代中期、上層に後期の遺物を包含すると言うよく似た堆積状況を呈することから、同一か、極めて近い時期の古・西方川であり、遺物が集中する場所は、それぞれの蛇行地点のポイントバーである可能性がある。

今回調査の南でもSR05の続きらしき流路を追うことができる。２区のすぐ南に隣接し、現在方吹（かたぶき）遺跡と呼ばれる範囲では、1999年の県道37号線白岩橋建設に伴い調査が行われ、弥生時代後期の流路が検出された。この調査以前には菊川市教育委員会によって隣接地でも調査が行われ、同じく自然流路から多量の弥生土器が出土したという（勝又1999)。遺物がほぼ皆無で、北西から南東方向へ流れていたと考えると、この流路は蛇行部の外側と判断できる。SR05・06が、北東から南西へ蛇行する流路の内側であったとすると、この２流路は同一の古・西方川で、２区で南西へ向かっていたものが、白岩橋北西付近で東に蛇行し、南東へ向かったものと考えられる。菊川市教育委員会が調査した、「遺物を多量に含む自然流路」とは、この蛇行の内側部分の可能性がある。第４章でのべる白岩下遺跡は、西の丘陵部からのびてきた低位段丘の緩斜面であり、最下層北端でわずかに南東へ向かう古墳時代以前の流路が検出されている（第４章)。このことから弥生時代の古・西方川は、方吹遺跡で蛇行した後、南流し、白岩下遺跡の北東をかすめてより東の方へ向かっていったのではないかと考えられる。

以上、弥生時代の流路の位置関係を考えてきたが、それらから次のようなことが推定できる。流路に対して「簗」や杭列を配するなど改修を行っている場所は、現状では八幡橋南の「B地区」より北側で顕著であり、今回の２区流路などでは、相当摩滅し、遠くから流れてきたらしい遺物群がほとんどであった。河川に対する改修痕跡もなく（注５)、おそらく生活圏からやや距離を置いていると思われる。この傾向は、南の方吹遺跡方面へ行くほど顕著となり、流路以外の弥生時代遺構の密度も減少する。

以上のことから、今回調査地点は、白岩弥生集落の最も南の縁辺に位置し、集落の中心域は、東名高速道路より北側の八幡社から伸びる微高地か、対岸の沖積地、すなわち栗林（くりばやし）遺跡と呼ばれている領域を含む範囲に主に拡がっていたのではないかと考えられる。

この周辺では近年菊川市教育委員会により調査が継続的に行われているため、今後の成果の公表を期待する次第である。

第４章　白岩下遺跡の調査

第１節　遺跡の立地と土層

すでに「第２章　遺跡の位置と環境」では、西方川流域にある周辺遺跡の立地について考えたが、さらに、白岩下遺跡について細かくみるとつぎのようである。遺跡は西方川と菊川の形成した谷底平野に向かって、南北に延びた低位段丘が低地に向かって埋没したところに位置する。見た目には平坦にみえる段丘のもともとの地形はわずかに傾斜し、北西側が高く南東側へゆるやかに下がっている。
したがって遺跡の北端は微高地であり、南端は微高地から低地に向かって下る部分であって、両者の土層に違いが認められた。共通項の多い下位の層位から述べることとする。

第28図の柱状図B、C、Dの層位に共通する遺跡の基盤層は黄灰色泥岩（Ⅷ）である。Aの断面では海抜15.5mまで掘り下げているが、黄灰色泥岩は把握できなかったため、もっと下位に存在すると考えられる。このⅧ層の海抜レベルは埋没している段丘の表面の高低を表すものと考えられる。

A～Dの土層断面には基盤層の上位に褐色砂礫土（こぶし大～幼児の頭大の礫を含む）（Ⅶ）が堆積していた。これは礫の大きさから西方川の浮流堆積物とは考えられず、河岸段丘を構成する褐色砂礫層の二次堆積層である。遺跡周辺の堆積がみられる露頭部を観察したところ、粘土やシルト、砂層など河川浮流堆積物が多く、褐色砂礫土はあまりみられない。この褐色砂礫層は古い流路内の低くなった部分に堆積したものと考えられる。

A～Cの層位には褐色砂礫土の上位に黄褐色砂層（Ⅵ）や灰黄褐色シルト（Ⅴ）、にぶい黄褐色シルト層（Ⅱ）が堆積している。これは微高地から低地に緩やかに下った部分の堆積と河川浮流物による堆積層であろう。

C、Dの土層は黒褐色シルト層（Ⅲ・Ⅳ）に１～２面の遺構面が認められた。これは川辺に繁茂したアシやヨシなどの草木類が腐植して有機質の堆積物となり、つくられた土層と考えられる。

AからDのすべての層に共通するにぶい黄橙色シルト（Ⅰ）は表土である。北東は西方川改修以前宅地となっており、この層には細かい撹拌が認められ、畑や園地にみられる土層であった。

以上の所見をまとめると、今回の調査区は西方川の旧流路に面した低位段丘上とその緩傾斜面といえよう。

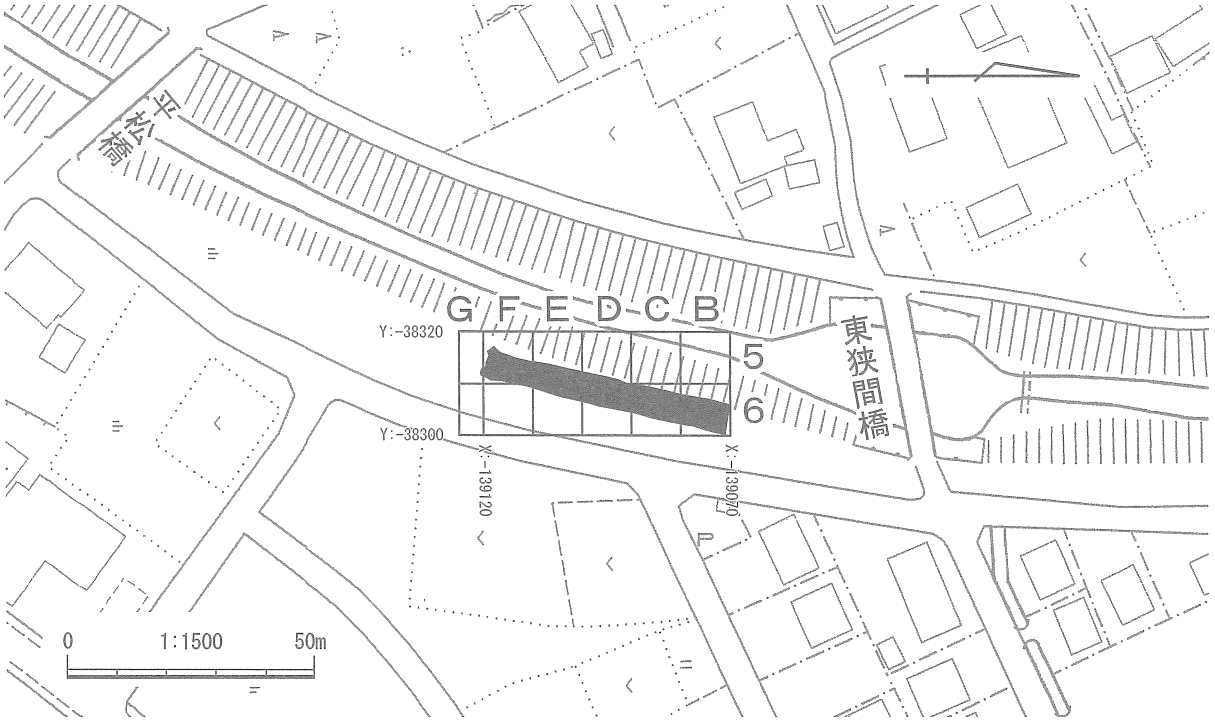
第２節　検出された遺構

平成18年度の発掘調査の結果、白岩下遺跡では３面の遺構面を調査した。あらかじめその概観を述べ、つぎに各遺構面についての記述をすすめる。

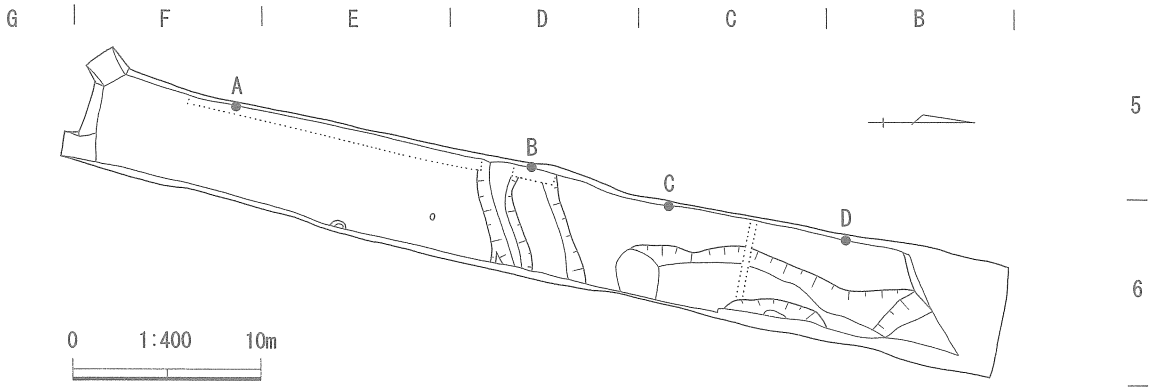
第１遺構面は江戸～古墳時代後期の遺構と遺物が認められた。５条の溝状遺構、土坑１カ所、ピット、土器集中箇所を検出した。遺物は陶器、山茶碗、灰釉陶器など鎌倉時代・平安時代の容器、須恵器・土師器など古墳時代後期から奈良時代の容器類が出土している。

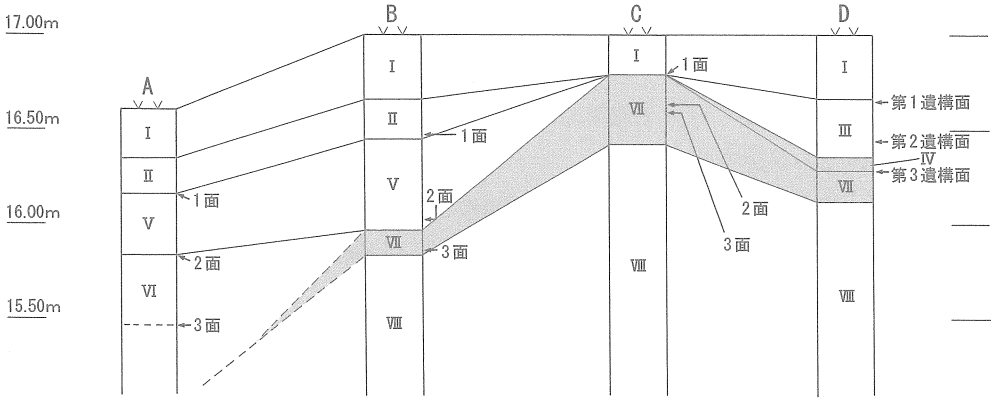
第２遺構面は古墳時代中期の遺構と遺物が認められた。１条の溝状遺構、１条の流路跡、焼土・土器集中箇所各１カ所を検出した。遺物は水辺の祭祀を行ったと考えられる土師器が多数検出された。

第３遺構面は古墳時代前期の遺構と遺物が認められた。１条の流路跡、土器集中箇所各１カ所を検出した。遺物は水辺の祭祀を行ったと考えられる土師器が検出された。今回の調査区北側には奈良時代初頭から古墳時代前期水辺の祭祀遺構があったものと考えられる。南側には溝状遺構が掘削されていたことから、平安時代から鎌倉時代の集落の一角であったと考えられる。



第27図　白岩下遺跡グリッド配置図





※旧流路中であり、遺構確認面は基本層序に対応せず

Ⅰ　にぶい黄橙色シルト　10YR 7/3
Ⅱ　にぶい黄褐色シルト　10YR 5/4
Ⅲ　黒褐色シルト　土器片を多く含む。
Ⅳ　黒褐色シルト　こぶし大の礫を多く含む。土器少々あり。
Ⅴ　灰黄褐色シルト　10YR 6/2
Ⅵ　黄褐色砂層　2.5Y 5/1
Ⅶ　褐色砂礫層　こぶし大～人頭大の礫
Ⅷ　黄灰色泥岩　2.5Y 6/1

第28図　白岩下遺跡基本層序図

第29図　白岩下遺跡全体図

第１遺構面の遺構

調査区北東から江戸時代の陶器瓶類１点とカワラケ２枚が出土した。この地点は昭和40年代後半の河川改修まで宅地であった場所で、表土の一部である近・現代の造成土は重機によって取り除き調査に入っている。したがってそれより下位からの出土であり、何らかの理由で陶器とカワラケは埋められた、と推定される。カワラケも大破片であり、それほど破損していないことから、おそらく壊れたために捨てたというよりも、地鎮のために埋めたと推定しておく。

土器集中箇所（第30図）

調査区北側段丘からやや下がった緩傾斜面から３カ所の土器集中がみられ、北からＡ・Ｂ・Ｃ群と呼称した。出土した土器からすると、Ｃ群の６世紀末から７世紀初頭の土器群が古く、Ｂ群の８世紀初頭が新しい。これら土器集中は川辺の祭祀のために供献行為が行われたと推定される。

SD01（第31図）

調査区南半分からはよりやや下った平坦面から５条の溝状遺構が発見された。発見順にSD01から05と呼称した。SD01は長さ約3m、幅1.28m、検出上面より底面までの深さ22cmを測る。遺構内からは土器細片が出土したが少量であり、遺構の年代決定の判断材料とはなりえない。このうち灰釉陶器の小碗片がもっとも新しい遺物であることから、10～11世紀以後埋まったと判断された。遺構を埋めた堆積土は人工的に埋めたとは考えづらく、自然に埋まったと判断される。

SD02（第31図）

SD02は長さ約5.3m、幅1.58m、検出上面より底面までの深さ17cmを測る。遺構内からは土器細片が出土したが少量であり、東遠（とうえん）系山茶碗窯の小皿片がもっとも新しい遺物であることから、13世紀以後埋まったと判断された。遺構を埋めた堆積土は人工的に埋めたとは考えづらく、自然に埋まったと判断される。

SD03（第31図）

SD03は長さ約1.75m、幅75cm、検出上面より底面までの深さ16cmを測る。遺構内からは土器細片が出土したが少量であり、遺構の年代決定の判断材料とはなりえない。このうち灰釉陶器か山茶碗の判断できない小碗片がもっとも新しい遺物であることから、11～13世紀以後埋まったと判断された。遺構を埋めた堆積土は、人工的に埋めたとは考えづらく、自然流入によって埋まったと判断される。

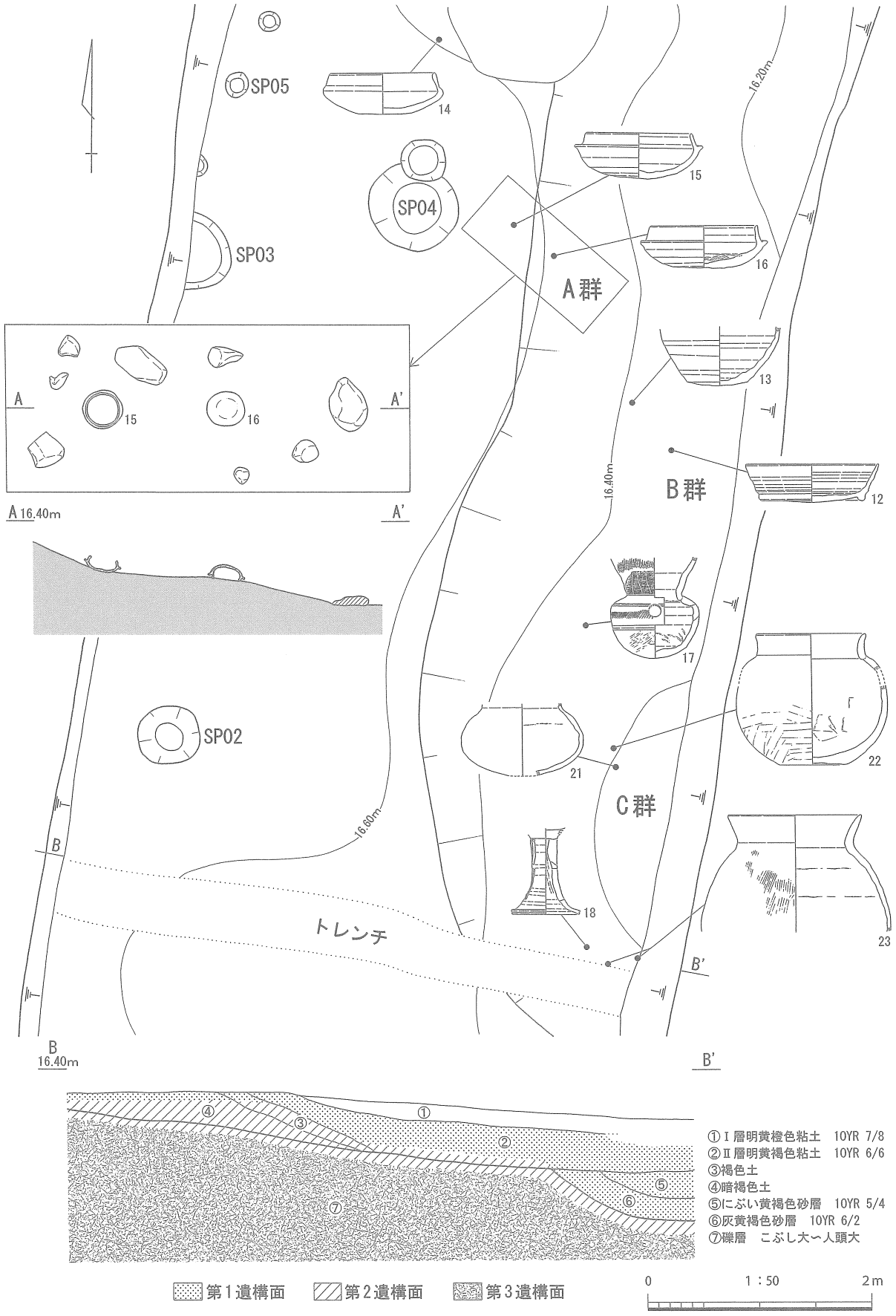
SD04（第31図）

SD04は長さ約2m、幅40cm、検出上面より底面までの深さ18cmを測る。遺構内からは土器細片が出土したが少量であり、灰釉陶器片がもっとも新しい遺物であることから、10世紀以後埋まったと判断された。遺構を埋めた堆積土は人工的に埋めたとは考えづらく、自然に埋まったと判断される。

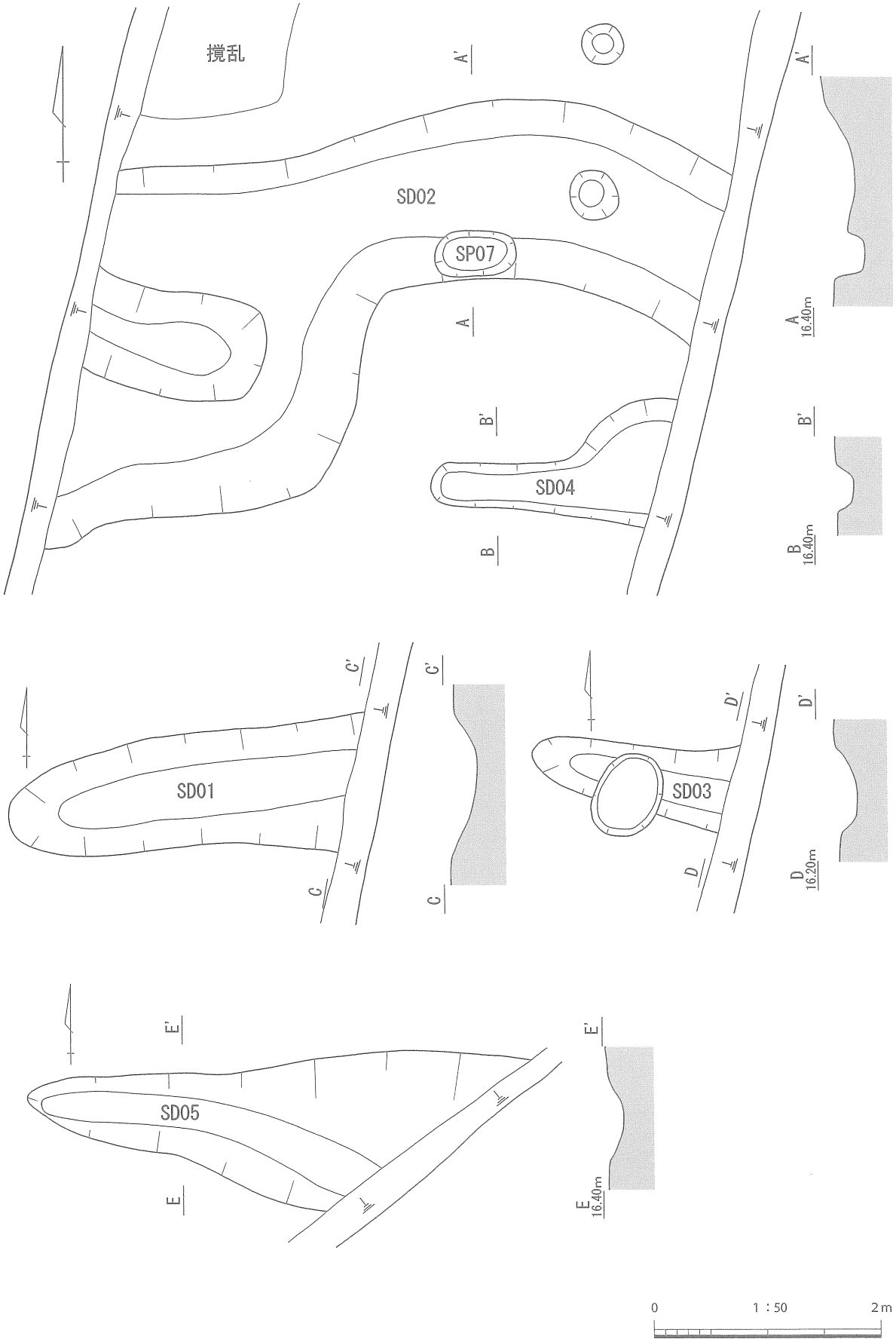
SD05（第31図）

SD05は長さ約3.8m、幅72cm、検出上面より底面までの深さ18cmを測る。遺構内からは土器細片が出土したが少量であり、奈良時代の須恵器甕片や灰釉陶器片がもっとも新しい遺物であることから、10世紀以後埋まったと判断された。遺構を埋めた堆積土は人工的に埋めたとは考えづらく、自然に埋まったと判断される。

このほかピットや土坑が認められたが、遺構の並びに統一性はなく、柱穴のような遺構とは考えられなかった。これらの遺構からは土器細片が出土したが少量であり、遺構の年代決定の判断材料とはなりえなかった。



第30図　白岩下遺跡：第１遺構面土器集中平面図及び出土状況図



第31図　白岩下遺跡：第１遺構面平面図

第２面の遺構

SX01（土器集中箇所）（第32図）

調査区北西の旧西方川に面した段丘上から土器集中箇所が発見され、SX01と呼称した。北から南に流れる西方川の流れからすると、この部分は流路の攻撃斜面に面した段丘低位にあたる。土器集中の範囲は南北８ｍ、東西３ｍを測り、その容器の種類は壺・甕・高坏である。土器集中箇所の海抜高は16.5mから16.25mにあたるが、斜面からの出土した土器はもともと平坦部に置かれた土器が壊れ、斜面に転落し、そのまま埋まったものと考えられる。検出された土器群は海抜高で、16.5mから16.4m付近に集中していたと推定される。野外に置かれた状態で発見されたが、埋めていた土壌は有機質の黒褐色シルトであって、川辺のアシ・ヨシ類が腐植してできた土である。すると土器を置くために川辺の草木を刈り払い、土器を置き、そのまま草木類の成長とともに埋まったものと理解される。おそらく単なる土器供献というよりも川辺の祭祀遺構であろう。

SD07（第33図）

SD07は長さ約5.5m、幅2.2m、検出上面より底面までの深さ40cmを測る。遺構の下位から中位からは土師器坏、高坏が出土した。この遺構の堆積土には黄灰色から黄褐色を呈する砂層が、中上位にはシルト層が堆積していた。このことからこの溝には流水があり、浮流堆積物の砂層によって埋まったのちは、低地化してシルト層が堆積したものと推定される。遺構内には出土した土師器坏、高坏より新しい遺物がほとんど認められないことから、それ以後埋まったと判断された。遺構を埋めた堆積土は人工的に埋めたとは考えづらく、自然に埋まったと判断される。

このほかSD07の南側で焼土１カ所が認められたが、周辺に柱穴のような遺構とは認められなかった。この周辺からは土器細片が出土したが少量であり、遺構の年代決定の判断材料とはなりえなかったが、この焼土も２面からの検出ということで、５世紀代と考えておく。

第３面の遺構

SX02（土器集中箇所）（第34図）

調査時には調査区北西から発見されたSX01下層と呼称し、遺物を取り上げたが、厳密にはSX01の北であり、さらに遺構面も異なることから、本書ではSX02として別けた。検出面は段丘基盤層である黄灰色泥岩にあたる。土器集中の範囲は泥岩を南北3.2m、東西1.35m、深さ20cmを測る凹みに土師器片がつまっていた。その容器の種類はＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字口縁甕に略）、くの字状口縁台付甕、小形高坏、壺である。浅い凹みに一括廃棄したと推定される。

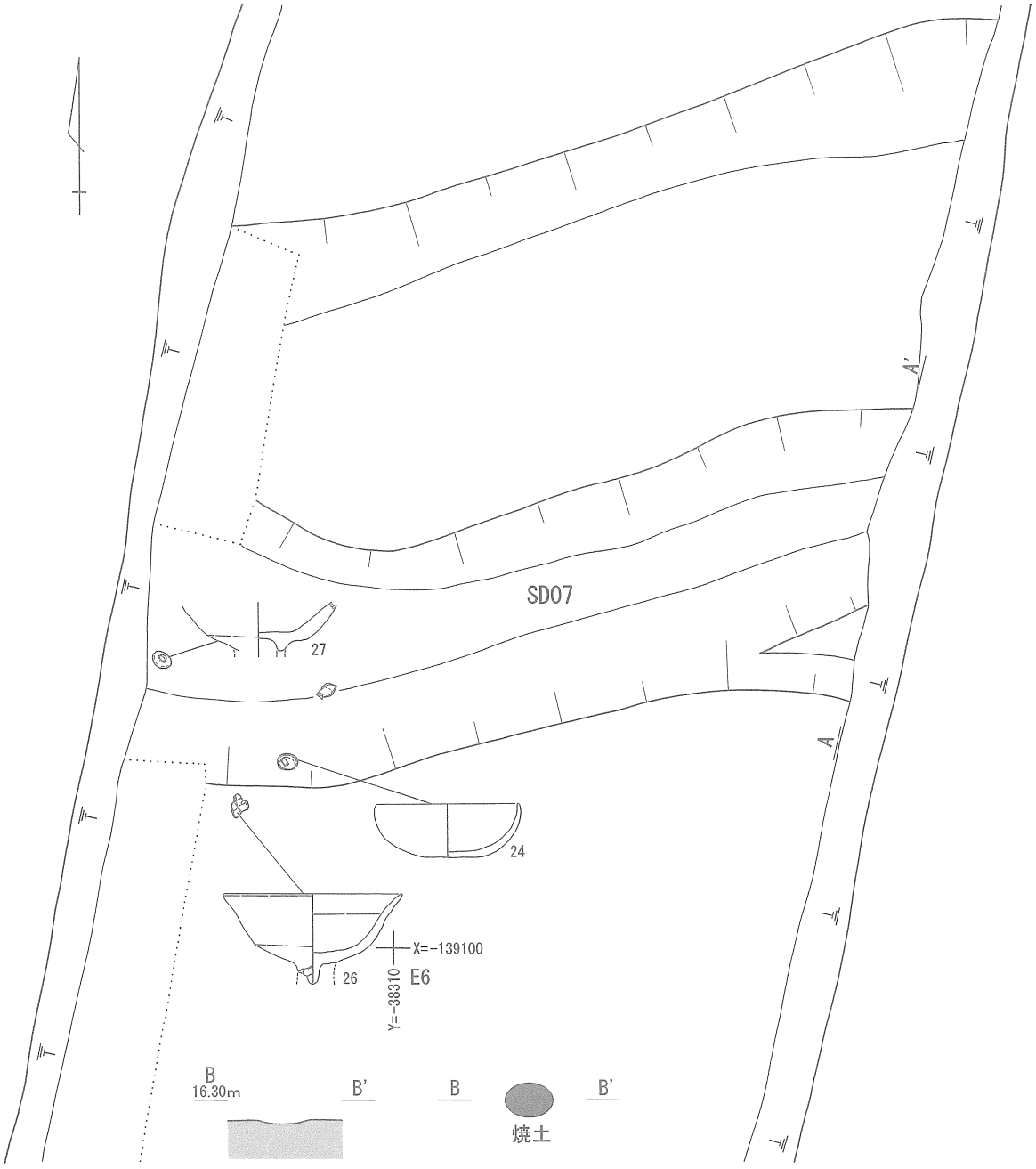
調査区東側についてはトレンチ調査を実施したが、古い流路が認められた。その結果、自然堆積のみであったので、全面調査は割愛した。

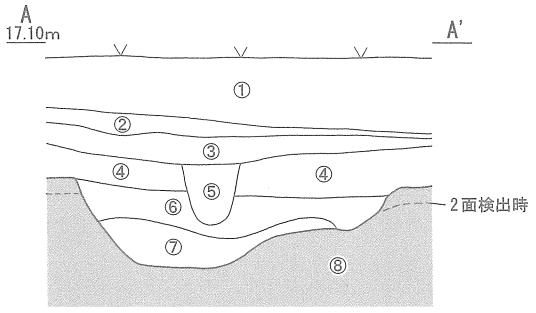
第３節　出土遺物

中・近世の遺物（第35図１～11）

１～３は近世の遺物で、今回の調査で出土した遺物としてはもっとも新しい遺物である。１は志戸呂焼の瓶であり、下地にサビ釉を化粧掛けし、鉄釉をかけている。高台直上に最大径をもち細い頸部から花立てであろうと推定されるが、類例を知らない器形である。釉や焼成から18世紀から19世紀初めと推定される。２・３はカワラケである。同じ頃であろう。第１遺構面の遺構の時期を示す小皿（第35図４～９）が出土している。４はSD02から出土し、図示できた小皿である。この小皿は渥美（あつみ）・湖西（こさい）系山茶碗窯の製品である。それ以外の小皿は、遺構を伴わないで調査区北側から出土した。９の渥美・湖西系山茶碗窯の製品をのぞいて、東遠窯の製品であるので、遺跡の至近距離にある皿山（さらやま）古窯跡群で焼造されたと

第32図　白岩下遺跡：第２遺構面SX01平面図及び出土状況図

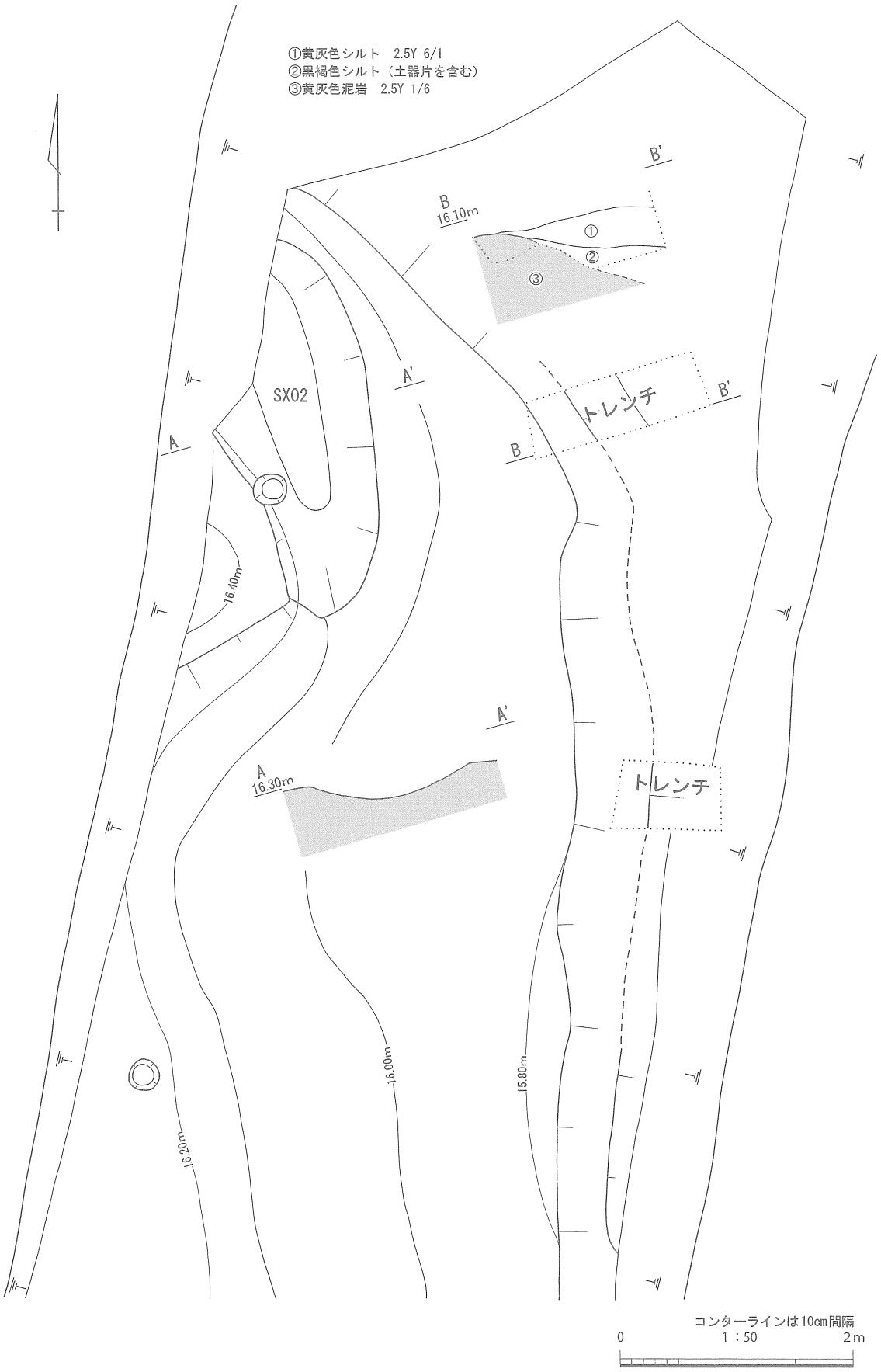




①にぶい黄橙色シルト　10YR 7/3
②にぶい黄橙色シルト　10YR 7/4
③にぶい黄褐色シルト　10YR 5/4
④灰黄褐色シルト　10YR 6/2
⑤灰黄褐色シルト　10YR 5/2
⑥黄灰色砂層　2.5Y 7/2
⑦黄灰色砂層　2.5Y 6/1
⑧黄褐色砂層　2.5Y 5/1

0　1：50　2m

第33図　白岩下遺跡：第２遺構面SD07平面図及び出土状況図



第34図　白岩下遺跡：第３遺構面平面図

考えられる。皿山古窯跡群と同じ東遠窯である島田市横岡の山茶碗窯の製品を分析した河合修編年によると、６と９をのぞく小皿はⅡ－２期からⅢ－１期に属する（河合2001）。

ところで渥美・湖西系山茶碗窯の製品である６の小皿は、それよりやや古い年代の12世紀後半から末、９については13世紀前半の年代が考えられる。

SD05から出土している灰釉陶器碗と瓶類は第35図10・11に掲げた。10は無釉碗で、地元東遠清ヶ谷窯の宮東窯式製品に類似している（守屋1996）。胎土や色調からすると、地元東遠窯や西駿河窯（旗指窯など）の製品とは判断できず、浜北・二川窯製品でもない。今のところ未知の窯での焼造と判断しておく。高台や口端部の造りから黒笹90号窯期の新しい時期か、折戸53号窯期に併行する時期であろうと推定しておく。11は青灰色を呈し、須恵器なのか灰釉陶器の瓶類なのかの判断はできない。高台の造りからすると長頸瓶の造りに類似している。黒笹90号窯期か折戸53号窯期に併行する時期であろうか。地元東遠の皿山窯の製品ではなく、別の窯で焼造されたのであろうか。

第１遺構面出土の土器（第35図12～23）

12・13は調査区中央からやや北側から土器集中の一部として出土し、Ｂ群とした。12・13の両者はこの一面の土器群では最も近い位置関係にあり、時期についても同じ８世紀初頭という時期であって共通し、一連のものと判断される。いずれも湖西窯の須恵器である。Ａ群の14は土師器坏、15・16は須恵器坏身である。この須恵器坏身は、柴田稔氏によって、掛川市（旧大東町）星川窯の製品との教示をえた（柴田1986）。底部はヘラ切り未調整であって、両者とも時期についてはTK209号窯併行期と考えられる。14については須恵器とやや離れて出土していることから、単独出土と理解される。須恵器坏身を模した形態である。

19は丸底の坩で調査区南側から出土した。この19をのぞく17・18・20～23はＣ群とした土器集中である。17の瑳は頸部上位に波状文を描くなど古い特徴をもっているが、底部の調整からTK43窯併行期と考えられる。18の長脚二段透かしの高坏は２方向の透かしで、胎土や色調から星川窯の製品と考えられる。時期はTK209号窯併行期と考えられる。

20～23の土師器は坏・坩・甕類であるが、須恵器を指標にするとTK43号窯期からTK209号窯期に併行する時期の土師器であろう。20は須恵器坏身を模した形態である。

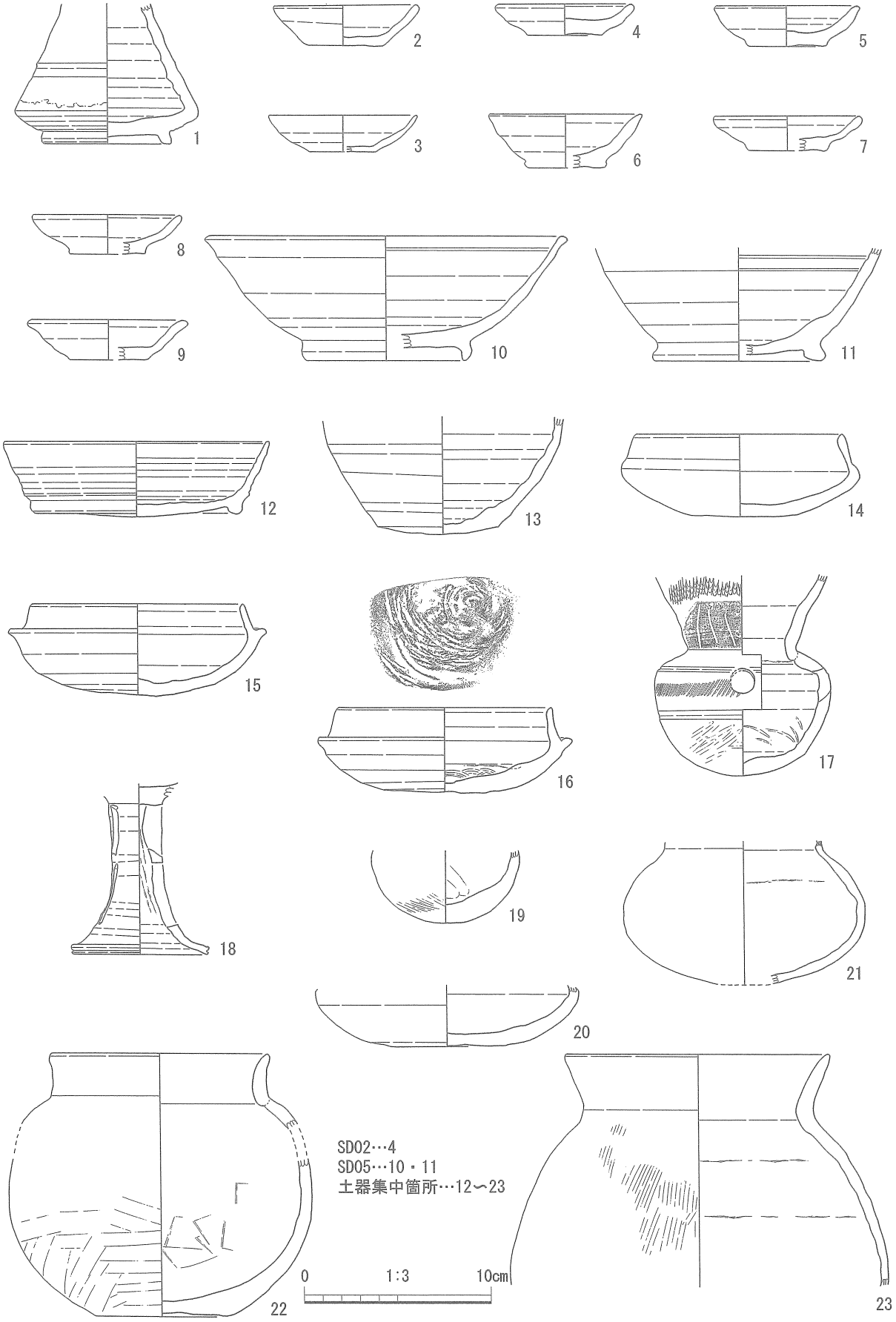
第２遺構面出土の土器（第36図24～42）

24～27はSD07出土の坏と高坏である。坏は半球系の体部で、口縁部はわずかに内湾する。高坏は坏部片である。この時期の高坏は坏部と脚部・脚裾部に分けて成形され、それぞれの部位を接合し、全体を成形する方法をとっている。26・27の高坏を例にとると坏部と脚部の接合に、二つの方法が観察できる。①は26のように、坏部底部の空洞部に、円錐状の別の粘土をとりつけてふさぎ、それを脚部にあけられた空洞部に、枘のように差し込みふさいで接合する方法。②は27のように円筒状の脚上部に凸部をつくり、坏部底面の凹部に差し込みふさいで接合する方法である。

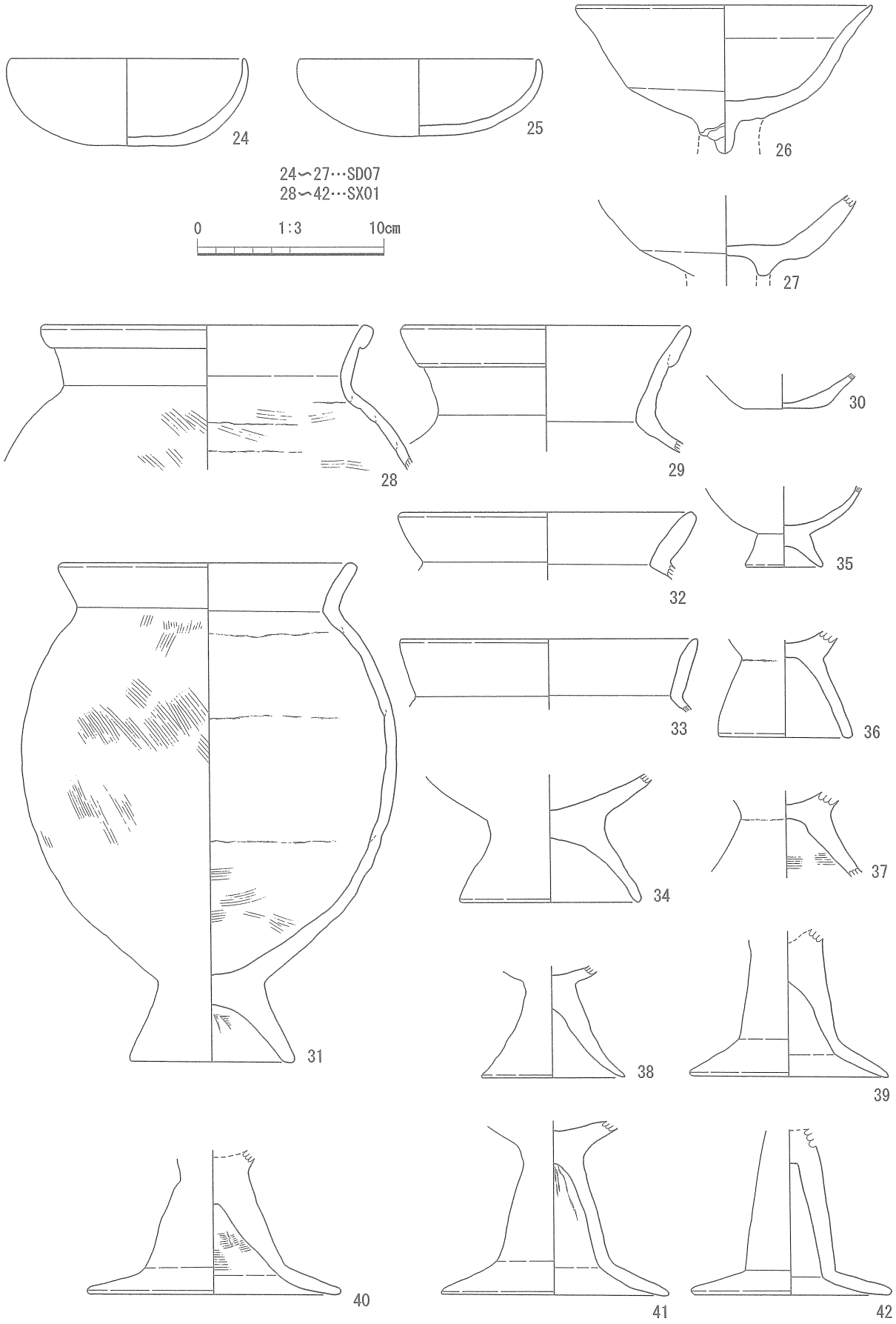
28～42は、SX01の遺物である。28・29は複合口縁の壺である。幅広で低い粘土を重ねて、口縁部をつくっている。30は小形の壺である。31～37は台付甕である。31は長胴で、くの字に外反する口縁部をもつ。35は小形で実用品ではなく、ミニチュアであろう。38～42は脚部のみ残る高坏である。39～42は円筒形の脚部で、大きく開く脚裾部をもつ形態であるが、38の高坏のみが円錐形の脚部で、そのまま開く裾部をもつ。38については色調も他のグループと異なり、小形であることから、あるいは実用品ではなく、ミニチュアの可能性もある。

第３遺構面出土の土器（第37図43～57）

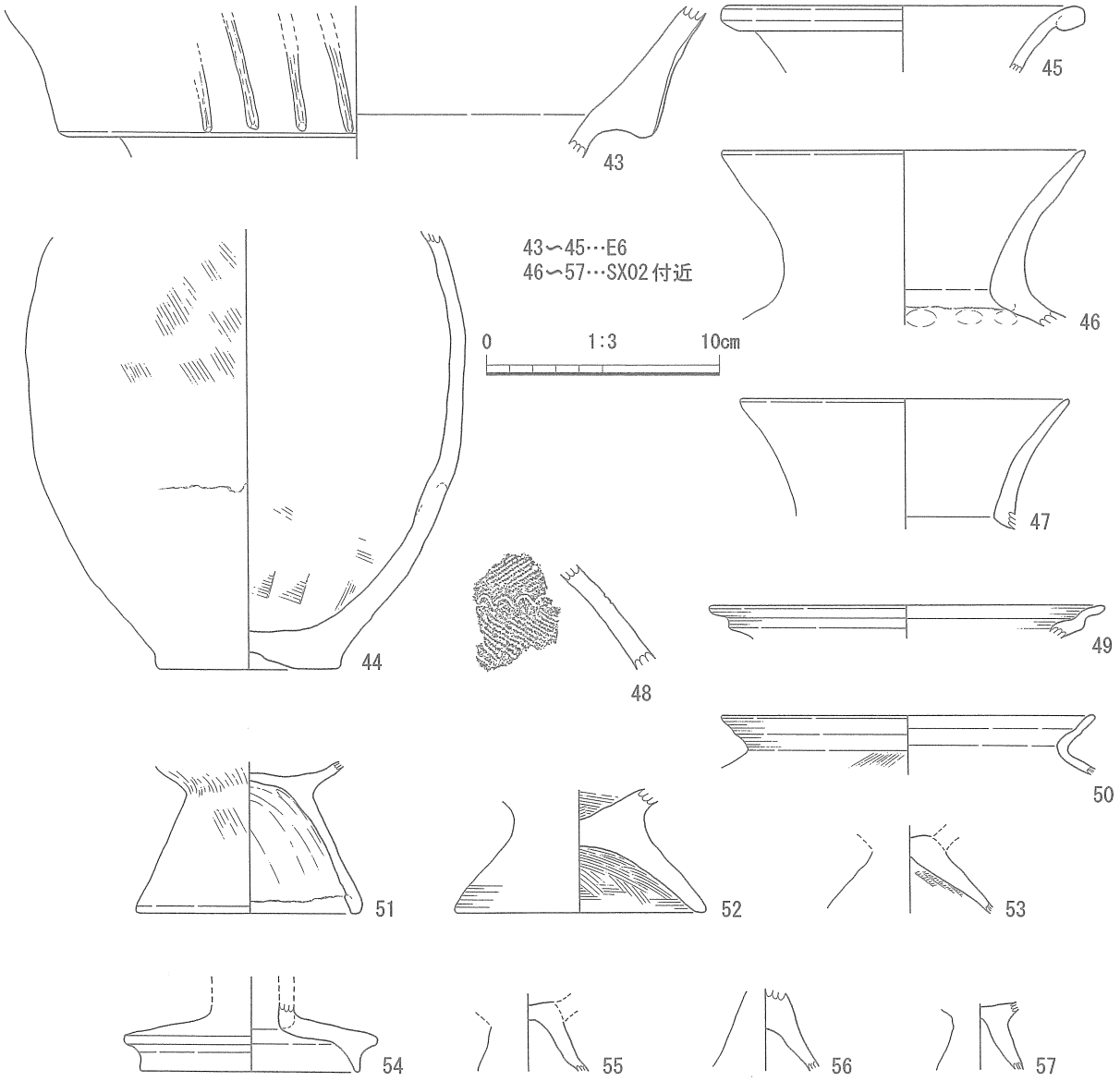
43・44・45はE6グリット杭付近から出土した壺と甕である。いずれも第２遺構面を掘り下げ作業中、出土したので、厳密な意味では第３遺構面出土の土器とはいえない。43は駿東の大廓式の壺で、他の第



第35図　白岩下遺跡：出土遺物実測図１（陶磁器・須恵器・土師器）



第36図　白岩下遺跡：出土遺物実測図２（土師器）



第37図　白岩下遺跡：出土遺物実測図３（土師器）

３遺構面出土の土器と同じグループであるが、その特徴から44は、むしろ第１遺構面出土土器の古いに時期含まれるべきと考えている。

46～57はSX02付近の北側第３遺構面から出土した土器を掲げた。一部は浅い凹みに投棄された状態で出土した。46～48は壺であるが、折り返し口縁と素縁の両者がある。48は結節縄文で飾る胴部片である。

49～51はＳ字状口縁甕である。胎土、色調、調整から在地での模倣甕であろう。51は台部内面に粘土の重ねによる折り返しがあり、忠実に模倣しているがＳ字状口縁甕特有の薄さはそれほどない。52・53はくの字状口縁台付甕の台部である。54～57は高坏脚部片である。54は異形だが高坏として理解した。胎土・色調・焼成も異なり、他地域からの搬入品ではないかと考えている。55～57は脚部中段のみ残る。小形であることから、あるいは実用品ではなく、祭祀用ミニチュア品と考えている。

第４節　まとめ

以上で平成18年度に実施した白岩下遺跡の発掘調査報告を終わるが、これにかかわって、１、２、調査の所見を述べ、まとめとしておく。

すでに白岩下遺跡の発掘調査は15年度には本研究所によって実施され、その調査報告書が刊行されている（中田ほか 2004）。15年度の調査地点は今回の調査区の対岸（西側）であって、縄文時代中期の包含層と今回検出された流路の続きとなる古墳時代の流路が発見された。同書によると、１条の流路から古墳時代前期から中期の川辺の祭祀に伴う土器が認められた。報告者はこれを川への投棄行為と考えている。

15年度の調査成果と18年度の調査成果を比較すると、つぎのように違いが認められた。縄文時代中期の包含層は18年度調査区まで及んでいない。よって白岩下遺跡おける縄文時代中期の包含層は東狭間橋の南西付近と考えられる。つまり縄文時代中期の集落は低位段丘南側に存在し、そこからの流れ込みによって遺物包含層がつくられた、と推定される。

古墳時代前期から中期の川辺の祭祀に伴う遺構は、15年度の調査では流路川底に土器がみられた。18年度の調査では流路に面した川辺に土器を置いたと推定され、土器供献の場所に違いがみられた。いずれも両年度の土器の出土した地点は、旧西方川の大きく蛇行する箇所の内側にあたっている。この蛇行点の内側は流路の掃流物の堆積によって、ポイントバーが形成される。15年度の土器出土状態をみると、ポイントバーの形成に伴って、掃流物とともに川底に土器が堆積した、と理解することもできよう。

18年度の調査で検出された土器供献の場は、流路が大きく蛇行する地点の低位段丘とその緩傾斜面にあたる。そしてこの地点は流路の掃流物の堆積によって、流路中央に向かって川岸が押し出され、さらに流路が東へと移動している。この堆積物によってつくられた新しい川岸についても土器供献の場、つまり祭祀の場とされた、ということになろう。すると祭祀の場は、川が大きく蛇行する地点がつぎの祭祀の場として選ばれていた、といえよう。遺跡のある加茂は、戦国時代後期に加茂用水がつくられるまで水利が悪く、しはしば干魃にみまわれた地であったという（鈴木1987）。加茂用水の位置からすれば、菊川水系である加茂の東側集落とその耕地のことであろう。

それとは逆に西方川側の加茂には幾筋かの蛇行する流路跡がみられる。このことは加茂集落の西側については、洪水によってしばしば流路が変更されたこととなろう。加茂では干魃を防ぐために用水を掘削した、三浦刑部（みうらぎょうぶ）（今川氏の旧臣と伝わる）の霊を祀ったとされる井成社が加茂の井成山に創建されている。この井成社伝説にあるような干魃とともに、洪水を鎮めることが、この地の生活にとって大きな意味を持っていたこととなろう。すると15年度と18年度の調査によって認められた祭祀の場は、磐座のある粟ヶ岳（あわがたけ）を仰ぎ見る場にありながら、祭祀の場が流路に向いていることから粟ヶ岳を対象としたとは

考えられない。また流路蛇行点での祭祀にこだわっている点で、川と洪水、あるいは干魃を鎮めることを目的とした祭祀と考えられる。

なお付け加えれば、この地域の代表的神社である大頭龍神社についても（注６）、川もしくは水の象徴としての竜神を祭祀の対象としていたとも考えられ（注７）、今回の祭祀遺構が、川と干魃・洪水を鎮めることを目的としたと私見とも深く関連するであろう。

第５章　総　括

以上が白岩遺跡および白岩下遺跡の発掘調査結果である。

今回の調査から、白岩の弥生集落は、東名道直下の1966年調査で竪穴式住居跡が発見された付近を南限とし、八幡橋以南の付近はその縁辺にあたると考えられる。菊川市の調査では、白岩遺跡南東の方吹遺跡の範囲で水田と方形周溝墓が見つかっており、集落とその水田・墓域とが西方川を挟んで区切られていた可能性も考えられる。

また1951年に発見された遺物包含層が再び検出され、流路SR05・06の掃流物層であることが裏付けられた。最下層は嶺田～白岩式土器を多量に含み、中期に限りなく近い時期ではあるが、僅かに菊川式中段階の土器も含んでいたので、層の形成自体は完全に中期に遡るものではなかった。よって白岩遺跡は「白岩式土器」の名を冠する土器様式の概念を生み出した遺跡ではありながら、遺跡そのものから現状において確実な該期の一括資料を見出しているとは言い難く、白岩式土器の精緻な編年や、より正確な組成の検討についてはなお今後の課題とせざるを得ない。

石器は中川律子により当遺跡出土品の集成が行われており（中川（伊藤）1997)、今回その中に含まれていなかった抉入柱状片刃石斧３点を加え、太型蛤刃石斧２点と扁平片刃石斧１点も加える事になった。大陸系磨製石器についてみれば、中期後半に上記３種の加工用石斧の量が増加する静岡県西部の動向とおおよそ一致する結果であり、石材鑑定により石器そのものは天竜川流域のものを得ていることも判明した。木製品では、高床式倉庫の梯子が検出されたことが特筆され、上流の集落が大規模な稲作と生産力を有していたことを物語る。しかし現状では、部分的な調査がほとんどで、なにより西方川の度重なる流路の変化が影響し、白岩遺跡の全貌はなお明らかにされていない。周辺で進められている菊川市による調査や、過去の調査成果の再整理と公表がいずれ行われることを期待したい。

白岩下遺跡では、北東から南東へ向かう古墳時代の流路が発見され、古墳時代全時期にわたる川に対する鎮めの祭祀が執り行われていた。先にあげた『小笠郡加茂村資料』には、白岩尾花（おばな）・山田（やまだ）地区の境に存在した白岩城山古墳（しらいわしろやまこふん）の調査記録や、周辺の多数の古墳の存在が記録されている。加茂周辺西側の大頭龍神社の丘陵から伸びる段丘上に、縄文時代と古墳時代の集落があった可能性を示唆しているように、この周辺に、古墳に被葬され、祭祀行為を司るほどの有力者が存在していたのかもしれない。
また現在白岩下遺跡とされる範囲は、その西側の段丘からの流れ込みによる包含層が主体であった。今後、西福寺西遺跡や西狭間・東狭間遺跡と呼ばれる西側の段丘面上の諸遺跡との関係を含めて考察していくことで、より地域の実態を明らかにすることができるのであろう。

末筆ながら、本書の作成にあたり、その作業に従事していただいた整理技術員・作業員の方々、また先の発掘作業に従事していただいた現地作業員の方々の労を労い、心より御礼申し上げる。

注

注１『小笠郡加茂村資料』は筆者（足立）が1973年頃、東京神田の東京古書会館の古書市で見出したものである。表紙は墨書き、本文は反故紙裏の白紙部分と原稿用紙に万年筆と筆書きする。著者は当時、加茂村に住んでいた福井久治氏と推定され、1932（昭和７）年直後に執筆されたと推定される。

その内容には石器時代、古塚時代、加茂村の社寺に関することである。とくに考古学資料には、写真や実測図、新聞の切り抜きと解説があり、この書でしか知りえないことも多い。とくに1929（昭和４）年１月21日に行われた白岩城山古墳（組み合わせ式石棺を主体部とする横穴墓と推定される）の発掘調査の様子がスケッチ入りで記述されている。それによると立会者は、後藤粛堂、山崎常磐、西郷籐八らであったことがわかる。

注２藤枝市上藪田モミダ遺跡Ｐ－７遺構出土の壺に因みこの名がある（藤枝市埋文調査事務所1981）。

注３ただしこの銅入り壺は弥生時代後期のものとされる。中期に遡る可能性のある青銅製品は、県内では少ないが、菊川流域では耳川遺跡出土の銅釧・銅環・銅鏃が挙げられている（佐口2003）。

注４『白岩下流遺跡調査報告』（田辺1951）において「東海道線堀之内駅より御前崎へ通ずる道路を南へ1000m位行くと右に加茂村へ通ずる道がある。この道を真直ぐに約700m行くと小川に掛った小さな橋がある。これが八幡橋で、（中略）本遺跡は下流約150mの地点にある。（中略）本遺跡のすぐ近くに標高19.2mの三角点がある。」（ｐ３．pp17～23）との記載がある。この三角点は現在確認できないが、当時田辺が土層略図を作成するにあたり、基準にした地表面の高さはおよそ18～19m程度という認識だったと思われる。

注５SR06の土器片層からは直立した状態の杭が出土したが、列としては検出されず、検出地点からみて、1951年当時の前・西方川開削にあたり土留用に打ち込まれた杭である可能性が否めないため、掲載しなかった。

注６加茂白岩段にある大頭龍神社は大物主大神を祭神とし、奥の院には大頭龍権現が祀られていた。社名についても江戸時代まで大頭龍権現と呼ばれていた。中遠地域の旧山名郡を中心に大頭龍神社が分祠されているが、いずれも分祠された大頭龍権現の祭神はスサノウノミコト、オロチノミコト、イザナギノミコトと複数で、異なっている。おそらく祭神が後世仮託されたために定まらず、一定の祭神ではなかったと推定される。したがってこの大頭龍大権現とは、むしろ大頭龍大権現そのものが祭神と考えられる。おそらく大頭龍権現とはこの周辺のみの祭神であり、地域限定の地主神であろう。ではなぜ大物主大神を祭神としたのであろうか。大物主神は大和三輪山に祀った神であり、小蛇の化身であったことは箸墓伝説で知られるところである。蛇神が仏教の影響下、竜神に昇格し、大頭龍権現と大物主神が同一視されたためであろう。

また大権現の神号と『遠江古蹟図絵』の「大頭龍権現」の記述から、神仏習合による神である。加茂大頭龍神社には相殿として日吉神社がある。よって山王神道の影響であろうと考えている。愛知県豊根村には、かつて「山名郡貫名郷（＝現・静岡県袋井市広岡）大頭領権現」に懸かっていた「永正十四（西暦1517）年」銘の鰐口が残されているが、大頭領権現は大頭龍権現のことであろうから、すでにこの段階には大頭龍権現の分祠があったことを伝えている。つまり地域限定ではあるが、大頭龍権現は流行神であった。では信仰の対象として広がったのであろうか。『事実証談』の「大頭龍権現を祭る神ありて」の記述から、大頭龍権現のオハキという幣帛が、大雨から溜池の決壊防止や山川の堤防決壊から田畑を守ることを祈念するに用いたことを伝えている。これらのことから大頭龍権現が川と洪水を鎮めることに効果有りとされ、信仰を集めたと考えられる。

注７竜神（王）とは密教では天部の神であり、請雨や止雨に特殊な能力を発揮するとされた（鳥越正道「雨と宝を恵む－竜王」『密教のほとけたち』）。大頭龍大権現とは竜神が神格化されたと考えておきたい。

引用・参考文献

荒熊元茂1986『耳川遺跡Ⅱ』菊川町教育委員会

石黒立人　編　2002「西遠江・東遠江」『弥生土器の様式と編年』－東海編－

伊藤通玄1996「角江遺跡出土石製品の材質とその産地」『角江遺跡Ⅱ遺物編３』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

市原壽文　内藤　晃 1968 「小笠郡菊川町白岩遺跡発掘調査概報」『東名高速道路（静岡県内工事）埋蔵文化財発掘調査報告書』

岩本　貴1995「菊川式土器における編年上の問題」『10周年記念論集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

大場磐雄・榊原松司1974『小笠郡菊川町白岩遺跡発掘調査略報』

掛川西高郷土研究部 1949 『ふるさと　第２号』

勝又直人1999『方吹遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

加藤賢二　大橋保夫 1975 「西方川河川改修工事における採集遺物（上）・（下）」『森町考古　９』

加藤賢二 1979 「白岩下遺跡」『森町考古　14』

河合　修 2001「青灰色のうつわ」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要　第８号』

川江秀孝ほか 2008 『東前遺跡』Ⅱ ㈶浜松市文化振興財団

菊川教委1982『西方川改修工事に伴う白岩遺跡発掘調査報告』

菊川教委1983『白岩遺跡発掘調査概報』

北爪一行1998『六ノ坪Ⅳ遺跡・源ヶ谷古墳群発掘調査報告書』掛川市教育委員会

後藤和風1998『白岩遺跡Ａ』・1999『白岩遺跡』・2001a『白岩遺跡2001南』・2001b『白岩遺跡2001北』・2003『白岩遺跡2003』
菊川町教育員会

佐口節司ほか 2003 『県道浜松袋井線緊急地方道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 磐田市教育委員会

佐藤由紀男1996「編年編　遠江・駿河（中期）」『YAY！（やい）』弥生土器を語る会

鈴木則夫1987「菊川むかし話」・1983「二之宮式土器について」『森町考古　18』

鈴木敏則・向坂鋼二『梶子北遺跡』遺物編（本文）浜松市博物館

篠原修二 1995『牛岡遺跡Ⅱ』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

白澤　崇・松井一明1991『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』袋井市教育委員会

田辺昭三 1951 『小笠郡加茂村白岩下流遺跡調査報告』

田辺昭三 1952 「菊川流域に於ける弥生式文化－弥生式土器編年及び型式設定を中心として－」『ふるさと　第７号』掛西郷研

田辺昭三 1983『遺跡を掘る』角川書店

塚本和弘1992『鹿島遺跡発掘調査報告書』・2001『土橋遺跡』菊川町教育委員会

永井義博1982『鶴松遺跡』・1993『鶴松遺跡Ⅵ』・1997『鶴松遺跡Ⅷ』・1998『鶴松遺跡Ⅸ』袋井市教育委員会

中川（伊藤）律子1997「22静岡県の石器　農耕開始期の石器組成４」『国立歴史民俗博物館資料調査報告書７』

中嶋郁夫1991「遠江における後期弥生土器編年と土器移動」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』
第８回東海埋蔵文化財研究会

中田　出・佐野五十三・鷺坂有吾 2004 『白岩下遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

荻野谷正宏2000「白岩式土器の再検討」『転機』７号

久永春男1956「各地域の弥生土器－東海」『日本考古学講座』

藤枝市埋蔵文化財調査事務所1981『国道１号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財調査報告書』（第６冊）

松井一明・吉岡伸夫1991『鶴松遺跡Ⅳ』袋井市教育委員会

松井一明1983a『掛の上遺跡Ⅱ』1983b『鶴松遺跡Ⅲ』・1992a『鶴松遺跡Ⅴ』・1992b『鶴松遺跡Ⅶ』袋井市教育委員会

村松弘規1996『女高Ⅰ遺跡』掛川市教育委員会

向坂鋼二・辰巳　均1980『浜名郡新居町一里田遺跡調査概報』新居町教育委員会

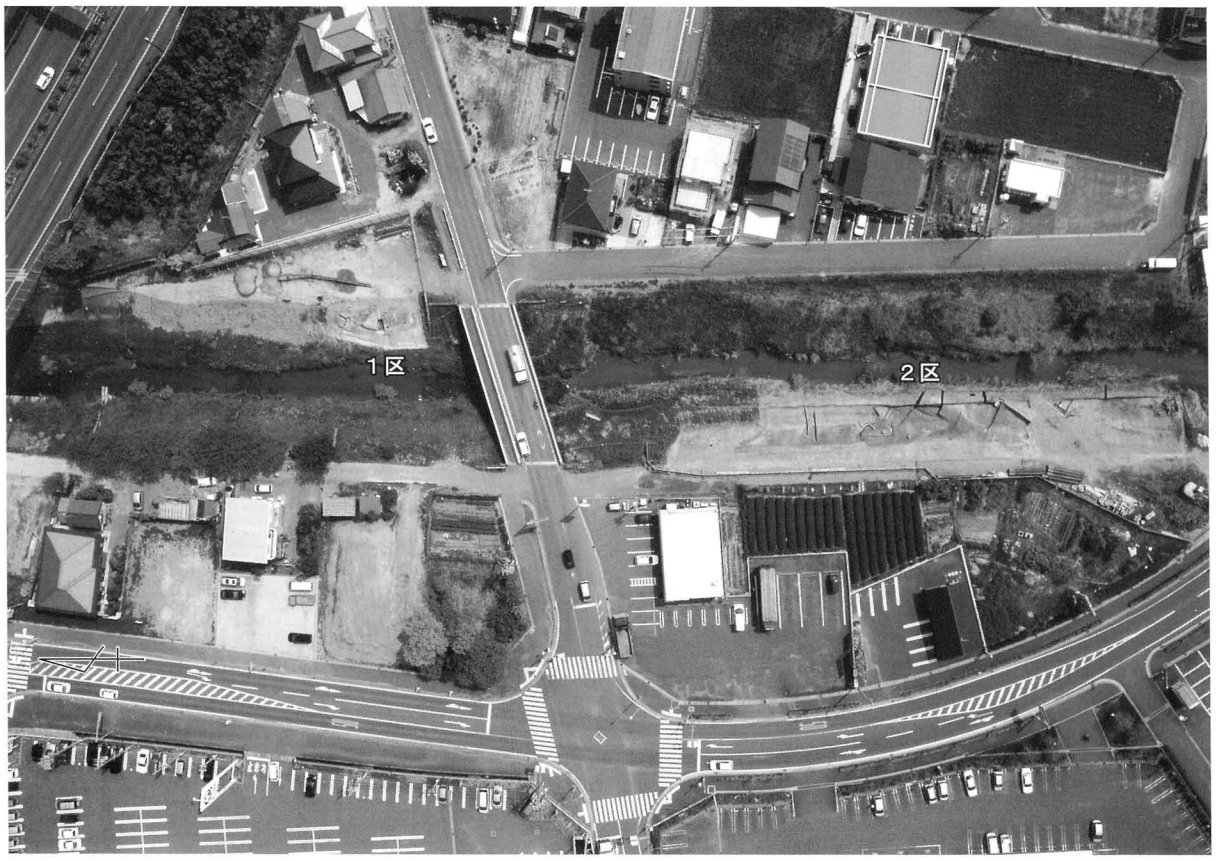
守屋雅史1996「遠江・駿河の灰釉陶器」『日本土器事典』

表紙

白岩遺跡　写真図版

空から見た菊川流域（南から）

白岩遺跡　図版１



１　白岩遺跡１区・２区全景

２　調査前の白岩遺跡（北東から）

１　１区：調査区（第２遺構面完掘後）全景（北東から）

２　２区：調査区全景（南東から）

白岩遺跡　図版３

1　１区：SR01遺物出土状況（北から）

2　１区：SR01石斧５出土状況（北から）

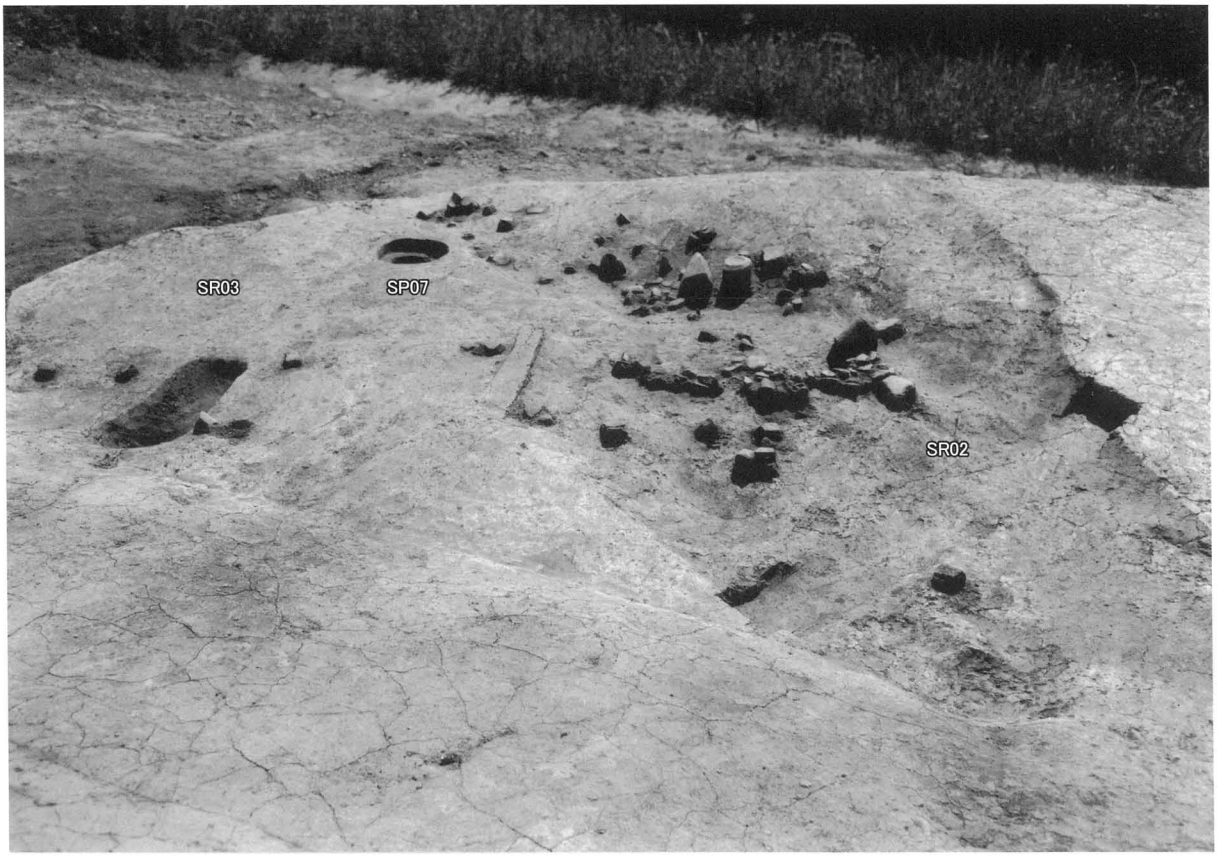
3　１区：SR01石鏃10出土状況（南西から）

4　１区：SR01完掘状況（北から）

1　１区：SP01 ～ 05完掘状況（北から）

2　１区：SX01甕出土状況（北西から）

白岩遺跡　図版５



1　１区：SR02・03遺物出土状況及びSP07完掘状況（北東から）

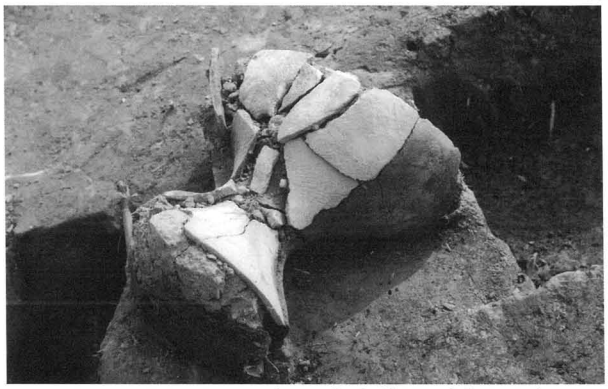
2　１区：SR02・03及びSP06完掘状況（北から）

１　２区：SR04遺物出土状況（南から）

２　２区：SR04完掘状況（南から）

白岩遺跡　図版７

１　２区：SR05遺物出土状況１（北から）



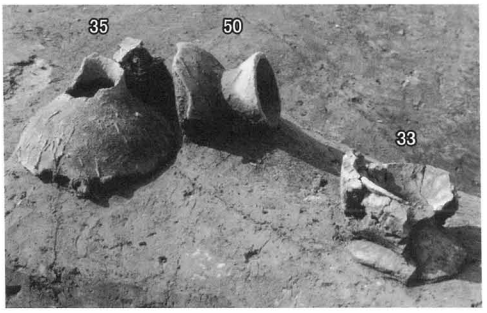
２　２区：SR05壺22出土状況（北から）

３　２区：SR05壺27出土状況（北から）

４　２区：SR05壺21・23甕39
出土状況（北から）

1　２区：SR05遺物出土状況２（北から）

2　２区：SR05壺26・38台付甕48出土状況（南から）



3　２区：SR05壺33・35台付甕50
出土状況（南東から）

白岩遺跡　図版９

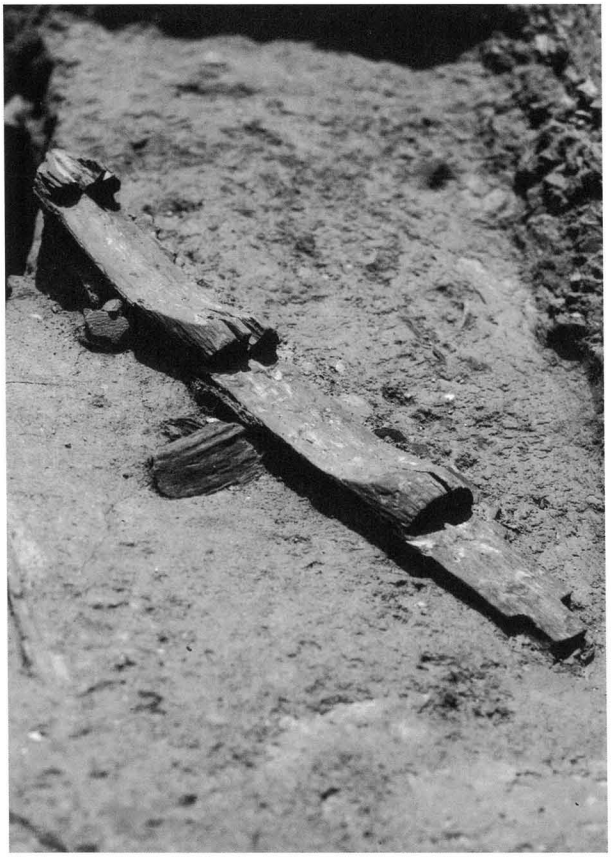
1　２区：SR05土層断面（北から）

2　２区：SR05完掘状況（北東から）

1　２区：SR06土器片層断面（北から）

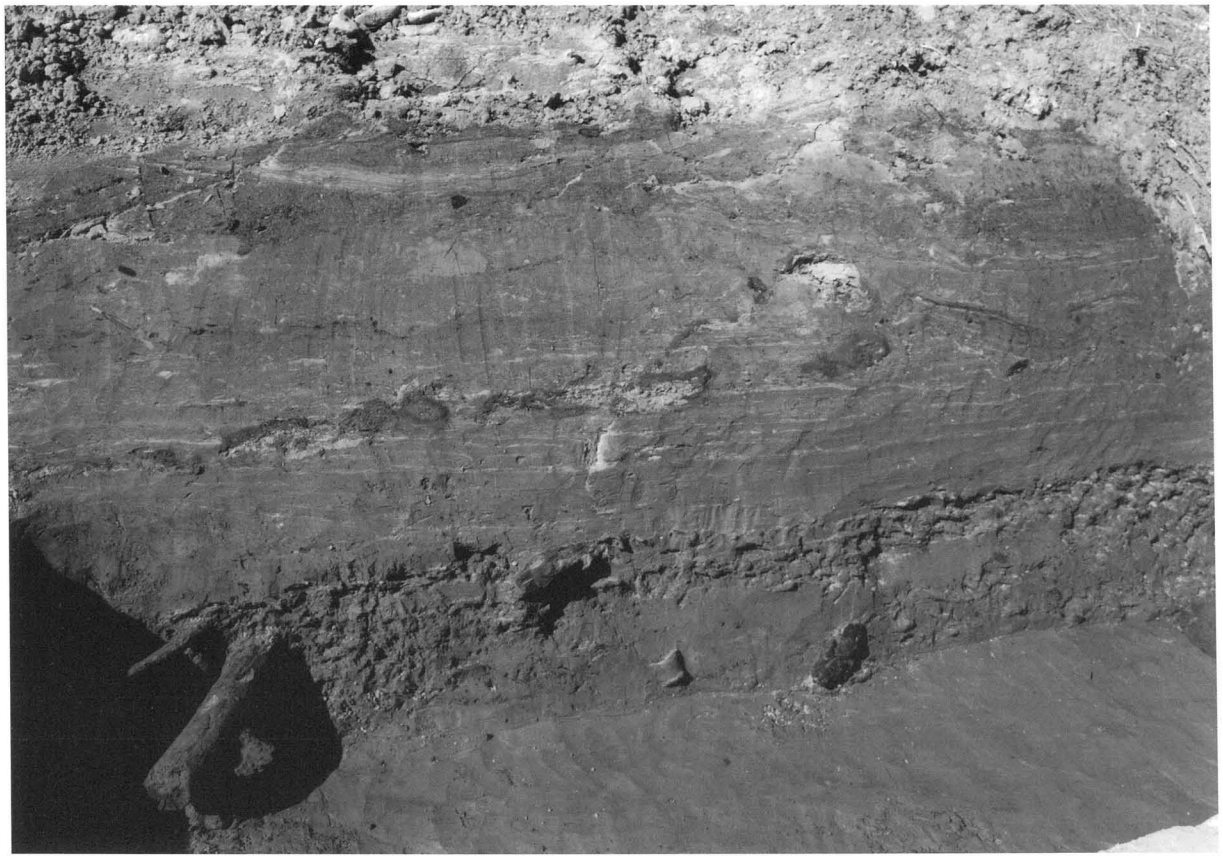
2　２区：SR06土器片層出土状況（北から）

白岩遺跡　図版11

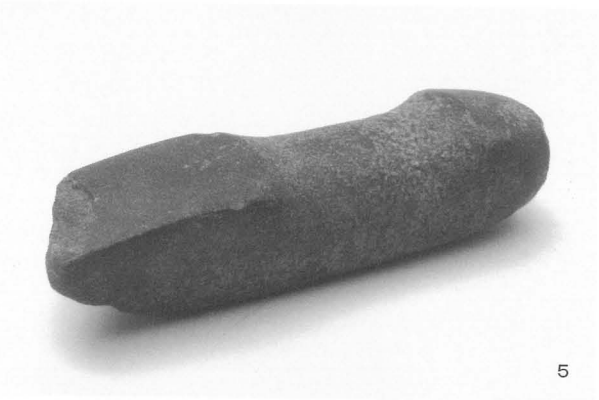


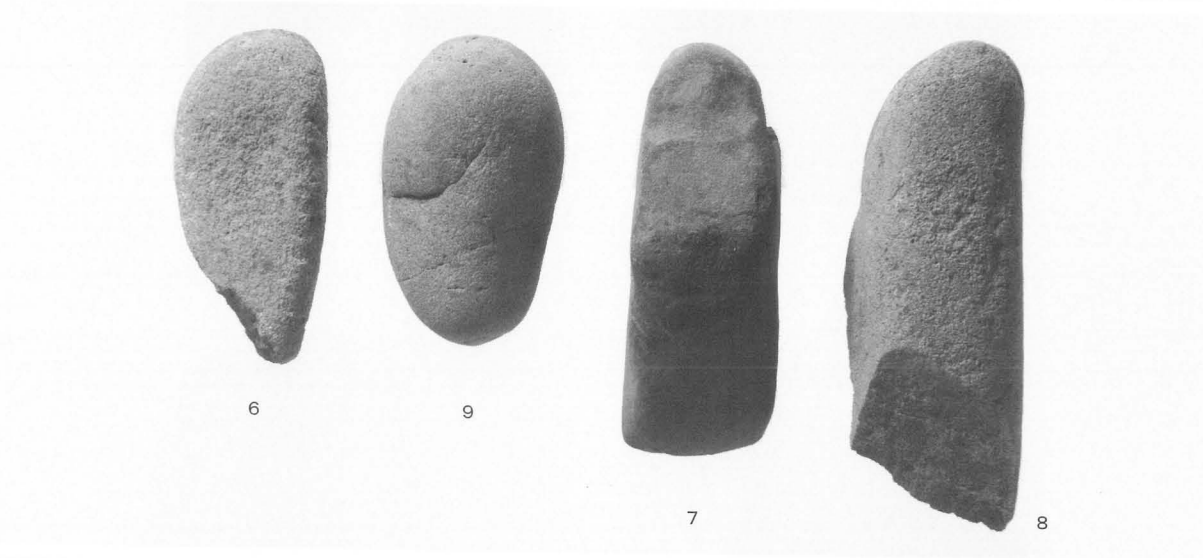
1　２区：SR06梯子160出土状況（北から）

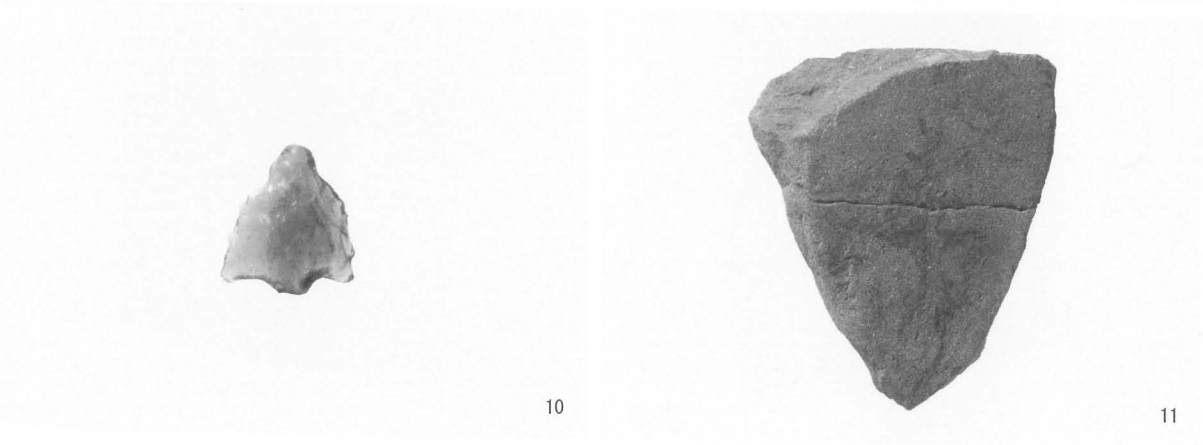
2　２区：SR06完掘状況（北から）



3　２区：SR06（拡張区）完掘状況及び断面状況（南東から）







白岩遺跡出土遺物１

白岩遺跡　図版13

SX01出土甕

12

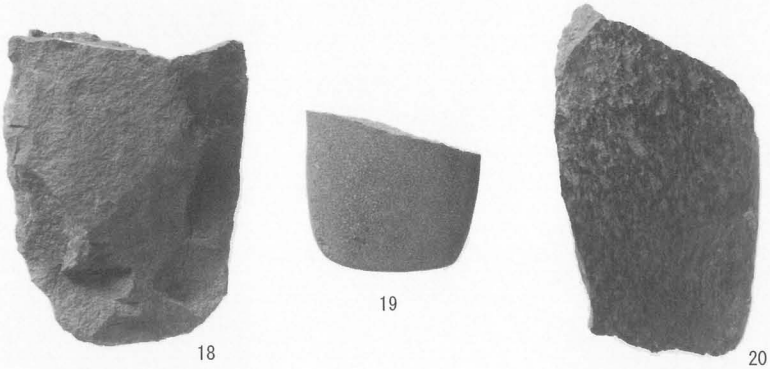
14

13

15　表

15　裏

白岩遺跡出土遺物２



白岩遺跡出土遺物３

白岩遺跡　図版15

25

32

26

33

27

34

30

35

白岩遺跡出土遺物４

36

55

48

56

49

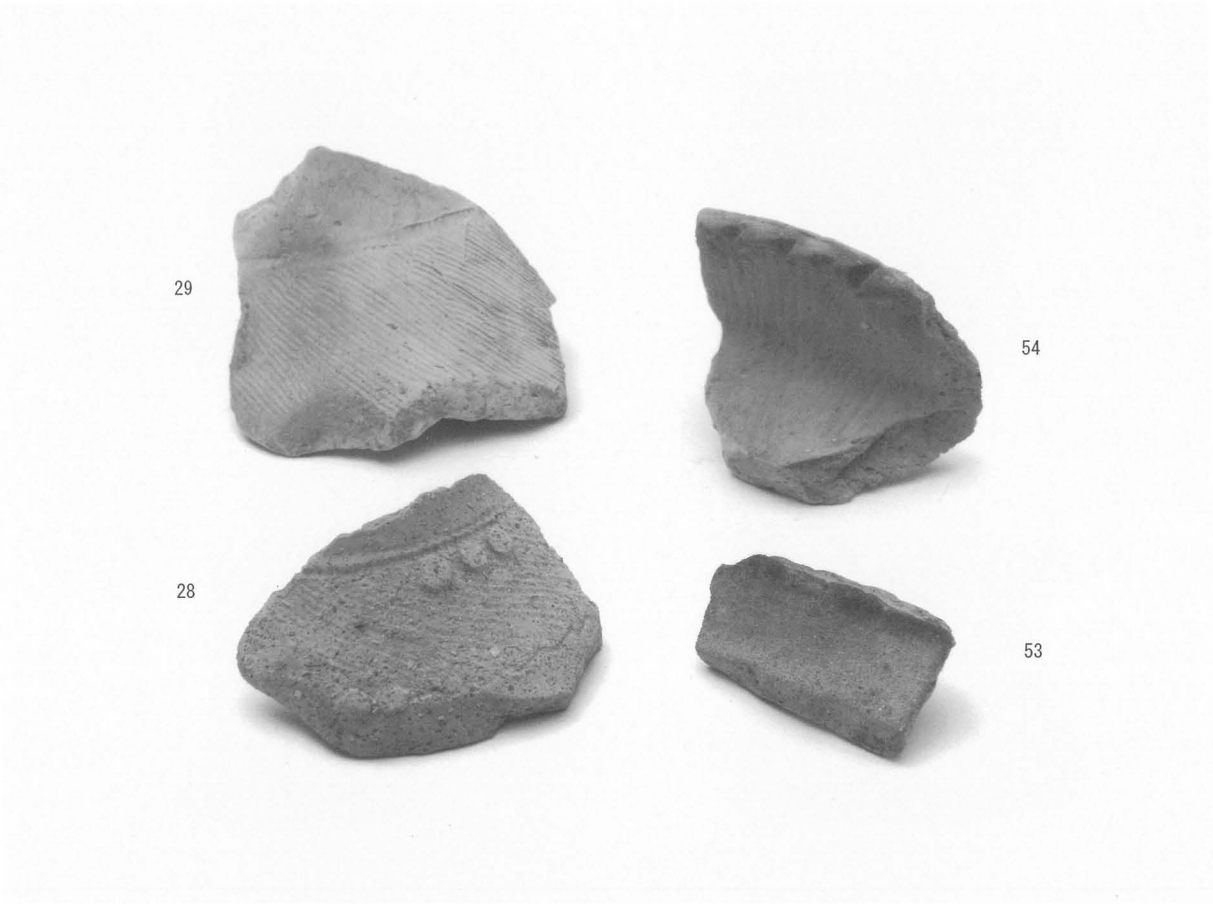
57

50

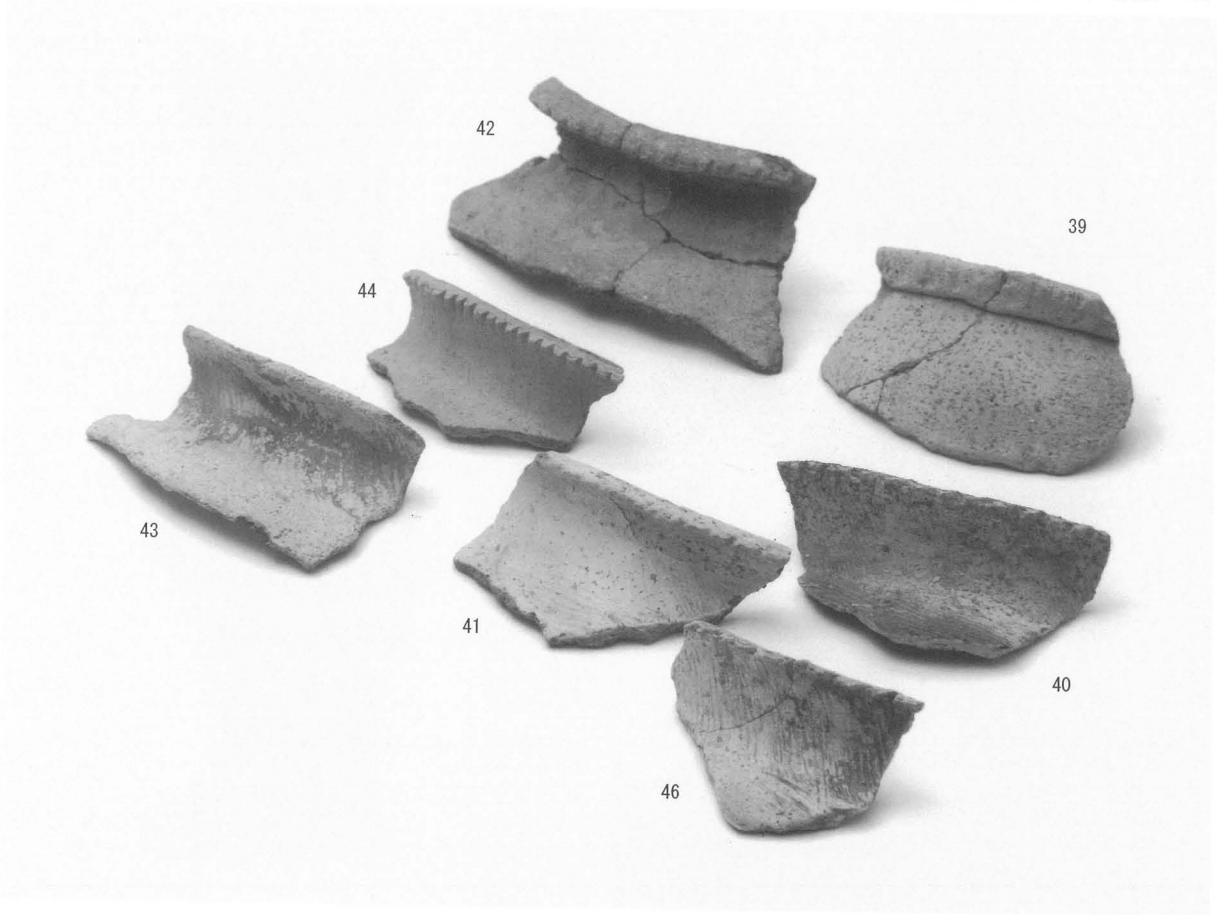
58

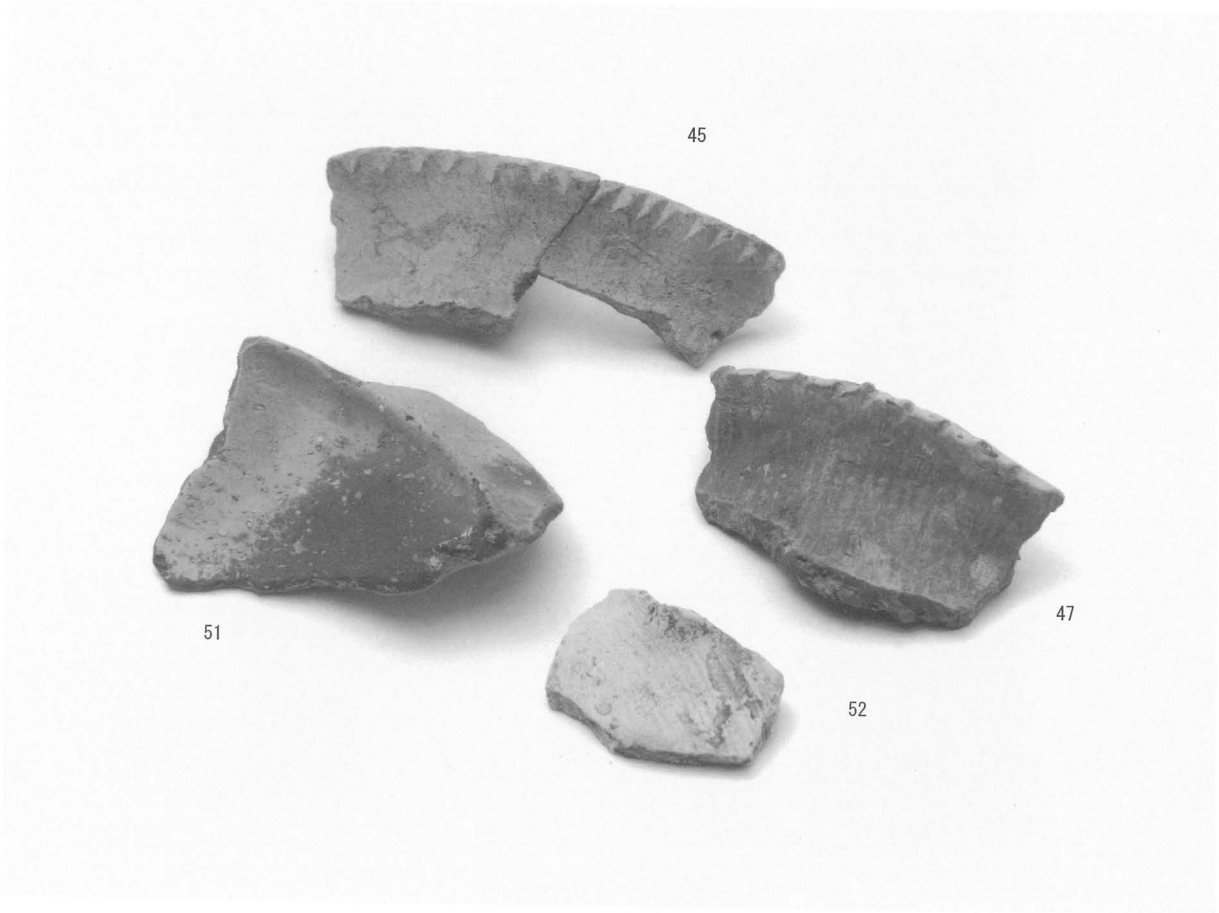
白岩遺跡出土遺物５

白岩遺跡　図版17



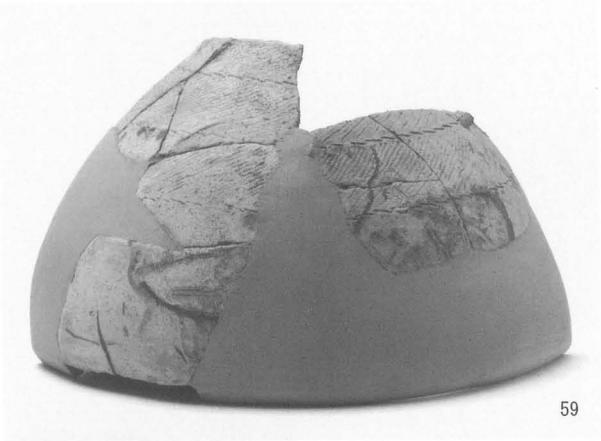
白岩遺跡出土遺物６



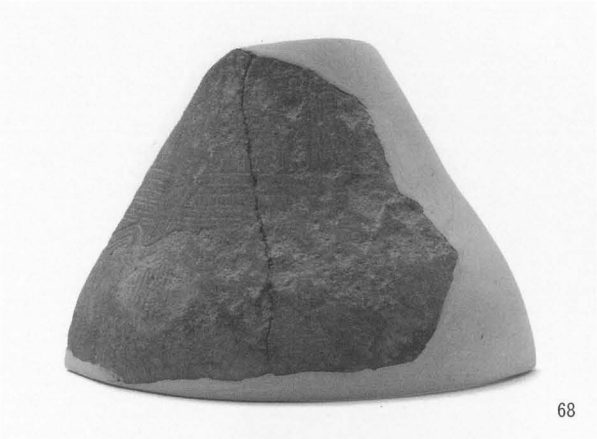


白岩遺跡出土遺物７

白岩遺跡　図版19

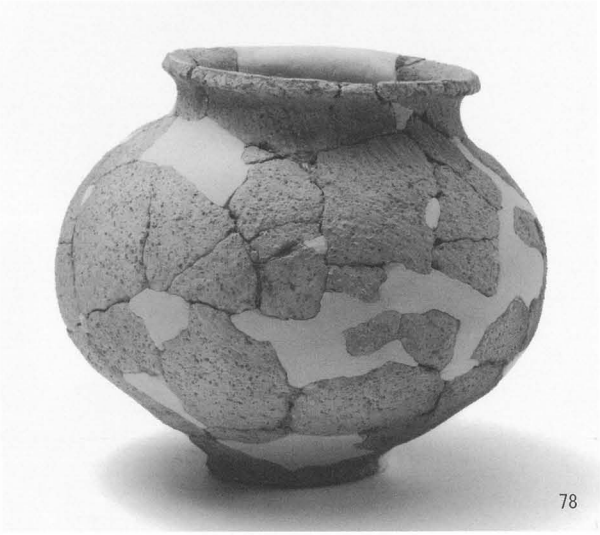


白岩遺跡出土遺物８


68

76

69


78

70

83

70　底部裏

71

84

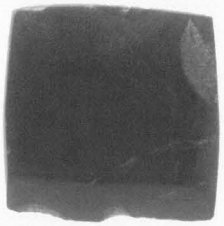
白岩遺跡出土遺物９

白岩遺跡　図版21

白岩遺跡出土遺物10

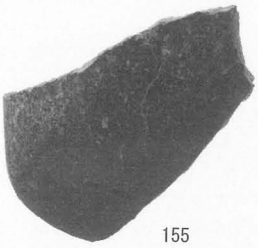
151

152


153

153　側面

156


155

154

157

158

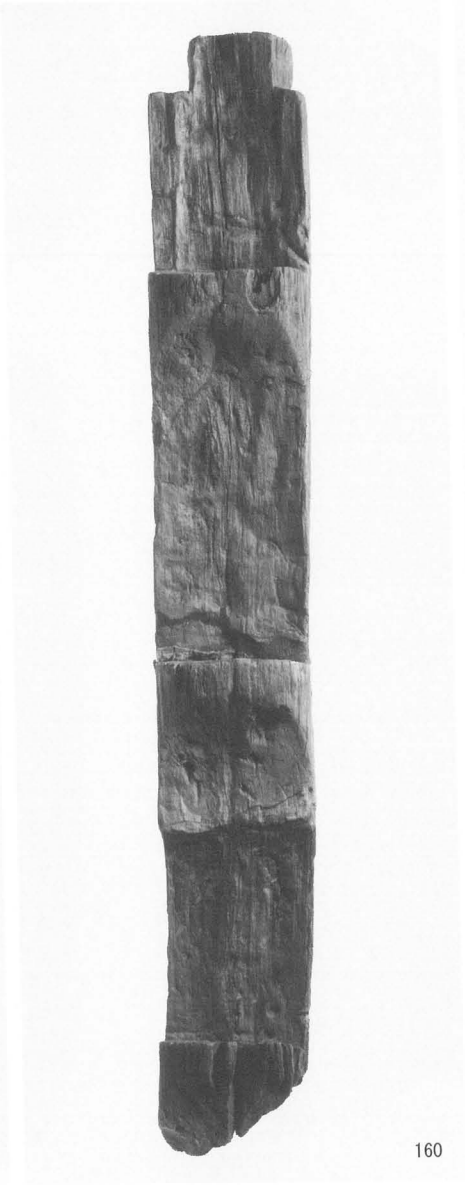
159

白岩遺跡出土遺物11

白岩遺跡　図版23

160

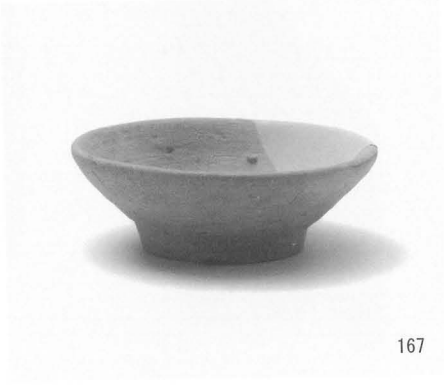
160



160

162

165



167

白岩遺跡出土遺物12

表 紙

白岩下遺跡　写真図版

白岩下遺跡遠景（南から）

白岩下遺跡　図版１

１　調査前の白岩下遺跡（西から）

２　第１遺構面完掘状況（北から）

１　第２遺構面完掘状況（北から）

２　第３遺構面完掘状況（北から）

白岩下遺跡　図版３

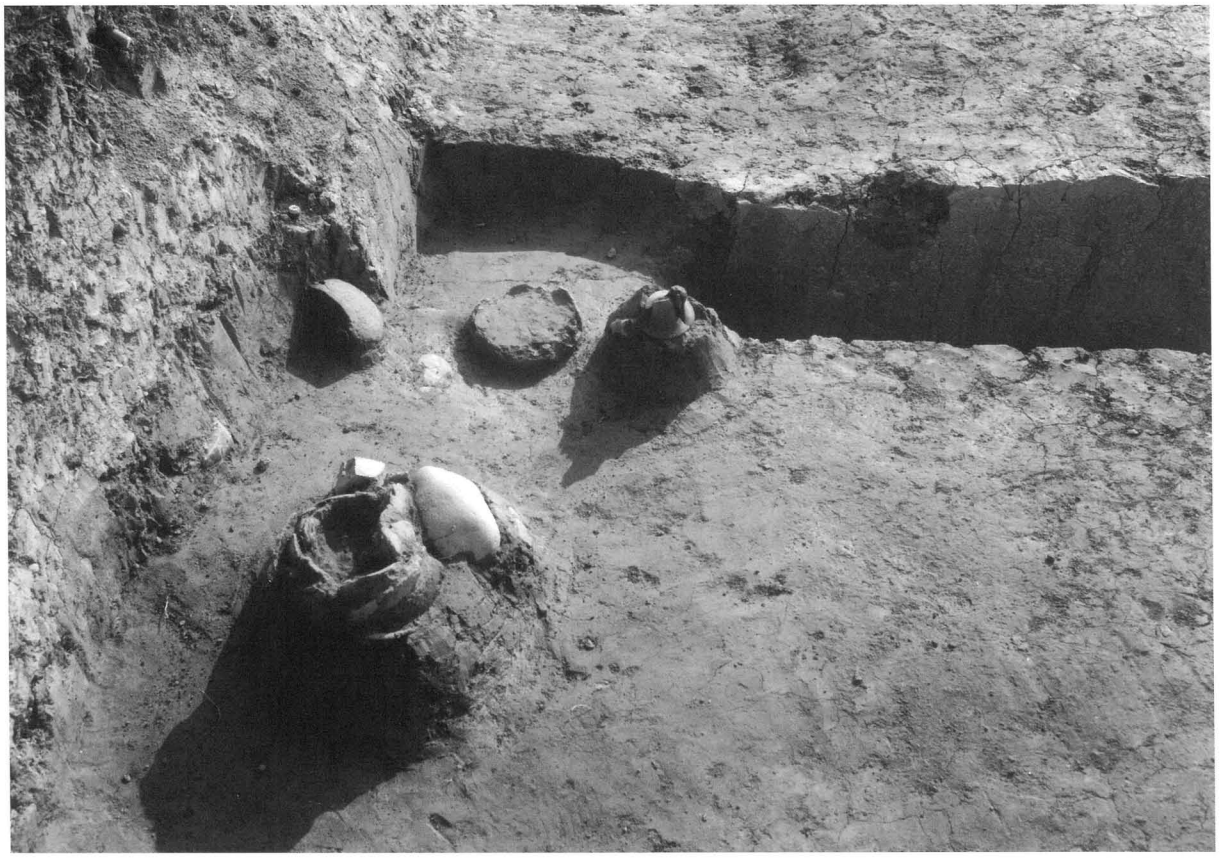
1　第１遺構面ピット・土坑（北から）

2　第１遺構面南側遺構（北から）

１　第１遺構面須恵器出土状況（北から）

２　第１遺構面カワラケ出土状況（北から）

白岩下遺跡　図版５



1　第１遺構面土師器出土状況（北から）

2　第１遺構面土器出土状況（西から）

1　第２遺構面SD07土器出土状況（北東から）

2　第２遺構面SD07（新）完掘状況（東から）

白岩下遺跡　図版７

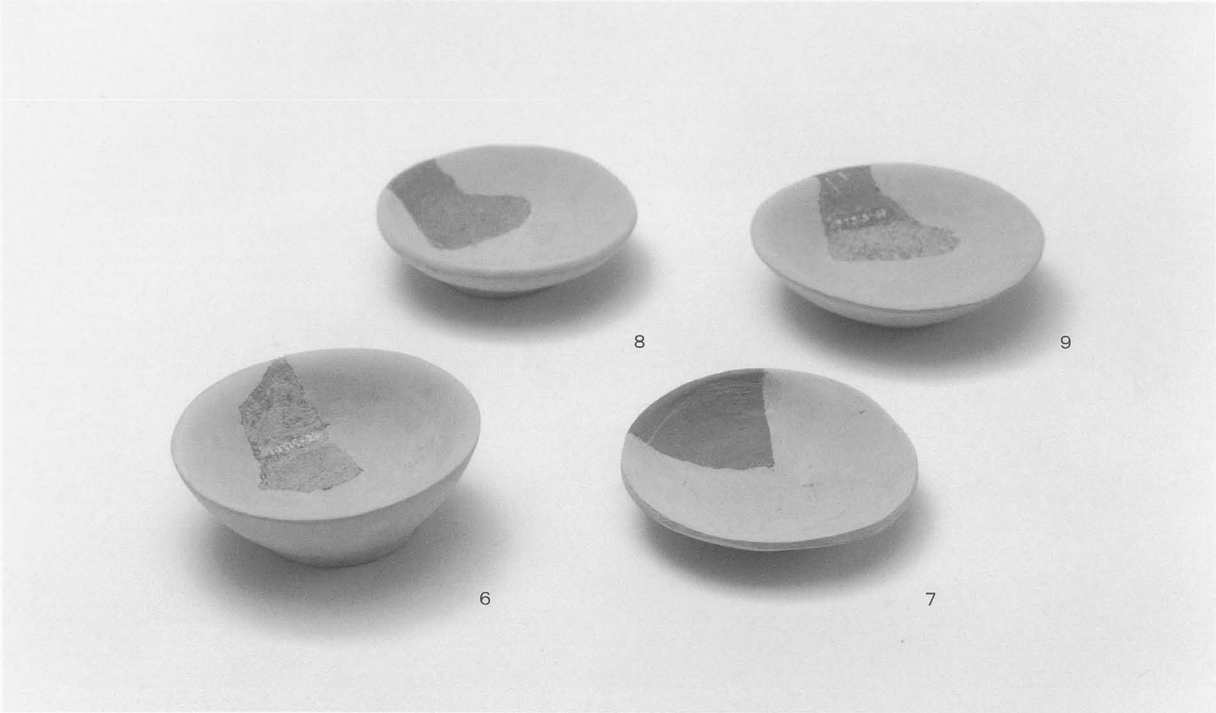
1　第２遺構面SX01（北から）

2　第２遺構面SX01（東から）

1　第２遺構面SX01（南から）

2　第３遺構面SD07（旧）完掘状況（東から）

白岩下遺跡　図版９



白岩下遺跡出土遺物１

10

14

11

15

12

16

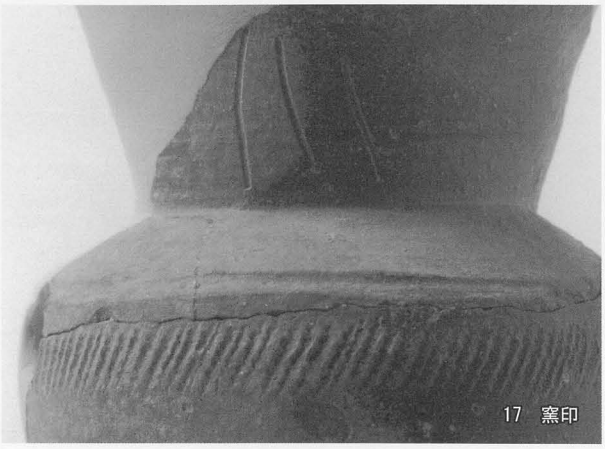
13

16　内面のあて具痕

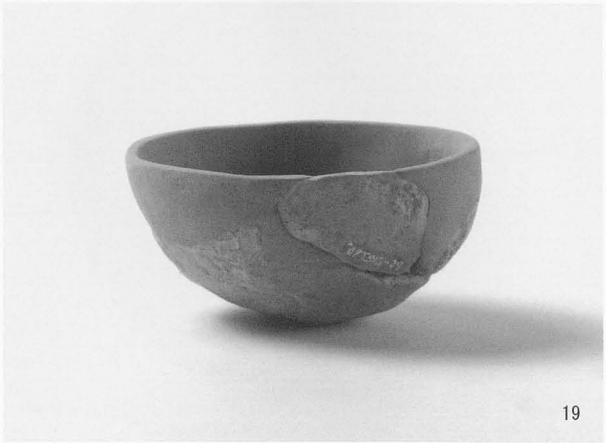
白岩下遺跡出土遺物２

白岩下遺跡　図版11

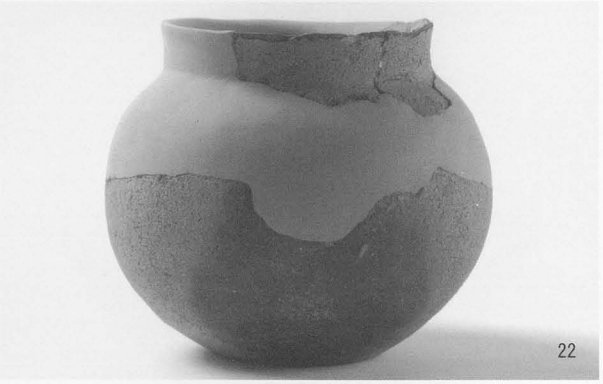
17


17　窯印

18


19

21

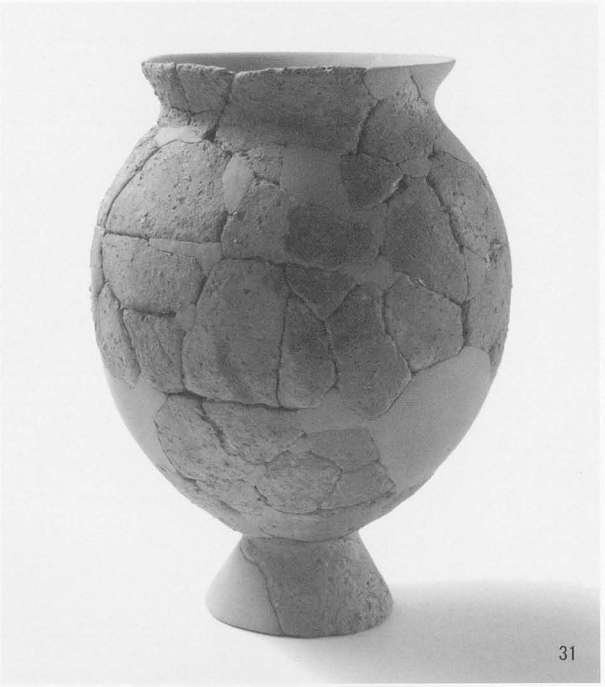

22

23

24

25

白岩下遺跡出土遺物３



白岩下遺跡出土遺物４

白岩下遺跡　図版13

40

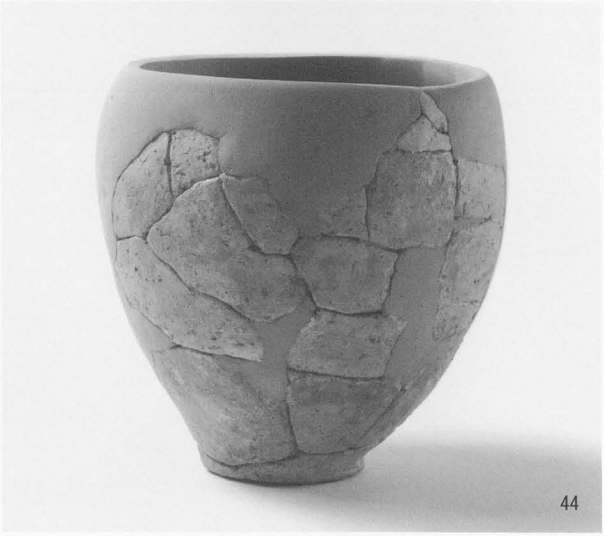
46

41

51

43

52


44

52　台部裏面

54

白岩下遺跡出土遺物５

報告書抄録

ふりがな	しらいわいせき・しらいわしたいせき
書名	白岩遺跡・白岩下遺跡
副書名	平成18年度一級河川西方川住宅市街地基盤整備(統合河川)および 平成19年度一級河川西方川総合流域防災事業(統合河川)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第220集
編著者名	足立順司　長友信
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号　TEL054－262－4261(代表)
発行年月日	2010年3月5日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
しらいわいせき 白岩遺跡	しずおかけん 静岡県 きくがわし 菊川市 かもあざはちまんまえ 加茂字八幡前	22224	83	34度 44分 59秒	138度 4分 51秒	2007/11/29 ～ 2009/1/9	490㎡	一級河川西方川総合流域防災事業工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
しらいわしたいせき 白岩下遺跡	しずおかけん 静岡県 きくがわし 菊川市 かもあざひがしはざま 加茂字東狭間	22224	109	34度 44分 44秒	138度 4分 53秒	2006/12/9 ～ 2007/3/26	235㎡	一級河川西方川住宅市街地基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
しらいわいせき 白岩遺跡	集落	弥生	ピット　自然流路	弥生土器　石器　土製品 木製品	
	散布地	中・近世		山茶碗　陶磁器	
しらいわしたいせき 白岩下遺跡	集落	古墳～奈良	ピット　祭祀遺構 土器集中　自然流路	須恵器　土師器	
	散布地	近世		陶器　カワラケ　山茶碗	

ようやく 要約	白岩遺跡は菊川市加茂に所在し、当地域を代表する弥生時代中期～後期の集落遺跡である。 今回の調査地点では、大・小の自然流路が多数検出され、上流の集落から運ばれてきた大量の土器・石器・木製品が出土した。集落からやや距離を置いた地点と考えられる。 白岩下遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡で、古墳時代の包含層では、旧流路の際で水に対する祭祀を行った遺構と、それに伴う遺物が検出された。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第220集

白岩遺跡・白岩下遺跡

平成18年度一級河川西方川住宅市街地基盤整備（統合河川）
および平成19年度一級河川西方川総合流域防災事業（統合河川）
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010（平成22）年3月5日

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20
TEL　(054)262－4261㈹
FAX　(054)262－4266

印　刷　所　みどり美術印刷株式会社
〒410－0058　静岡県沼津市沼北町2－16－19
TEL　(055)921－1839㈹